二〇一五年　和（かず）　大学三回生の秋

和は、野球で推薦入学した東京産業大学の先発投手の一員として、【実力の帝都リーグ】と言われる帝都大学野球連盟の一部リーグで活躍していた。

和は、がむしゃらになっていた。

肘が痛むそぶりを全く見せず、監督から先発を任された。

監督　「錦織。大切な試合だ。お前に任せたぞ。」

和　「はい。」

この日も、球に切れがあり、内外角に投げ分ける素晴らしい投球をしていた。いつものように無表情で。８回表までは。

先頭打者が内野エラーで出塁し、ワンアウト後盗塁を決め、本日当たりのない打者が送りバンドをし、ピンチの場面で和はいつものようにグローブに何やら願い事を唱え、強打者との勝負の、まさにその時である。

和　「あっ！」

和は、投げた瞬間、肘の痛みに耐えかねて、マウンドにうずくまった。

ボールは、ストライクゾーンを大きくそれ、ゆっくりとバックネットまで転がり、３塁走者は生還した。

その後、アンパイアのタイムの宣告と同時に、二人のチームメートに両脇を抱えられ、そのまま病院へと送られた。

医者は、病院へ付き添った舞に病状をこう話をした。
医者　「あなたは錦織さんのご家族の方ですか。」
舞　「えっ、ええ。」
医者　「ここまで、痛みがないはずはない。今は、薬を投与して痛みはあまりありませんが、明日、オペをします。」
舞　「そんなに悪いのですか。」
医者は、少し間を置き、こう答えた。
医者　「ここまでたちの悪い遊離軟骨はあまり例がない。日常生活には、支障はないように何とかできると思いますが、、。野球となると。一年はかかると思います。」
舞　「えっ。最低一年、、、。大学時代もう無理なんですか？」
医者　「彼次第です。きついリハビリに彼がどう向き合うか。あとは、彼次第です。」
舞は、そのことがあまりにも悲しくて、和に病状について話をすることが出来なかった。
手術は、無事終わった。
舞は手術から二日後、病院を見舞った。
和は、医者から自分の病状を聞き、野球が当分出来ないことを知っていたが、いつも通り表情を表に出すことなく、舞を心配させまいと。
和　「いろんなピッチャーも、肘を痛めては手術してまた投げるんだ。スピードが増すピッチャーもいるんだ。」
舞　「和。当分投げれないって。先生からも言われたでしょ。ってか、なんで痛いっ

て言わなかったの。ずっと痛かったでしょう。それが美談なの。分からない。
どうして、弱音を吐かないのよ。」
舞は、和のベッドに泣き崩れたのだった。
和は、ぐっと歯を食いしばりながらも、無表情のまま、何も言わなかった。
そして和は眠りについた。

かなぎ

一九五一年　啓介　　十二歳の夏

啓介は、学校帰りにいつもどおり、生まれた時からまるで親戚のように育ってきた隣に住む同級生の太と、防波堤にいた。

ここのあたりの防波堤は、近年ではコンクリート製の大きな函型のものに姿を変え、二人がいつもいる石積みのものは、目にすることがほとんどなくなった。

しかし、二人はここが大好きだった。なぜならコンクリートのものより、水面に近く、何よりもコンクリートのようにざらざらとした感触ではなくすべすべとし、温かく、心地よい肌触りであった。

太の母　「お前やちゃ、またここにおーててや。（いるのかい）」

太　「日向ぼっこしちょー（している）とこだわや。」

太の母　「たまにゃ帰って勉強すーだわや。（しなさいよ）」

太　「何やー！」

太の母　「啓介にお前のだあずが（おバカが）うつーわや。」

太　「啓やんとわしは、一緒にかなぎ方になー約束しちょーわや。（しているよ）だけ

ん（だから）、勉強はせんててえーわい。（しなくてよいから）なー、啓やん。」

啓介　「わしゃ、かなぎ方になーことに（なることに）決めちょーよ（決めているよ）、おばちゃん。わしゃここで、かなぎして生きーけん。」

太の母　「そーだてて（それでも）もうちょっとくらいは勉強せえや。こっちが恥ずかしいわ」

太　「何やー！」

お調子者の太と、少し堅物の啓介は、いいコンビだった。

かなぎについて

十六島（うっぷるい）では、この地域に伝わる採貝漁業【かなぎ漁】を略して【かなぎ】という。そして【かなぎ】を行う者を【かなぎ方】と呼ぶ。

伝馬船に一人乗り、足で巧みに舵を切る。

箱メガネを口で押さえて海底を覗き、アワビやサザエを見つけては、約５メートル前後で、先が３つに分かれた銛を使い獲るという伝統漁法である。

この地域では、かなぎ以外でアワビやサザエを獲ることを禁じている。

また、資源の増殖として、小さなアワビの種をタコなどの外敵から守るため、瓦を２枚併せ、その内側へ種を付着させ、種が通れるほどの升目の網に入れ放流する。

一連の作業は、丁寧に丁寧に共同で行う。そして、外敵のタコやヒトデの駆除もかなぎ方のみんなで行う。

かなぎは、波が非常に穏やかで、透き通るほどの水質の日でしか行われなく、また、アワビは十月と十一月を、サザエは五月と六月を、それぞれ産卵時期であるため禁漁期間としている。

非常に技術を要する漁法である上、出漁日数も限定されることから、年々かなぎ方は減ってきており、今やこの十六島では５人となった。

一九五九年　啓介　二十歳の春

啓介は、中学の卒業と同時に太とともに漁師となり、十六島の定置網に乗りつつ、かなぎ方に手ほどきを受け、ようやくそれなりに生計を立てれるようになった。

かなぎの素質は皆が認めていた。

しかし、かねてから、好意を抱いていた太の妹、正子には恋心を打ち明けられずにいた。

正子も啓介にまんざらではない気持ちを抱いていた。

春の陽ざしの澄んだ青空の日に堅物の啓介は、正子に告白するのだった。太の援護射撃を得て。

啓介と太は、二人して、漁の前時期に漁具の手入れを船揚場でしていた。

太　「こーから、また漁がはじまーのお。（始まるなあ）」

啓介　「そげだのお。（そうだね）」

太　「こげな（こんな）銛も今作れーもんがおらんとや。（作れる者もいないらしい）この銛がなーなったら（なくなったら）、かなぎもおわーかのお。（終わりだろうか）この前、センターのもん（漁協の職員）が持ってきた、県外の鉄鋼会社が作った銛や、やっぱ貝が割れて駄目だったけんのお。（ダメだったからなぁ）」

啓介　「こぎゃん（こんな）、粘りがある鉄、打ってごすもんは（打ってくれる者は）、今頃じゃなかなかおらんかのお。（おられないだろうか）海はおらやつで（自分たちで）守れーが銛は作れんだけんのお。（作れないからなあ）」

正子は、母に言われて、晩御飯の知らせを太に告げるよう船揚場まで太を探しに来た。

正子　「ここにおったん。（いたの）母ちゃん晩ごはん出来たってよ。」

太は、そんな正子を嘲笑うよう、こうからかった。

太　「正子、お前も、ちーたー（少しは）飯作れーよーに（作れるように）ならんといけまいがあ。（いけないだろう）」

啓介の前でからかわれた正子は、少し怒ってこうつぶやいた。

正子　「やめてよ、兄ちゃん。啓あんちゃんの前で。なんぼか（いくらか）作れーよーに勉強しちょーわ。（勉強しているわ）」

更に太は、正子をおちょくるのだった。

太　「正子、おまえはブスだけん、せめて飯は上手に作らんと誰ももらってごすもんおらんけんのー。（もらってくれる者はいないからなあ）啓やんお前もそげ思っちょーだーが。（そう思っているだろう）」

一連の太の正子に対する侮辱に対し、啓介は、憤るのだった。
啓介　「そぎゃんことない。（そんなことはない）正子は、気建もいいし、、、。飯は、おれがうまい魚獲りゃ刺身なと、煮てもごっつぉだ。（刺身もいいし、煮てもうまいだろう）」
太　「啓やん、お前何言ちょーや。（何言ってるんだ）」
その時正子は、真っ赤な顔をして、うつむきながら頷いていた。
太は、小指を曲げて二人の顔を交互に見入った。
太　「お前やちゃ（お前たちは）、できちょーかや。（できているのか）」
そして、次に、卑猥な手のしぐさで関係をもったか問いただすのであった。
太　「まさか、きゃんことやっちょらんわのお。（こんなことやっていないだろう）」
少し怒りながらも、啓介は、ここで自分の気持ちをあらわにしたのだ。
啓介　「わわ、だらずか。（お前は、馬鹿か）けどよ、正子。お前、ここでわしとずっとおってごしなんか。（ずっと一緒にいてくれないか）おら、お前とここでずっと生きたい。」
あっと、驚きながらも、正子はためらいもせず、こう答えたのだ。
正子　「あたしでよかったら。啓あんちゃん。一緒にいたい。」
太　「なんじゃ、おみゃーらわ。（お前たちは）ホントかいな。こりゃ、みんなに言いふらさないけんわ。（言いふらさないといけない）啓やん、お前本当に、やっぱしやめたはないけんのお。（やっぱりやめたということは許さないからな

あ）おらのかわいい妹だけんのお。（妹だから）」
太は、大きな声で、十六島の家々に向かって本当に言いふらしたのだった。
そして、船揚場に残った啓介と正子は、初めて手を握り、肩を寄せ合った。
それから数カ月後、啓介と正子は十六島のお宮で挙式を挙げ、集会所で披露宴を挙げた。
太　「達者で暮らせよ。」
太は涙ぐんで正子を送るのだった。
正子　「兄ちゃん、家、隣だけん。毎日会えーだけん。（会えるから）」
正子は、呆れながらも喜んでこう答えた。

翌年正子は、長女　明子　を、次の年次女　景子　を出産した。

その年の恵比寿祭りの夜のことである。
漁師たちの豊漁と安全な漁を祈念して、毎年十六島の村人挙げて賑わう。
とうや　「今年、お蔭さまで無事とうやを勤めることが出来ました。ありがとうございました。」
区長　「ほんなら、直会（なおらい）に入ります。来年にめがけて（来年に向かって）、よき年になりますように。乾杯。」

宮では、神楽が舞う。
隣の間では、ここ十六島で古くからおこなわれている、祭りへの寄付に対する返礼品としての絵詩【花】を書き手が描く。

区長　「清っさん。そーにしたてて、まいさん（それにしてもお前さん）、まいこと（うまいように）描くのお。大したもんだわ。」

太　「清っさんも描き手の跡取りがおーけに（跡取りがいるから）、心配なしだのお。おらも、また男ん子が出来たけんかなぎもいすこに継げーわゃ。（いい塩梅に継ぐことができる）啓やんお前は、おなごん子ばっかだがや。（女の子ばっかりだな）」

啓介　「みちょってみぃ（見ていろ）。いんまに作って見せーけん。（今に作って見せるから）」

馬鹿話が弾み、みんな笑顔で酒を酌み交わし、夜は更けていった。

二年後正子は、三人目をやどした。

啓介　「正子。頑張れよ。」

正子　「うん。あんた。また、おなごん子だったらごめんね。」

啓介　「なにいっちょーや。（何言っているんだ）無事に赤ん坊生んでくれ。」

啓介と正子に、めでたく男の子　拓海　を授かった。

正子　「ついとった。」
啓介　「よっしゃー。」
二人は、手を握りしめ、涙を流すのだった。

一年後
この地方には古くから、初めての誕生日の祝い事として、餅を背負わせ、正面には、そろばん、筆、お金を並べ、赤子にハイハイさせて取らせ、将来の職業を占うという【選び取り】という儀式がある。
正子　「お金取れよ。大金持ちになれよ。」
明子　「あっ、拓海　筆取ったぁ。」
啓介　「拓海は、ええ花の描き手になーかのぉ。（描き手になるのかなあ）」
この選び取りで筆をとる場合は、一般的には勉学にいそしむと言われているが、見守っていた大人たちは、立派な花の描き手になる予感に、心躍らせた。
皆が沸いた一日であった。

拓海　十五歳の時

近年になって、都会のほうから、ウェットスーツを着たダイバーが、アワビ、サザエなど魚介類を捕るという噂が流れていた。

また、それらの悪党は、二人組で潜って貝を捕り、捕った獲物は一旦海に目印を残しておき、ダイバーが陸に引き返す。すぐさま着替えてアルミボートで獲物を引きずりあげ、持ち帰るという巧みなチームワークであった。

太　「啓やん、さっき釜（十六島町の山を隔てた隣の集落の釜浦町）の健おっつぁんがいっとたが、ダイバーが釜に来たとや。たいそ（たくさん）捕って帰ったって。どげんだいならんだったとや。（どうにもこうにもならなかったらしい）」

二人は、幾ばくかの危機感を覚えた。

その夜、啓介は、いつものように八時過ぎに床についた。

だが、近年かなぎが始まるといつも悩まされる耳鳴りで、なかなか眠れない。

啓介は、十二時前に、いたたまれず蒲団の上で上半身を起こし、首を右に三周、左に三周回した。首は、ギシギシと音を立てた。

啓介　「くそー。」

正子は、静かに起き、そっと啓介の肩を揉みこう話した。

正子　「あんた、無理せんでね。朝のかなぎはお休みすーだわね。」

この地域でのかなぎは、早朝と夕刻のなぎ（潮がなぐ）の時に行われ、潮がさす昼のうちは、漁具の手入れや一本釣りに出かける。

啓介　「最近潮もいいし、昼間はイサキが回っちょーけん（回っているから）、今稼がにゃいけまいが。（いけないだろう）」
正子　「あんた、いつもすまんねえ。」
啓介　「おー、だいぶ楽になったけん（楽になったから）、ねーかのお。（寝るとしよう）」
そう告げた啓介の背中を正子は、ニ回上下にさすり、二人は寝入った。

そして数日後の穏やかな晴天の日、啓介と太は、かなぎに出掛けていた。
あたりは、風の音すら聞こえないくらい静寂し、まるで、風呂場の天井から水滴が落ちるときに聞こえるように、ピトッ、ピトッと銛の歯先から海へ滴る水滴の音が聞こえる。
太　「啓やん、そろそろ陽がくれーが（暮れるが）、帰らんかや。（帰らないか）」
啓介　「おー、暗んなってきたけん（暗くなってきたから）、あがらこい。（終わりにしよう）」
そうした時だった。十メートルは離れているであろう海面から、小さな泡が無数にあがってくる音が聞こえる。
啓介　「おい、太。そこんとこ、なんぞあばば（泡）が湧き出ちょーが（出ている）、ほー。」
それは、ダイバーの噴き出す泡が水面ではじける音である。

二人のダイバーは、まさに今密漁を終え、捕ったアワビやサザエを大きな鉛入りの細いおよそ二〇メートル位もあるロープに結んだ網袋に入れ、岩陰に隠れるよう海底に置く。そして海底に這わせた黒い鉛入りのロープの片方にテグスを結び付け、海面からおよそ三メートルくらい下のところへ、小型の電気浮きを浮かせるという巧妙な仕掛けを作っていたのだ。ダイバーたちは、啓介と太に見つかり、少しあわてた様子を見せたが、すぐさま小慣れたしぐさで、プイっと陸の方へ向って行った。

ダイバー「おっ、ヤッベー。まあ、見つからないよ。さっ、帰ろっかぁ。」

啓介　「お前やちゃ（お前たちは）ここで何しとーかい。おい！」

ダイバーたちは、素知らぬ顔で去って行った。

啓介と太は、真っ赤に染まる海面を見渡した。

特に啓介は、箱メガネを使ったり、懸命に男たちの仕業を探した。

しかし、この静寂な中、耳鳴りが邪魔をし、集中力を欠き、何も見つけることは出来なかった。

啓介は、「くそー。」と呟き、首を右に三周、左に三周回した。

十数分たったころだろうか、陽は落ち、あたりの空と水面が闇に包み込まれようとした時、見知らぬ顔の男二人が、センター（漁協）の駐車場でワンボックスカーの天井から一隻のアルミボートを下ろし、岸壁の横の船揚げ場から海に船を出し、岸壁に横付けしていた啓介と太の船のそばをゆっくりと通り過ぎようとしていった。

啓介　「あんたら、こーから何かい。」

男たち　「ちょっとそのへんでイカを釣ろうかって。」
アルミボートには、大きな白いクーラーボックスが積まれていた。
数分後、釜の健おっつぁんの話を思い出し、胸騒ぎを覚えた啓介は、とっさにエンジンを全開にし、追っかけて行った。太も後を追った。
男たちは、山や岩の位置を確認したうえで、あたりをつけた位置でエンジンを止めた。ボートの上から海面を覗きこみ、暗くなった海の中からほんのり赤く光る小型の電気浮きを見つけた。鍵の手が付いた竿で浮きを手繰り寄せ、ゆっくりとゆっくりとテグスを引く。そして、鉛のついたロープを手で引き、獲物の入った大きな網を二人がかりでボートに揚げたのだ。
そしてまさにその時、啓介はアルミボートに船ごと体当たりした。
アルミボートから海に投げ出された男たちは、ライフジャケットも着用していない。突然のことに慌てふためきながらも、やっとのことでアルミボートにつかまった。
男たち　「おい、危ないだろう！」
啓介　「その網袋、こっちに見せてみぃ。」
男たち　「・・・・・」
そして次の瞬間啓介は、アルミボートに上半身を投げ込み、アルミボートのエンジンキーを引き抜き、海に投げ捨てた。
啓介　「潮で沖まで流されろ。反省せ！」
男たち　「ボートにも上がれない、オールもないんだ。助けてくれ」
啓介は、男たちの言葉に耳もくれず、素知らぬ顔をして、センターへと帰ってしまった。

それを見かねた太は、男たちの獲物を自分の船に揚げた後、アルミボートの前の方に、自分の船にあったロープを結び付け、曳航しようとした。

太　「おらやちゃ（俺たちは）、おぜもんねーけんのぉ。（怖いもんなしだから）」

男たち　「俺らは、光った浮きがあったので、手繰り寄せたらこんなものがついてきたんだ。俺らが捕った証拠なんかないだろー。」

太　「何や。ほんならロープ離すわ。お前ら、勝手に帰らっしゃい。（帰れよ）」

男たち　「あー、ごめんなさい、ごめんなさい。」

太　「どげかい。観念すーかい！」

男たちは頷き、観念した。

その後、岸壁に太の船とアルミボートは接岸し、男たちは、近くの駐在が待ち構えるセンターの下へ連れて行かれた。その後、取り調べによりダイバーと男二人は同一人物であることが分かった。

駐在は、すぐさま本署の方へ連絡し、その後、啓介にこう諭すのだった。

駐在　「啓介さん。あんましやーと（あんまりひどいことをすると）犯罪になーがや。（なるよ）わしもあんたを捕まえたくねーけん。（捕まえたくないから）」

太　「こら駐在、おまえしゃん事したら（そんな事したら）、海落としちゃーぞ。（落としてやるから）」

駐在　「けー、だけんお前やちゃ手にゃわずだわや。（だからお前たちは手が負えない奴らだ）」

パトカー二台が到着し、センターには、漁協の職員やら、地元の漁師方などたくさんやってきた。
あまりに、物々しい雰囲気に、男たちは恐れおののく姿をした。
その啓介と太の取った行動の一部始終は、地元に住むものにとっては、とても武勇に映った。
しかし拓海の心の中には、違う感情が芽生えた。
拓海は、こう思った。

いつか、海を愛するダイバーとうまく共生できないだろうか。

拓海は、勉学に長け、後に地元の進学校に進み、３年後、名門【横浜大学】に進学した。
横浜大学では、経済工学部に在籍するとともに、ダイビングサークルに所属した。
ダイビングサークルでは、ライセンスを取得し、積極的に仲間づくりにいそしみ、たくさんのダイバーや多くの地域との交流を持った。
ダイビングに行ったそれぞれの地域の漁業者の人々とも交流を持ち、地域ごとの海のルールを遵守するとともに、海を愛する者同士の信頼関係を構築していったのだった。
４年間の大学生活を終え、大手ゼネコン【㈱拓殖建設】に就職した。
拓殖建設では、企画開発部で多くの開発事業に携わり、そして、そこで出会った同僚の里美と恋に落ちた。

数年後、拓海は里美と結婚した。
奥出雲に嫁いだ長女　明子。
近所に住む日野清の長男で、拓海の同級生の漁協に勤める　栄一　に嫁いだ次女　景子　に続いて。
東京であった拓海の婚礼から帰った啓介は、話を聞きに訪れた太に婚礼の様子をこう話した。
啓介　「かまぼこも出らへんだった。（出なかった）」
太　「うそだーが。（嘘だろう）」
啓介　「だけん（だから）、帰りに豆腐かまぼこ買ってきたわや。（買ってきたところだ）」
啓介は、駅前で買った紅白の豆腐かまぼこを差し出した。
啓介　「最初に、スープが出て、刺し身もなんだい（刺身もなんと）数切れ野菜にまぜこぜなもん。（混ぜたようなもの）赤飯も、鯛なとなかったわ。（鯛もなかった）」
太　「飲みもんは、何飲んだかや。（飲んだの）そーでも（それでも）うまい焼酎なとあっただらが。（焼酎くらいはあっただろう）」
啓介　「ビールもなかなか出えへんだったわや。（出なかった）サイダーみたいなもんで乾杯だったわや。（乾杯だった）」
太　「さ、なんきゃい。（それは、なんてことだろう）都会の婚礼は、そぎゃんことすーてやや。（そんな事をするのかい）」

啓介　「だも（しかし）、こーで、三人とも片付いたが、みんな出て行ったわ。」
太　「景子は、そーでも（それでも）栄一のとこにおーけん（いるから）、何かあったとき帰ってごすわな（帰ってくれるよ）。まっ、めんどー見てごすけんおなごん子のもんだてて。（面倒を見てくれるから女の子のもんだ）おらやちゃ（俺の家は）、男ん子ばっかしで、みんな出て行ってしまっただけんのお。（出て行ってしまったから）」

啓介は、ここぞとばかり、この話題のうっ憤を晴らすのだった。
啓介　「わしゃ、うまいすこ作り分けれたわや。（うまい具合に作り分けれた）」
太は、右手のひらでおでこを二度たたき、「まいった、まいった」と呟き、二人は腹を抱えて大笑いしたのだった。
啓介　「さ、焼酎いっぱいのまこい。（飲もう）」
いつものように二人は焼酎を飲んだ。　穏やかな一日の終わりに、、、。

二年後、拓海と里美は、長女　七海　を、またその三年後に、長男　和　を儲けた。
一家四人、とても幸せに西東京の高層マンションに居を構え暮らした。
里美は、主婦となり日々子どもたちの世話をかいがいしくした。そして、夜遅く帰ってくる拓海を手塩にかけ料理を作って温かく迎えた。
拓海は、企画開発部地域開発課のグループリーダーとなり、大きな都市開発やレジャー施設

の開発の現場や関係する会社、団体、地元との調整役を任されるようになった。
そうしたころ、社内での滞在型レジャー施設の企画コンペの募集があった。
拓海は、拓海が所属する部署の渡部部長と園山課長に、出勤そうそう部長室に呼びだされた。
拓海　「おはようございます」
渡部部長「ああ錦織君、まあ座りたまえ。君も本社で長きにわたって大きなプロジェクトに携わってきた。多くの実績も作ってきた。とても感謝する。君が拓殖建設の将来を担う一人と、園山課長ともども期待している。君の今までの努力は、常務をはじめ役員も非常に評価している。さて、早速本題に入ろう。君も社内掲示板で企画コンペを見ただろうが、大型滞在型レジャー施設の企画コンペに応募しないか。いや、応募するんだ。これから君には、企画にも携わり、調整役の仕事をする面でも、企画者の、その企画の真髄というか、心を十分に感じ取って仕事に当たってほしいんだ。」
園山課長「錦織君。まあ、自分の企画が形になっていく様をそろそろ見届けたいだろう。ただ、知っている通り、この拓殖建設の企画コンペに通ることは、並大抵のことではない。部長がおっしゃる通り、チャレンジしてはどうか。やってみろ。」
企画コンペの募集を見て、応募したいという興味があるものの、踏み出せなかった拓海は、すぐさま決意したかのように「はい」と力強く頷いた。
部長室から見える夕暮は、まばゆいくらい赤く染まり、拓海の顔を照らした。それはまるで十六島の夕日のように、、、。

それから半年後、拓海は、園山課長から部長室に来るよう呼ばれ、ソファーに座るよう促された。

拓海が部長室に入るなり、部長から企画コンペの結果が伝えられた。

渡部部長「結論からまず言う。おめでとう。」

拓海　「・・・・・」

拓海は、信じられなかった。

渡部部長「応募された企画の中から優れたものを先般役員会で審議され、君の企画が最優秀に決まった。これからこの企画をどこでどのように実現していくのか、更に具体的なプロジェクト企画として作成し、役員会でプレゼンテーションしてもらいたい。プレゼンは、三カ月後だ。やってくれるな。」

園山課長「よくやった錦織。やるしかないんだ。」

拓海　「光栄です。是非。」

拓海は、誇らしさと、不安な気持と、邁進しようとする気持ちが心の中で入り乱れ、両手とも、膝上のズボンの生地をつまみ握りしめた。

三カ月間、拓海はプレゼンの資料作成に没頭し、自分の気持ちや想いを傾注した資料をようやく完成させた。

そして、役員会が開催され、プレゼンが始まった。

プロジェクト名『滞在型マリンレジャーと地域社会との融合（持続可能な地域社会の共創）』

拓海が、小さく会釈をし入った役員室には、プロジェクターが設置され、すでに企画のタイトルが映し出されていた。

そして、進行する渡部部長の指示に従い、拓海は、動じることなくプレゼンを開始した。

「企画開発部の錦織です。それではよろしくお願いします。

この事業地に関する概要についてまず説明します。

事業地ですが、島根県の東部　平田市の海岸沿いの遊休地約三ヘクタールです。

この場所は、出雲空港から約三十分、一畑電車雲州平田駅からバスで約二十分の位置で、前面は日本海　十六島湾　に面しています。

近年高速道路のインターチェンジも、約三十分のところに開通しています。

この十六島湾には、北浜地区、西田地区、鰐淵地区が介在し、海岸部の人口は約二千人くらいです。

おもな産業は、もちろん漁業ですが、ここ十六島湾では、定置網漁業、一本釣り漁業に加え、わかめ養殖や、かなぎ漁と言う採貝漁業が主な沿岸漁業の漁業種です。

さて、次に開発のコンセプトですが、『自然、地域、資源との共生』と掲げています。

理由としては、現代はいわゆる飽食の時代と比喩されるように、様々なレジャーが金銭という対価によって、作られたレジャー施設をあたかも当たり前に提供され、消費者も作られた人工の施設を何ら疑問を抱くことなく享受してしまう時代です。

私が提案する企画は、これから我々が将来に残すもの、そして一番守っていかなければなら

ないこと、そうです我々が受け継いできたものを再度確認し、後世につなげていかねばならない『自然、地域、資源』、それらを体験型のレジャーの中で少しずつ消費者に感じていただき、回想していくよう、そして共有・共生できるような動機付けの場を作ることです。
素朴な自然の中での真のレジャーを通して。
では、具体的なプランについて説明します。
施設整備の概要としては、全体の施設整備を樹木が植生する小高い丘によって囲み、事業地内から外の自然以外の建造物が見えない空間をプロデュースします。このことによって、滞在者に別世界に来た印象を持ってもらいます。日ごろの様々なストレスから解放し、真っ白な素の状態になっていただけると思います。
次に、施設の整備ですが、自然と言いましても、やはり日本海に面する地形ですので、天候に左右されないなどの整備の工夫が必要です。
まずメインの施設としての人工海浜は、海水を滅菌処理したものを、人工の波をたてます。浜辺の砂は大社湾の自然の砂を用い、視界に入らない位置での開閉式のドームを整備します。
特徴として、全体的なレベル（高さ）を約八メートルとし、浜辺の位置からも、泳いでいても沖の防波堤や港に係留している船舶などが見えないよう配慮します。海に映える夕日を望んだ時、この海浜と日本海があたかも一体のものであるかのように。インフィニティプールとして整備を進めます。
次に宿泊施設ですが、一週間くらいは滞在できるようにコテージタイプの客室を約八百室

設けます。
そして、コンベンションホールは、バーベキューが出来る箇所を含め食事が出来る場所、この地域の神楽や獅子舞と言った伝統芸能に触れるスペース、地元でとれるたくさんの魚や農林水産物を扱う市場などを配置します。
また、隣接する湾内にメガフロートを設置し、マリンレジャーやオプショナルツアーの発着場として活用します。
この場所から、隠岐諸島まで高速艇で一時間ちょっとの距離であり、十分オプショナルツアーとしての可能性はあります。
こうした施設の整備ポリシーについては、どういう利用をしていくのか、どういう滞在をお客さまにアプローチしていくのか。そこのところのソフト面をプラニングして施設の整備を行っていきます。
ソフト面のプラニングでは、まず、利用していただくお客さま方を年代別・グループ別に考慮していきます。若者や、家族世帯、高齢者の方々、それぞれ過ごし方も多様でしょうし、また、ここでは、小・中学生の体験型の修学旅行も考えていきたいと思っています。
そして、プラニングの過程では、この地域の資源を地域の方々と、月ごと、季節ごとに列記していきます。そうしたこの地域の資源について、ここに住む方々とともに、食の素材から、産業、伝統芸能様々なもの全てを今一度洗い出していきたいと思います。
そうしてできた、カレンダー、この地域の独自の暦を作り上げ、その中から、滞在者にオプショナルツアーとして選択していただきます。

例えば、漁業者とともに、春にはメバル釣りに出掛けてもらったり、或いは定置網漁船に乗船してもらい、秋には稲刈りに行ってもらい、焼き芋を焼いて食べたり、アジが獲れる季節には、一夜干しを作ってもらったり、、、、。
次には、この開発エリア独自の貨幣を作ります。
いま述べました、漁業体験でとれた魚を漁協に水揚げし、または、定置網や稲刈りの労力を独自の貨幣にし、その貨幣で、この地で揚がった魚介類や農産物など施設内の市場で購入し、滞在中の食材とする。もちろん魚の鮮度保持などは、漁業者などの指導のもと徹底していきます。
空いている時間に、地域の神社の落ち葉拾いに行ってもらったり、漁業の、例えばアワビの放流作業の手伝いをしたりとか、、、、。
ダイビングをする若者には、海岸の清掃活動をしてもらい、帰ったら、サザエの壺焼きや、みそ汁をふるまってもらったり、、、、。
ゆくゆくは、この地域独自の電子マネーの取り組みにまで持っていければと思います。
また、この取り組みによって、この地域の水揚げ額が向上し、経済循環が好転することにもなります。
つまり経済効果ですが、この湾内における水揚げ額は、年間おおむね四億円程度で推移しています。」
一人の取締役が、四億円と言う額に驚愕し、いたたまれず口に出した。
「たったそれだけか。」

「たったそれだけです。たったそれだけで、この地域に住む漁業者は精いっぱい生きているのです。そして、海や、伝統や、資源など継承しているのです。」
拓海の間髪をいれない答弁に対し、それまで下を向いて資料に目を落としていた役員も、拓海の熱意に触れたように感じ、思わず視線をあげた。
そして、拓海は続けた。
「当然水揚げ額の向上にも寄与し、労力の確保や、地産池消と言った経費の削減などの面から、沿岸漁業のうちの基幹的漁業種である定置網漁業の安定的経営にも結び付き、また一本釣り、はえ縄漁やかなぎ漁などの個人の漁業形態にも好影響を与えます。
また、この施設については、稼働率五十五パーセントとすれば、年間約四十万人の滞在者を得、約四十八億円の経済効果をもたらし、地域の漁業従事者以外の方々の雇用の場となり、漁業の活性化と同時に漁家所得の向上をもたらす相乗効果があります。
さらに、これらの仕組み作りによって、ＵＩターンなどの人口定住と言った第二第三の波及効果が発生することが期待されます。」
また、一人の取締役が質問した。
「施設内の市場の話とか、独自貨幣の話とか聞いたが、修学旅行生が同居するのはいかがなものだろうか。」
「この地域には、見方を変えれば一つの資源として、空き家があります。
もちろん、資源と言う言い方は変かも知れませんが、逆手にとれば、簡単にリノベーションできる施設なんです。実は。そこを逆手にとって。

ここを、リフォームして、シェアできるようにし、修学旅行生の班ごとの居住場所とします。
そこで、地域の漁業を実体験しながら、自分たちで考え、暮らしてもらいます。地域の方々に魚のさばき方や味付けなど教えてもらいながら。」
質問をした取締役は、大きくうなづいた。「現代の子供たちには、必要かもしれない。面白い。」
「まとめとして、この開発につきましては、冒頭『自然、地域、資源との共生』と掲げました。
私などが申し上げるのは、甚だおこがましい話かもしれません。
ただ、聞いてもらいたいんです。
日本は、戦争に敗れたのち、高度経済成長を遂げました。
今では、Ｇ８に加盟するなど、全世界も認める地位に達しています。
ただ、日本国内を見渡すと、、、、。
高度経済成長の名のもとに、経済も人口も太平洋側、ことさら大都市へ集中し、地方、とりわけ日本海側の漁村部の実態はと言うと、それは深刻なものとなってきました。
よく中山間で村の崩壊とか叫ばれておりますが、確かにそうでありますが、漁村部のことはあまり触れられていません。
いや、中山間地や農村部を軽んじているわけではありませんが、産業として、農業は兼業で成り立つ構造になってきている。農業は今後、農外参入や企業の参入も可能となってくるでしょう。

しかし漁業については違う。底引き網や巻き網などの大型の漁業種は企業の参入も見込めるでしょうが、漁村部を維持形成する沿岸漁業は、やはり漁村地域に居住する村人でしか営まれないのです。
しかも、兼業として営まれることが可能な生業でもありません。
高度経済成長とともに、金銭という物差しが生活の豊かさを示す尺度となり、この漁業から、そして漁村地域から人が減ってきた。
また、漁村地域は、居住スペースも狭かったり、慣習的な行事も多く、都市部の住宅地と比較しても、風、波など自然災害とも隣り合わせです。
漁業に従事する者が必然的に居住する地域、それが漁村です。
生死を分かち合う生業であるが故、神社も、お寺もすべて漁村ごとで維持されている。
だから、漁業の盛衰が、漁村地域の明暗を分けるといっても過言ではない。
いつか、滞在者にリピート性を持たせ、第二の居住者となってもらいたい。この地域の漁業と漁村の一助を担う仕組みを作っていきたい。
つまりこの企画は、漁業や漁村地域が必要としているヒューマンパワーを補い、将来的には居住者へと結び付ける。漁業と漁村地域の衰退に歯止めをかけることで、均衡ある国土へ再形成する、いわば国土開発であります。
わが、成長した大手ゼネコンこそ、今こうした取り組みをしなければならないのです。」
熱を持った言葉の波に、一同は飲まれそうになっていた。
「採算性はあるのか。」

拓海の熱い想いに飲まれまいと、冷静な意見が均衡を破るように出てきた。
「今までの利益追求型の開発と比べると、それは、採算性は極小です。ただ、我々企業自体の、社員も含めたイノベーションが必要な中、関連企業を含めた社員の厚生研修施設としての活用は十分考えられます。」
どこからか、せせら笑いも聞こえてくる。
「厚生研修施設とは、よくある言い訳じみたセリフだな。」
この機会を逃すまいと、たたみかけて質問が飛び出した。
「それでは一体いくらぐらいの事業費を想定しているんだね。」
「総事業費としては、百億くらいと考えています。ただ、我々は変わらなければならない。会社も、社員も。
過去においては、企業の利潤を追求するためだけに事業展開をなし、ようやく近年において、利潤を会社、投資家、社員の三者に分配するようになってきた。
しかし、これからの企業は四者、つまり地域社会や地域貢献という所への分配も、大手企業の責務ではないでしょうか。
そして、将来的には、そうした取り組みが報われる時代が必ずやってくると確信します。
我々は、地域とともに発展する企業でありたいのです。」
「百億とは、わが社にとっては多くもなく少なくもなくってところかな。はてさて、ところで地元の漁業者や住民の理解が得られるのか。それらの理解なしには、このプロジェクトは成り立たない。」

座長を務める川辺副社長がこうまとめた。
「今後あるべき企業像。わたしも、そうあってほしいと思う。
どうでしょうみなさん。地域開発のつもりが、地域内で意見が対立するような状態になっても、もともこもない。そういう意味からも、地域の理解が得られ、地域の方々がもろ手を挙げて賛同し、そして我々が向かい入れられれば、、、。という条件付きで、このプロジェクトを行っていくということでどうでしょう。」
役員は、みな起立し、拍手して了承した。
プレゼンが終わり、後日、副社長室に改めて、拓海に加え渡部部長と園山課長が招集された。
副社長　「錦織くん。プレゼンの準備から今日まで、本当にお疲れさんだったね。とても良い企画だと思う。利潤を会社、投資家、社員、そして地域社会や地域貢献という四者への分配。そこに心を打たれたよ。渡部部長、園山課長、これからもこの企画が進むよう錦織君のバックアップを頼むよ。」
二人は、ともに目配せをしながら頷いた。
副社長　「さて、具体的な地元地域へのアプローチなんだが。」
副社長から、島根県出身の富田代議士を介して地元有力者へアプローチするようアドバイスがあった。
地元地域、ことさら漁業者をはじめとする居住者の理解を得ることが最終目標となるが、そこへ外様である拓殖建設が、いくら知名度の高い大手ゼネコンとはいえ、スムースに受け入れられる確証はない。

しかし、こういう大型開発が地方で行われると、地方の建設業をはじめとする大きな経済的効果が見込まれることから、パイプ役として代議士の活動が功をなす場合が多い。そして、代議士が有力であればある程、地元自治体は動かざるを得なくなり、地元の理解を得る協力者となる。

拓殖建設は、地元自治体から誘致を得るような形として、地元に接触を行った方が、より理解が得やすく、事業進捗が図られるわけである。

数日後、秘書を従えた富田代議士と、副社長、渡部部長、園山課長と拓海は、平河町の老舗料亭で会食を行った。この老舗料亭は、代議士や官僚の霞が関の第二の会場（会議室）として使われる。

副社長　「富田先生、お久しぶりです。」
富田　「これは、これはご一同様。急にお呼び出しいただき、何ようで。」
副社長　「実は、こういう大型開発を島根の方でさせていただきたく考えておりまして。」
副社長は、一冊の企画書を手渡し、事業の概略を説明した。
富田　「拓殖建設が、島根で、、、。」
副社長　「わが社も地域貢献を、と考えまして。」
富田　「島根で、儲かりますかな。」
副社長　「未来への投資の意味もあります。」

富田　「、、、。」

副社長　「いずれ景気も冷え込むでしょう。そうした時、公共事業をはじめとするインフラ整備も陰りを指す時期が早晩来るでしょう。そうした時、今のように企業間で工事を譲り合うこともできず、まさしく競争の時代が到来します。ただ、発注者たる行政側も入札指名に際し、何らかの物差しを示すこととなるでしょう。その物差しの一つが、工事実績らに加え、社会貢献などの企業評価などかなと。」

富田　「なるほど、今そうしたことなどを霞が関でも検討をしているところだよ。さすが川辺副社長は、先見の目がありますな。島根のそこの事業地は、確か県議会議員の横山君の地盤だったよな。」

富田代議士は、そう秘書に確認をし、すぐさま県議会議員の横山議員に電話をさせた。

電話が繋がった。

富田　「お、横山君。元気にやっとるかね。実は、今日電話したのは、、、、。」

富田は、事情を説明し、何とか地ならしに一役買うよう指示をした。そして、拓海が地元の出身者であり、今回の企画者であることも申し添えた。

横山　「それは、地元の建設業者は大喜びですわ。なかなか、地方の公共工事も陰りが出始めていますし、このような大手の建設業者とジョイントできる機会もありませんし、そりゃあ、願ったりかなったりですわ。早速地元市長などに話をして動かせますわ。いやあ、ほんとに富田先生ありがとうございます。」

横山は、電話の先で興奮した口調で、まるで鼻息まで聞こえてきそうなくらいであった。

横山　「ところで、錦織拓海と、今先生からお話しいただいたような。」
富田　「あー、今一緒に食事をしているのだが、十六島の出身の方らしいよ。」
横山　「先生。代わっていただけますか。」
富田は、拓海に電話を預けた。
横山　「啓介さんのせがれか。」
拓海　「はいそうです。」
横山　「おまえ、おせ（大人に）になったのお。そげか。（そうか）東京の大手のゼネコンに就職したとは聞いちょったが（聞いていたが）、そげかや。分かった。頑張らっしゃい。（頑張れよ）えすこに市長やつに話すーけん。（いい具合に市長に話しておくから）」
拓海　「お世話になります。」
会食が終わり富田代議士と秘書は、川辺副社長に連れられタクシーで別会場へ向かい、渡部部長と園山課長、拓海の三人は、なじみの店で直会（なおらい）をした。
園山課長「しかし、川辺副社長は、さすがにしたたかですね。あんな風に社会貢献と言った評価システムを話されるなんて。錦織君も、そんなことまで考えていたの？」
拓海　「まさかですよ。」
渡部部長「富田先生は、当選回数６回を誇る重鎮だ。国の幹部連中にかなり圧をかける力を持っていらっしゃる。社会貢献評価にしたって現実味が出てくるんじゃない

のかな。まあ、いろんな角度から、物事をとらえる目があるから、企業は立ちまわれるのだろうけど。しかし川辺副社長みたいな人間にはなかなかなれないよな。まあ、地元の方々が喜んでいただければ、いいんじゃないかな。我々としては、、、。」

園山課長「錦織君は横山さんって言う県会議員とは、面識があるのかね。」

拓海　「同郷の議員で、確か当選回数４回だったと思います。」

渡部部長「市長らを動かすことが出来るとは、結構力を持っているんだな。」

拓海　「はい、地元じゃ知らない人がいない位の大物政治家です。」

三人は、想像していた以上の渦を巻き起こしそうな気配に、いささか困惑しながら、その夜が更けるまで酒をたしなんだ。

次の日

平田市　布野市長のところへ横山県議会議員が訪問した。

布野市長「いやあ横山議員、朝一番からお話があるとは、何かありましたかな。」

横山県議会議員は、市長応接室で秘書室職員が出したお茶を口にもせず、興奮気味に話しだした。

横山　「昨晩、富田先生から、こんな話をいただいた。」

横山は、昨日の概要を布野市長に伝えた。

横山　「これは、平田市にとって大きなチャンスだろう。拓殖建設さんに面会を申し入れ、是非とも誘致話を進めるべきじゃないか。」

横山は、こう続けた。

横山　「そう、こんな大きなプロジェクトだから、建設業協会の会長もつれて、どうだろう要望書をこしらえて、、、。観光協会長も誘って、商工会議所の会頭やら。」

布野　「そうですねえ。ただ、心配もありますね。」

布野市長は、何やら心配な面持ちをし、こう話した。

布野　「あそこらの漁師は本物の漁師ですよ。いくら百億だって言っても、了解取り付けるのは、至難の技のような気がしますがねえ。」

すかさず、横山県議会議員は付け加えた。

横山　「いつまでも、漁業、漁業と言っていてもあそこら（村）の活路はないんじゃないのか。それから、錦織啓介さんって知っとるだろ。」

布野　「だから、その、あそこらの本物のかなぎ方ですよ。」

布野後援会のひとりであり、布野も啓介の気性を十二分に知っていてのことだった。

横山　「それがだよ。今回の拓殖建設の企画提案者は、啓介さんのせがれだってよ。拓海って言って、なんだい（聞くところによると）、社内でもエリートだげな（だそうだ）。」

布野　「えっ、そりゃ、願ったりの話じゃないですか。」

横山　「まあ、そこのところもあるし、どげだい（どう考えても）地元交渉は、平田市

も前面に出て、交渉に当たりますっちゅうくらいの姿勢を見せらんといけんわな。（いけないだろう）市の体制も、観光産業のもんばっかりじゃなく、そげだがや（そうだ）、水産振興課長の落合君も地元だがや。（地元だろう）こなにも（この人物にも）、汗かかせらんといけんわや。（働いてもらった方が良い）」

興奮した横山の口調は、どんどん出雲弁が強くなっていった。

落合課長と言うのは、拓海と同郷で７歳年上の、若いころ（学生の時）は、出雲弁で、よつかえん位（途方もなく手に負えない位）のやんちゃだった。特にオールバックをした中学生時代には、肩に触れたくらいの相手に、額を寄せていちゃもんをつけるなど、あまりのやんちゃのせいで、瀬戸内の小島にある水産高校に行かせられるほどの、地元じゃ有名な人物だった。

横山　「落合課長、ここにこらせらっしゃい。（来させてはどうか）」

布野　「まあ、落合は要望から付き合わせますけん。（ますから）いやあ、おべましたわ。（びっくりしました）こぎゃん話（こんな話）が合併を前にあーなんてて。（合併を前にあるなんて）」

横山　「そげだのお。（そうだねえ）」

二人は、大声を出して笑った。

お茶を口にした横山は、言った。

横山　「なんてて、ぬるのお（なんと、冷めたものだ）、このお茶は。」

それを聞いた秘書室の職員は、秘書室長に変顔をしてみせた。

布野市長は、早速商工会議所会頭、観光協会会長、建設業協会会長にその旨を話した上で、

連名で要望書を作成し、誘致活動を行うことの同意を得た。
同時に布野市長は市長室に、水産振興課長、観光振興課長及び商工振興課長らを招集し、バックアップ体制の構築を行うよう指示を行った。
布野　「さて、趣旨は分かったと思うが、ここは部局を越えて連携を図って、邁進してもらいたい。主だった議員の方には、わしが近々話をする。それと、誘致活動や地元調整に関して、とりあえず二百万くらいの予算だてをするよう、財政課長に話をしとくわ。なんか、ほかにあーかいのお。（他にあるか）」
落合　「まだ、漁業者などにはシークレットですね。」
布野　「そーだなあ。そこんとこは、タイミングを見らんといけんが（見ないといけないが）、拓殖建設の。おー、そーだった、落合君。啓介さんのせがれが今回の企画者だげなわ。（企画者らしい）」
落合は、両手を広げソファーの背もたれに倒れかかり、慌てふためいた。
落合　「うわー。おべましたわ。（びっくりしました）拓海がですか。地元は、拓海に会ってから相談しましょーや。漁協の会長はどげさいますか。（どうされますか）」
布野　「会長さんには、またわしの方から出向いて話しとかんと、いけんわな。ほかにあーかいのお。（他にあるか）まっ、一週間に一度くらい、集まってすり合わせをしていかこい。」
招集させられた面々は市長が他の公務のため退室すると、一同大きく目を見開き、「ふおー。」と大きなため息をつき、横に数回首を振った。

平田市で今まで類を見ないビックプロジェクトに感嘆した。

数日後

布野市長は横山県議会議員と落合水産振興課長ら市のプロジェクトメンバーを従え、商工会議所会頭、観光協会会長、建設業協会会長とともに、拓殖建設に誘致活動に出向いた。

港区に本社を持つ拓殖建設の最上階にある、ゲストルームに一行は招待された。

普段は、国県や国会議員への要望活動でも、何ら緊張することのない布野市長であったが、現れた川辺副社長の、何とも言えないエレガントな雰囲気に飲まれ、くちびるを震わせ、直立不動で両手をかたく握りしめていた。

副社長　「これは、これは遠方から。どうぞおかけください。」

布野市長「この度は、大きな地域開発のプロジェクトをご計画なさっていらっしゃると伺いまして、、、。」

副社長　「飛行機でお越しになられたんですか。」

いきなり、本題に入ろうとする布野市長をたしなめるかのように、川辺副社長は、一行を気使う話題に押し戻した。

布野市長「あー。はい。」

副社長　「あーそれはそれは。朝早くから、本当にご苦労様です。島根にはいつ御戻りですか。」

布野市長「なかなか仕事の都合上もあり、昔のように上京もできんようになりまして、この機会に国会議員の先生のところも回って、明日に帰ろうかと、、、。」
副社長　「あー。そうですか。富田先生にもお会いなさるんですか。」
布野市長「上京の際は、決まって、、。」
再度、布野市長が口火を切った。
布野市長「この度は、大きな地域開発のプロジェクトをご計画なさっていらっしゃると伺いまして、、。是非、わが島根県の平田市での立地をご賢察いただきたく、商工会議所会頭、観光協会会長、建設業協会会長とともにご挨拶に伺わせていただいたわけでございます。」
布野市長は、公用の茶封筒から要望書を出し、深々と頭を下げ両手で川辺副社長に手渡した。
手渡す瞬間に落合課長は、カメラで撮影した。
副社長　「何か、照れ臭いですな。」
布野市長「これは失礼しました。落合君一言御断りをしてから、撮影しないかね。」
落合課長は、頭をかき詫びた。
副社長　「もう富田先生からも聞かれていることでしょう。ただ、わが社としては、、。」
布野市長「わが社としては、、。」
副社長　「地元の方から歓迎されたいんです。」
布野市長「もちろん、市役所を揚げて地元の了解を。一緒になって取り組ませていただきます。」

川辺副社長は、一行の今夜の都合を聞くとこう話した。
副社長　「せっかくの機会ですから、富田先生を囲んで夕食でもどうでしょう。」
布野市長「それはそれは。喜んで。」
その日の夕食において、布野市長をはじめとする地元の者たちは、終始酒つぎに徹した。

翌朝、昨日の夕食のお礼に再度拓殖建設を訪れた布野市長ら一行は、渡部部長に企画開発部のミーティング第１ルームへ招かれた。
そこで目にしたものは、およそ３メートル四方に及ぶ開発の建築模型であった。
布野市長「これは。」
あまりの驚きに、布野市長ら一行は、言葉を失った。
園山課長「こういう、イメージで開発を進めたいと考えています。この開発を企画した職員をご紹介させていただきます。錦織君。」
そして、拓海が入った。
拓海　「錦織と申します。」
落合　「拓海。おせに（ちょっと大人に）なったのお。」
落合課長の目は潤んでいた。
拓海　「遠方からお越しいただきありがとうございます。」
落合　「拓海、おらのこと覚えちょーかや（覚えているのか）。」

拓海　「もちろんです。落合さん。」
落合課長は、外を見た。いや、外を見るふりをして涙を流した。
布野市長は、今後の流れについて質問した。
　布野市長「それで、これからどのように、、、。」
渡部部長は、諭すようにこう話した。
　渡部部長「今一度、平田市さんへの立地や今後のスケジュールについて社内で煮詰めてまいりたいと思います。また、近いうちにご足労おかけするかと思いますが、その節はよろしくお願いします。」
布野市長は、感触を感じたのか、かなり興奮気味に。
　布野市長「ははあ。吉報をお待ちいたしております。」
一行はそう告げ、帰ろうとした時、落合課長に拓海は告げた。
拓海　「落合さん、近いうちに帰ります。親父には僕から話しますので、それまでは。」
落合　「分かった。拓海。ありがとうな。わしらんこと。十六島んこと、気にかけてもらっちょって。(気にかけてもらっていて)」
落合課長は、感涙しながら拓海の手を両手で握りしめた。
一行が帰った後、川辺副社長へ渡部部長、園山課長と拓海が報告に訪れた。
そして、今後の段取りの打ち合わせを行い、平田市に誘致を受けた形で調印、同時にプレス発表。その後に地元と折衝し、開発工事に着手と言うスケジュールで進めようとする結論に達した。

副社長　「そういうスタイルで進めようか。とりあえず、社長には私から話をさせていただきましょう。いずれにせよ、おおむね一ヶ月後くらいに調印でしょう。それくらいの間を置きたい。熟慮した形をね。」

三人は、副社長室から企画開発部のミーティングルームに戻り、副社長の冷静さと言うか、少し冷酷な間の置き方など感嘆した。

園山課長「その間って、今度はどういうことなんでしょうかね。」

渡部部長「相手をじらせて、相手から連絡させようってことじゃないかなあ。今後の地元交渉のわが社の立ち位置を考えて。」

園山課長「したたかな方だ。」

すると、拓海は二人の上司にこう嘆願した。

拓海　「お願いです。いろんなことが始まる前に、父に、話をさせていただけないでしょうか。」

拓海は、二人の上司に父親がかなぎ漁師であることを、飲み会の折に話していた。ただ、ダイバーが密漁した時のことを話すことは初めてであった。

渡部部長「そんなことがあったのか。わかった。一週間程度、帰って来い。というか、出張として行って来い。」

園山課長「なんとか、理解してもらえるよう。頼んだぞ。」

まぶしいくらいの夕日が窓からさし、建築模型は真っ赤に輝いた。

一週間後

拓海は、父　啓介が理解を示してくれるように説明が出来るのか不安を抱えていた。拓海は一人ゆっくり考える時間を持つため、そして帰る道中の景色を満喫するため、あえて新幹線、特急やくもを乗り継ぎ、出雲市駅からは一畑電車に乗り、雲州平田駅からは、バスに乗り換え、約八時間をかけて帰省した。

道中、岡山から米子を抜けると、慣れ親しんだ日本海、中海、宍道湖といった風景を拓海は堪能した。

一畑電車は、京王線で活躍した電車らが、あたかも第二の人生を楽しんでるかのような、そういう軽やかな『ガタンッ、ゴトンッ』という響きを鳴らし、心地よい揺さぶりを与えてくれる。

「ピーッピー。出雲大社にご参拝の方は、お乗り換えください。次は、おおてら。おおてら。」

雲州平田駅まで、あと四駅のところで出雲大社へお参りする観光客は降車し、昼間少ない乗客は、さらに少なくなる。

雲州平田駅に着くと、小さめのバスが待ち構え、病院帰りの老人と拓海を乗せ出発した。

高校時代まで過ごしたこの地は、二〇年たった今もあまり変わっていない。

よきも、悪しきも。

バスが北山の峠を越えると、視界には海が広がった。

まばゆいばかりに輝く海。まるで拓海を歓迎するようにチカチカと光を放ってくれる。

小学校やコミュニティセンター、漁協を通り過ぎると、一車線しかない、少しくねくねした

道を通り、最終のバス停。ここが、十六島である。
拓海　「ありがとうございました。」
拓海は、ワンマンバスの運転手に軽くお辞儀をし、バスから降りて、集落の前の広場に少し歩き、海に向かって両手を広げ、鼻から思いっきり潮風を吸いこんだ。
拓海　「いるかな。なにも言わずに帰ってきたからな。」
そうつぶやいた後、集落の小路を家に向かって登って行った。
拓海　「ただいま。いるの？」
拓海は、空けっぱなしの玄関の網戸を開け、声をかけた。
時間は、午後六時。
拓海　「そうか。海からあがるくらいか。」
そういった拓海は、家に上がり、客間の仏壇に線香を供え、手を合わせた。
小一時間たったころだろうか、漁から戻り、船揚場に船を揚げた啓介は、手伝いに来た正子の軽トラに乗って帰ってきた。
玄関に入った啓介は、黒いピカピカの靴を見てはすぐさま拓海が帰っていることに気付いた。
啓介　「拓海。帰っちょーかや。（帰っているのか）」
拓海　「ただいま。」
啓介　「帰ーなら、帰ーと言わっしゃい。（帰るなら前もって言えよ）アワビやサザエ持って帰っとたがや。（帰っていただろうに）だいしゃいさきなとあーがのお。（少しは、イサキくらいはあるがね）あー、そげだわ。（そうだ）」

啓介は、思いだすと、正子にこう告げた。

啓介　「正子。太呼べや。あいつ今日もたいそアワビわっちょったけん（割っていたから）、よけ（たくさん）持って帰っちょーとまっしゃい。（持って帰っているだろう）だあずが、なんぼ言ったてて解ーへんだけんのぉ。（馬鹿野郎が、いくら言っても解らないからなあ）目線の先に銛持っていかっしゃい、言っちょーにのお。（銛持って行けよって言っているんだが）正子、せから（それから）、景子に電話して栄一にビール買って来いと言っといてごせ。（言っておいてくれ）そげだわ、まげな箱ふぐ（そうだ、大きな箱ふぐ）を今日獲ったわ。」

二年ぶりに拓海と会う啓介は、饒舌になった。

太は相変わらず、アワビの殻に銛を当て、商品にならないものが毎日ある。こういったアワビは、魚価の維持のため、市場には出回らない。

箱ふぐは、毒のないフグであり、アルミホイールにバターをしたため、ボイルにして食すととても絶品である。数を獲れる魚種ではなく、同じく市場に出回ることなく漁師の家庭で食す。

十六島の漁師たちの酒消費は、近年では焼酎が主流である。

また、ビールを晩酌ではあまり飲まなく、ましてや啓介の家にビールは置いていない。

ふと、我に返った啓介は、拓海にこう話しかけた。

啓介　「里美さんと七海に和はどげしたや。（どうしてる）」

拓海　「今回は、一人なんだ。」

少し間を置き、こう続けた。

拓海　「父さんと、母さんに、話したいことがあるんだ。仕事の話なんだ。」
啓介　「なんかや。（なんだ）難しい話かや。（話しかな）」
拓海　「太さん栄一さんの前ではちょっと、、、。」
啓介　「ほんなら、話は明日にさこい。（明日にしよう）明日から二、三日時化ー言っちょうが。（時化ると言っている）拓海は、いつまでおーかい。（いるのか）」
拓海　「三、四日はおろうと思っている。」
啓介　「仕事の話だわな。別れ話じゃないわな。」
こんな拓海の帰省は、今までなかったことから、啓介は不安になった。
拓海　「夫婦仲も、家族の関係も極めて良いよ。」
啓介　「ほんなら、話は明日にして、今夜はあーやつ呼んでいっぱいやらこい。お前腹減っちょーか。正子、拓海にどんぶり作っちゃれや。（作ってあげれよ）」
拓海は、正子が作る親子どんぶりが子供のころから大好きだった。今でも、帰省する度に、いつも食べる。
啓介は、イサキと、箱ふぐを持って隣の魚を調理する場所がある建物へ行った。
数分後、太はつれ合いと、大きく殻が割れたアワビを三つと、サザエを二〇ばかし持ってきた。
景子が、缶ビールを買いに行かされた栄一に先んじてやってきた。
景子　「拓海、お帰りぃ。母さん、かまぼこのニシメ持ってきたよ。なんかてごさかね。（何かお手伝いしようか？）」

正子　「あー。たのんわ。（頼むよ）そこ、イサキ煮てごさんかね。（煮てください）」
この地方では、やけに煮物が多い。
拓海は東京に出て初めて、サザエが都会では高価な貝であることを知り、それからサザエの壺焼きが大好きになった。
拓海　「なんぼか（いくらかの数）壺焼きが食べたい。」
続いて最後に、栄一が手に５００ミリリットルの缶ビール６本入りを２つ、両手に袋をぶら下げてやってきた。
栄一　「おー。拓海。生きっちょったかや。（生きていたのか）」
栄一はそう話しかけ、拓海と握手した。
拓海　「子供たちは。」
栄一　「おまえんちの子供が来とらんって言ったら、ほんじゃ行かんって言ってござったわ。（言いやがったわ）」
栄一には、双子の中学生の姉妹と、和の一つ上の男の子がいる。
双子の姉妹が思春期真っただ中で、こういう場にはあまり顔を見せなくなったらしい。
栄一は、父　清　の手ほどきを受け、花の描き手になっている。
栄一　「ちょっとごめんだども（ちょっと済まないが）、明後日の恵比寿祭の花が間に合わんけん（間に合いそうもないから）、もってこらしてもらっていーかいねえ。景子。なんぞ、こまいちゃぶ台だいてごせ。（小さい台を出してくれ）」
栄一は、そう言って、硯に筆、墨に絵の具を用意して小さなちゃぶ台で描き始めた。

太　「なんと、えすこに描くやんなったのお。（なんとうまいこと描くようになったねおまんも、筆がえーのぉ。下の筆もえだけんのお。（いいからなあ）」
太は、股間を抑えながら栄一にそう語りかけた。
栄一　「おっつぁん、笑わせーなや。（笑わせないで）手が震えて描けらんがや。（描けないよ）」
太は相変わらずこのネタが好きであった。
啓介　「さっ。乾杯さこい。みんな、一回座ってごいた。（一回集合）」
料理の準備をしていた女性陣も、みな座卓に着き、啓介と太は焼酎で、それ以外の者はビールを片手に乾杯をした。
啓介の右側に席していた景子は、啓介にこう話した。
景子　「で、どげかね。（どう？）最近漁の方は。」
啓介　「、、、、。」
正子　「お父さん、右側が耳鳴りで、最近は聞こえも悪くなっちょーに。（悪くなっているの）」
正子は、そう話してから、啓介の眼の前で手を振り、景子を指差した。
景子　「漁はどげかね。」
景子は大きめの声で話した。
啓介　「まあまあだで。最近耳が遠なっちょってのお。（遠くなっていてね）」
啓介はそう話すと、首を右に三周、左に三周回した。

拓海　「病院行っとるかね。」
啓介　「おー。なんてて、加齢っていわいたわ。（なんと、加齢と言われた）」
正子　「ホントは、首と肩が凝っちょーに。（凝っているの）ガッチガッチにね。」
太がこう笑わした。
太　「カレーなんかじゃねわな。親子丼だわな。なー拓海よお。」
その夜は、次の日が時化るのを分かっているため、久しぶりに十時過ぎるまで飲んで騒いだ。
啓介の説得に不安を抱えていた拓海も、変わらない皆々の曇りのない表情に気を許し、酔いしれた。

翌朝
拓海が八時ごろ起きた。
外は、昨日とは打って変わって雨が降り、風が出ていた。
拓海が客間から起きると、居間には啓介がすでに新聞を読み終え、テレビを見ながら、いつものように焼酎の煎茶割りをちびりちびりと飲んでいた。
つまみには、アワビと異種であるが、アワビに似た形で、少し小ぶりの貝である【とこぶし】をから付きで煮たいていた。
もちろん、朝から酔っぱらうような飲み方はしない。いつもかなぎで汗を大量にかくため、肝臓を悪くすることもない。っと思っている。

拓海が座卓の前に座ると正子は、白いどんぶり飯に、魚のあらで作った澄まし汁を出した。そして、おかずには自家製のアジの開きと、イワシの手開き（小さく、数が少ない商品価値のないイワシを手で開いて、骨と内臓を取り出し、刺し身のように食べるもの）を出した。

拓海　「ありがとう。」

拓海は、朝から十六島の料理を存分に味わった。

啓介　「おまえも、焼酎飲んかや？」

拓海　「いや、いーわ。」

食事を終えた拓海は、皿を台所のシンクまで下げ、食器棚からコップを持ってきて、テーブルの煎茶のペットボトルからお茶を注ぐと、啓介にこう話した。

拓海　「父さん。話をさせてもらっていいかなあ。」

啓介　「おー、そげだったなあ。（そうだったなあ）」

拓海　「実は、、、。」

拓海は、この地における開発のプロジェクトと、今までのプロセスを想いをこめて話した。

拓海が話し終えた後、約三分くらいの沈黙があった。その後、啓介から、、、。

啓介　「俺らが守ってきた海を売れってことなのか。」

啓介は、興奮しているわけでも、怒っているわけでもない。ただ、どことなく寂びしげなそぶりでこう続けた。

啓介　「ダイバーらが荒らそうとしたことは、お前も記憶にあるだろうが。あれから、何年たっても、まだわしは、来ーへんか（来ないか）と思って、時たま（時々）

知らん顔のもんがおったら、つけとーわな。（後をついていく）太もだ。」

啓介は、上を見て両手を握りしめながらこう続けた。

啓介　「おらやつが若いころは、センターも市場が開かいとって（開いていて）にぎわっていた。灘の漁もかなぎ以外にたくさんの漁があってのぉ。様々な魚や貝が市場にださいたもんだった。（出されたものだった）灘バイやタコ、コウイカなんかものお。それらを獲ると、タコらはアワビやつの天敵でもあるし、ヒトデなんかも籠に入って漁師が獲ってごいとった。（獲ってくれていた）今や、タコなんかも外国産にやられて獲るもんもおらんし、、、。だけん（だから）タコやヒトデなんかをおらやつが獲らんといけん。（獲らないといけない）山も荒れてしまって、漁場に土砂が流れてくるんだ。濁りが出て漁もならんようになるし、岩の間が埋まってしまうし。温暖化のせいで磯焼けとかなんかで、海藻ら、はえとるもんもなーなってきた。（海藻などもなくなってきた）そがんふーだが（そんなふうだから）、おらやちゃ懸命に守っとーだがや。（守っているんだ）種も撒くし、釣り具なんかが引っ掛かった海底清掃もする、、、。」

少し間をおいた啓介はこう続けた。

啓介　「それをダイバーらくそたれが！あぎゃんこと（あんなこと）しやがって！」

拓海　「あの時のことは、僕も忘れられない。だから、大学に入ってから、ダイビングサークルに所属し、今でも多くの地域や漁業者の方との交流を持ったりしてるんだ。共生できると思っている。それに、僕がこの企画を発案した理由も、こ

この地域、伝統や漁業も含めて、守りたいんだ。なんとかして、次に繋げたいんだ。」

啓介　「、、、。」

啓介は、背中を震わせ天井を見ていた。下を向くと鼻筋を涙が流れ、畳にぽつりぽつりと落ちた。

啓介　「それが、守る術となるのか。助けとなるのか。」

拓海こそ興奮して息使いが聞こえるようになったその時、震えた声でこう話した。

拓海　「政治家や行政の方々も、ここでの立地を待ち望んでおられる。ただ、話が出回る前に、父さんには僕から直接話しておきたかった。父さん。」

拓海は、額を啓介の背中に押し当て、そっと後ろから両手で父の肩をつかんだ。

更にいろいろな人たちの今までの発言や活動を拓海が話した。そうすると、啓介は、雨が少し止んだ空を窓越しに見てこういった。

啓介　「おらもおまえに、言うこと一杯言ったわ。一杯聞いてもらったわ。おまえの気持のちょんぼは（少しは）わかった。反対はせん。だども（だけど）、賛成もせん。親子だけん（だから）、その方がいだないか。（良いのでは）みんながどげ言うかは（どう言うかは）知らん。」

拓海　「父さん。」

啓介　「どっちに転んでも、この海が悪くなーことだけは許さんけん。おらやつが必死になって守ってきた海が。」

拓海　「もちろん、僕も同じ気持ちなんだ。」
それから、正子も加わり、拓海の家族の近況を話しだした。
里美も、元気で笑顔を絶やさず暮らしていること。
七海が有名私立大学の付属中学の京王中学に入り、クラスで勉強がトップクラスであること。
和が四年生になり野球を始め、地元のスポーツ少年団で投手になっていること。
啓介、正子の顔はほころんだ。

翌日、恵比寿祭りで、十六島は朝から大騒ぎだった。
集会所では、地元のご婦人方が集い、サザエ飯にあら汁に、魚には鯛を焼いて、カサゴの煮つけにと、村の世話役の直会（なおらい）の食事を作り上げ、村の前の広場には、神楽が舞う特設の舞台が出来て、たこ焼きの屋台も一つだけ町から出向いていた。
ドンドンッ、ピーヒョロピーヒョロ。
村の若手が華麗な神楽を舞い、年寄りが笛を吹く。
客席は、ゴザを引いて、集まった者たちが茶茶碗に酒を注ぎ、酌み交わす。
「おめでとうございます。」
いつも顔を合わす村の者たちが、この日ばかりはブレーザーをまとい、かしこまって挨拶をする。

拓海は、神楽が始まると広場に出向き、時を忘れて心地よい時間を過ごした。
途中、客席には落合課長が、野球帽をかぶる年の離れた末っ子の舞（和と同学年）を連れてきて、たこ焼きを三つ買い、一つを拓海に手渡し、「おっ、久しぶりだのお。」と声をかけ、素知らぬ顔をしてくれた。
拓海は、何らか新たな決意を胸にした。
祭りは一通り終わり、拓海は帰って風呂に入り、ビールを飲みながら親子丼を食べた。
啓介は、直会（なおらい）に出た後、拓海に、「もう一杯酒を飲むか。」と誘った。
次の日も時化が予想され、明日東京へ帰る拓海とのもう一杯の酒を楽しみに、直会（なおらい）もほどほどに帰ってきた。
啓介　「おまえも、直会（なおらい）に顔を見せりゃよかったのに。」
拓海　「いやいや、早くに帰ってもらって悪いね。」
そう拓海は話し、啓介から差し出された焼酎の煎茶割りを口にした。
拓海　「濃い。もっと薄めらんと。」
啓介　「そげかあ。（そうか）」
正子も、風呂から上がり寄ってきた。
正子　「あんた、お疲れさんでした。拓海も明日帰るのね。」

拓海　「父さんから聞いたと思うけど、、。」
「いずれ、近いうちにまた帰ってくると思う。二人とも、ありがとう。」
拓海は、そう語りかけ、飲みかけの啓介のコップに焼酎を継ぎ足した。
啓介も、拓海のコップに焼酎を継ぎ足した。
コップの中の焼酎は、モク（ロックの状態）になっていた。
翌朝、拓海は朝一番のバスで十六島を離れて行った。その日は快晴になり啓介はすでに漁に出掛けていた。

次の日、拓海は、渡部部長と園山課長に、父への説明の報告を終え、三人は副市長室を訪れた。
ことのわけを説明し終えた拓海に、川辺副社長は、笑顔でうなずきこう話した。
副社長　「まあ、よくあるスタイルではあるが島根県にもお声がけをして、平田市含めて三社で調印をしましょうか。」
いよいよ動き始めた。
拓海は、背中から腕の後を通り握った両こぶしにかけ、鳥肌が立った。

二〇〇四年秋　㈱拓殖建設本社ビル大会議室

そこでは、調印式とプレス発表の準備が進められていた。

拓殖建設のパネルの前面には、束ねられたマイクが置かれた演台、横には建築模型が配置され、二〇〇位の椅子が会場全体に並べられていた。

園山課長「錦織君。ここまで来たな。」

拓海　「全身全霊で推し進めます。」

プレス発表は始まり、概要を説明した後、社長、島根県知事、平田市長の三氏で調印をし、社長を中心に、三人が前で手を結んだ瞬間、パシャッパシャッと、会場全体に響き渡るカメラのシャッター音が約二十秒続いた。

この調印式は平田市など地元でも放映された。

太　「啓やん。大変なことになっちょーがや。（大変なことになっている）」

テレビを見た太は、啓介の家に飛び込んできた。

布野市長は翌日、臨時の市議会の場において概要報告をし、誘致に係る費用を計上した補正予算案を提案し全会一致で可決した。

その模様は、地元ケーブルテレビで生中継され、時化で漁に出られない漁師たちはセンターでこぞってテレビに食い入った。

漁師　「拓殖建設言ったら、あのゼネコンかい。（ゼネコンなの？）」

「百億ったら、どぎゃん金かい。（どんな金なの？）」

「なんで布野（市長）は、おらやつに言わだったかい。（言わなかったの？）」

「おべたわー。（びっくりしたわー）」
「拓殖建設ったら、啓介さんとこのせがれがおーへんかい。（いるだろう？）」
「啓介さんは知っとったかい。（知っていたの？）」
みんなびっくりして目を見開き、様々な発言が飛び交った。
啓介は、隣の定置網の倉庫で、網の修理の手伝いをしていた。そこへ漁師がセンターからやってきた。
漁師　「啓介さん。知っとったかや。（知っていたのか？）」
啓介は、口を真一文字に結び歯を食いしばり、破れた箇所を編み、見向きもせず返事をすることもなかった。
啓介の横で網の修理を一緒にしていた太は、啓介に代わって話した。
太　「知っとろーが、知るまいが、そぎゃンことえだないかい。（そんなことはどうでもいいだろう）知っとったてて（知っていたって）、言えまいがあ。（言えないだろう）」
啓介は、無口で作業を止めることはなかった。
太　「また、市の方から説明なとあーだないか。（説明くらいはあるだろう）」
「せからのお（それから）、啓やんから聞いたてて（聞いたって）何のことかわかーせまいがあ。（何のことか解らないだろう）」
啓介は、やっと少し笑って、太の頭を小突いた。

話に来た漁師に対し、作業をしていた二十人くらいの漁師全員が、『そろそろ帰らっしゃい。』と言わんばかりの眼差しで、手を休めて睨んだ。

漁師　「忙しとこ（忙しいところ）、すまだったのお。（すいませんでした）」

漁師は倉庫の戸を閉め、センターに帰って行ったところで、笑い声が外に響いた。

第一回地元説明会

センターの会議室に、莫蓙を敷き並べ、自治協会の役員やコミュニティセンター長、地元町内会長やご婦人会の代表、漁業者らを招集して一回目の地元説明会が開催された。

この第一回目の説明会は、市主催のもとで執り行われ、拓殖建設からの出席を得ず、市長率いる市の執行部から説明を行った。

事業の概略の説明を終えたのち、布野市長がこう続けた。

布野市長「今回の拓殖建設さんの企画を島根県さんに協力を仰ぎ、富田先生や横山県議会議員にお世話になって、誘致活動を行ったところだ。こぎゃン景気が悪くて公共工事も少なくなっちょー中（少なくなっている中）、百億円の投資を頂けるような、こんなことはない。せから（それから）、何を言っても、人口定住対策やこの十六島湾の活性化につながる、願ってもない企画だ。市としては、皆さん方の協力を得て、是が非でも早期に着工されるよう動いていきたい。簡単ではあるが、よろしく頼んますわ。」

続いて、落合水産振興課長が続けた。

落合　「わしもまあ、地元のもんだし、、。皆さん知っとらいように（知っておられるように）、わしは水産のもんだけど、今回のことは市挙げて取り組むべきところで、それから、水産のことにも大きく関わることであって、まあ、いずれにせよ、わしは全ての説明会に出るもんだけん（出るから）、言いにくいことやつも何だらと（言いにくいことでもなんでも）わしに言ってがっしゃい。（下さい）」

観光振興課長が続けた。

課長　「まあ、今日は、今までのプロセスを説明させてもらいました。また、近いうちに拓殖建設さんを招いて説明会を開催させてもらおうと思っとります。」

すると、漁師の一人から意見が出た。

漁師　「まあ、いろんな意見が出ーと思う。おらも言いにくいことも言わんといけん立場にもあーもんだが、出来れば漁師方と自治協会のだんさんがたと（自治協会の役員の皆さんと）分けて説明会をやってもらいたい。」

一人の役員がこう諭した。

役員　「それもそげだ。（それもそうだ）漁師方は、また漁業権の問題があーだけん（問題があるから）、分けて話さんといけん事もあーわのお。だども（だけど）、いずれにせよ、村が賛成派だことの反対派だことの、っつうやに（と言うように）二分されたらいけんと思うがのお。」

漁師　「そら、そげた。（それは、ごもっともだ）」

皆が頷いた。
落合課長がこう話した。
落合　「拓殖建設さんは、はっきり言って営利優先でこの企画を進めようとしちょらいへんけん。(進めようとしていないから) せから (それから)、この企画のリーダーは、啓介さんとこの拓海だがあ。(拓海だから) こなが (こいつが)、十六島のこと想って進めてごいたげな。(進めてくれたらしい)」
布野市長「地元の対応では、撤退されーこともあーけに (撤退されることもあるから)、なんとかやってもらわんといけん。(やってもらいたい) でごへごしちょって (手ぐすね巻いていて)、よそにとらいてもいけん。(他の地域にとられてもいけない)」
観光振興課長が、「それでは次は拓殖建設さんに来てもらって説明してもらいますけん。漁師方と分けて。」と説明し、会はお開きとなった。
その様子は、翌朝早々に拓海のもとへ連絡が入った。
拓海はその夜、第一回地元説明会の様子を会社から早めに帰宅し、妻　里美に話をした。
七海は自分の部屋で勉強をしていた。
和は、いつものようにピンポン玉より一回り大きなプラスチック製の球を、居間に寝そべって天井めがけて投げていた。
和は、指のかかりを確かめ、楽しんでいるらしい。
拓海　「田舎に説明会に通うようになる。留守することが多くなるが、、、。」

里美　「よかったね。和、解ったわね。ちょっとは強くなりなさいよ。」
和は、お姉ちゃんに口げんかで負けては泣いたり、野球でファーボールが続いて負けてしまうと泣いたり、、、。
少し、泣き虫の傾向があった。
ただ、肩はどの子よりも強かった。

翌日、和の所属している荒川中央スポーツ少年団の練習試合が多摩川運動公園であり、次の日から平田市へ出張をする拓海は、里美とともに観戦した。
本日の練習試合は、強豪の荒川北スポーツ少年団であった。
六年生が公式戦を終え、五年生以下の新チームの初めての練習試合で、和は四年生ながら先発ピッチャーとして、相手打線を六回までノーヒットで押えていた。しかし、自チームもわずか二安打で七回表が終わって、０対０の投手戦だった。
７回裏、あっさり三球三振を取った後、次打者のボテボテのキャッチャーゴロを悪送球でランナー一塁とし、その後、二打者連続のファーボールでワンアウト満塁とした。
カウント、スリーボールワンストライク。
里美は両手を合わせ、震えていた。
五球目。
ボールはキャッチャーの頭を大きくそれ、バックネットにガチャっと音を立てた。

「あーあ。」
観戦していた保護者の口から、一斉に聞こえてきた。
ゲームセットを告げる球審の「集合」の号令があっても、拓海はマウンド上で両腕で涙を拭き、立ちつくしていた。
里美　「和。泣くな！」
他の保護者は振り返り、みな間をおいてからほほ笑んだ。
試合が終わっても、肩をゆすってすすり泣く和の右肩を、拓海は横からそっと抱えながら里美が用意した弁当を食べるレジャーシートへと歩いて行った。
拓海　「泣くなあ。和。」

翌日の日曜日、羽田発出雲便で、拓海は渡部部長、園山課長とともに平田市へと向かった。
三人は、雲州平田駅近くのホテルにチェックインの手続きをして荷物を預け、拓海が帰省するときに必ず訪れる地元の魚料理を出す酒処【万作】に向かった。
【万作】は、カウンターのみで９人しか入れないが、地元で人気の酒処である。
渡部　「錦織君。お勧めの魚はなんだろう。」
拓海　「マスター、カワハギの刺し身とのどぐろの煮つけを三つずつお願いします。」
園山　「のどぐろ、、。」
拓海　「赤ムツのことです。とても脂が乗っていておいしいですよ。」

渡部部長と園山課長は、のどぐろを口にしたとき、目を見開き、「これはおいしい。」とくちずさんだ。
あと、穴子の白焼きを拓海が頼み、三人は一時会話をすることすら忘れた。
渡部　「こんなにこっちはうまい魚があるのかあ。いやあ、驚いた。」
園山　「ホントにとてもうまかった。」
園山課長は、腕時計を見て話した。
園山　「明日早いですから、今日はこのあたりにしましょうか。」
三人は、盃に残ったお酒をそれぞれ飲みほした。
渡部　「辛いっ。ここのお酒はうまいが、辛いな。」
マスター「こっちのお酒は、少し辛めですっきりした飲み口です。」
口数の少ないマスターが、にやりと一言だけ話した。

翌日三人は布野市長のところへ約束の九時に訪れた。
受付から秘書課に連れられ、市長応接室で待っていたところ、秘書課の女性職員がお茶を持ってきた。持ってきた女性職員は、拓海を見ると、、、。
職員　「錦織君。錦織拓海君じゃない。」
拓海の小・中学校の同級生である土江時子であった。
時子　「いやあ、この前テレビを見たよ。紳士になってておべたわあ。(びっくりした)」

時子はそう言うと、左手で拓海の右肩をたたいた。
拓海　「土江さん。変わらんねえ。」
拓海も、土江を思い出したが、子供のころからおてんば娘であった土江とこれ以上話を交わしたくなく、愛想笑いをしたのちお茶を口にした。
すると、市長が応接室にやってきた。
布野市長「これはこれは、御一行様遠いところご苦労様です。」
市長は、土江時子に待機している議長と副議長を呼ぶよう伝えた。
すぐに議長と副議長がやってきて、名刺交換を終えると、観光振興課長と落合水産振興課長もパイプいすを持ってやってきて、皆がソファーに座った後、部屋の一角にパイプいすを広げ座った。
市長は、第一回説明会の内容を伝え、本日行われる漁師方を除く地元の方々への説明会の段取りを話した。
布野市長「それでは、本日午後三時からコミュニティセンターでの説明会はそういう段取りでお願いいたします。私ども平田市の方からも、今おります二人の課長に同行させます。」
「せっかくの機会ですので、近くの観光地にでもご案内いたします。」
三人は、市長と二人の課長に連れられ、市のワンボックスの公用車で出雲大社へ連れられ参拝を終えたのち、蕎麦屋に案内され、【割子そば】を食した。それから市役所の方へ戻って来て、市長は他の公務のためそこで別れ、すぐさまコミュニティセンターへ向かった。

コミュニティセンターには、地元の方々がすでに集まっていた。
両課長と拓海ら三人は、待機していた市の職員に案内され正面に座り落合課長進行のもと一人ずつ挨拶をした。そして、概要について渡部部長が数分間説明した後、「それではこれから、うちの職員の錦織が詳細について説明します。」と拓海につないだ。
拓海　「それでは、説明をいたします。私は、拓殖建設の企画開発部グループリーダーの錦織拓海と申します。皆様ご存じかとは思いますが、この地区で生まれ育った者でして、錦織啓介の息子です。」
説明の前にまず自己紹介をすると、出席者から拍手があった。
拓海　「ありがとうございます。それでは、詳細について説明いたします。」
拓海は用意されたプロジェクターを使って詳しく説明した。
そして、特に自然との共存や地域との共生という目的の部分に想いを込めて、そしてここでは一言一言ゆっくりと、集まった人々の顔を一人ずつ確認するかのように見ながら熱く語った。
約四十分くらいの拓海の説明が終わった後、進行の落合課長が、「ここらで何か質問とかご意見ありますれば、、、。」と参会者の方を見渡した。
少ししてから、自治会長が「ありません。」と一言代表して発言した。
落合　「ないようですので、それじゃみなさん賛成と言うことでよろしいかのお。」
参会者　「まあいだども（まあいいんだが）漁師方の皆さんにもちゃんと了解を得ていただきたいがのお。」
一人の参会者が発言をすると、みな「そげだ、そげだ。（そうだ、そうだ）」と相槌を打った。

先の自治会長が発言をした。
自治会長「ほんなら、漁師方が了解されたら、最後に全体会をやってもらうが良いがのお。」
落合課長は、渡部部長の目の合図をもらってからこう締めくくった。
落合　「そうしますと、漁師方の皆さんの了解が得られましたら、再度全体会をやるっちゅうことで進めますけん。本日は、ありがとうございました。」
大きな拍手が鳴りおこった。
両課長と、拓海たち三人は落合課長に連れられて料亭に行った。
料亭では、しし鍋が準備されていて、少し待ってから市長、議長、副議長が入ってきた。
布野市長「まあ、やりましょうや。」
拓海ら三人は、明日行われる漁師方への説明会を意識し、控え目に頂戴した。
市長にお酒を注がれた渡部部長は酒を口にすると。
渡部部長「辛いっ。」
すかさず、こう付け加えた。
渡部部長「でもすっきりしてますな。」
渡部部長は、ひとつ、おせ（お利口に）になった。

翌日、同じメンバーでセンターの会議室で行われる漁師方への説明会へ向かった。
定置網の漁を終えた午後六時半。

センターの会議室には、莫蓙が敷かれ、漁師方と日野栄一ら漁協の職員が集まっていた。
いささか緊張したような面持ちで啓介も座っていた。
一行が到着し、昨日行われた説明会の入り方と同様、落合課長が進行し、渡部部長が概要を説明した後、拓海へバトンタッチした。
拓海　「それでは、説明をいたします。私は、拓殖建設の企画開発部グループリーダーの錦織拓海と申します。皆様ご存じかとは思いますが、この地区で生まれ育った者でして、錦織啓介の息子です。」
そう、拓海が自己紹介すると、皆にやにやしたり、啓介の顔を見たりした。
その後、拓海は、詳細の説明を行った。
自分のこのプロジェクトとこの地域に対する想い入れと、自らが子供のころ感じたこと、ダイバーと地域が共生してほしいという願い。
熱く語った。
途中、あまりの感情に声を詰まらせることもあった。
そして最後にこう締めくくった。
拓海　「なんとか、こういうことでもう一度地域が活気づかないかと。そして脈々と、永遠に地域の文化や資源が受け継がれないかと。僕はそう想って。お願いです。このプロジェクトをやらせてください。」
説明を終えた拓海は、深々と一礼した。
落合課長が、参会者に何か質問や意見はないかと尋ねた。

一人の一本釣りに携わる漁師がまず意見をした。

漁師　「おらやつより、灘の方でやっとらい（漁をしている）、定置網の方やかなぎ方の方がおもだわ。」

一本釣りの漁師方は、「そげだそげだ。（そうだ、そうだ）」と頷いた。

定置網漁業を営む会社の社長が意見した。

社長　「我々は、全国的にも観光定置とかよくありますし、量が少なくあまり売ることもできなかった魚なども、この施設ができることによって流通に乗せられるんじゃないかとも思いますし、いいことだないかと思います。やっぱり、かなぎ方の意見を聞かれることが一番だと思います。」

皆は、啓介の顔を見た。

落合　「啓介さん。なんかありますかいのお。（ありますか？）」

啓介は、立ってこう話した。

啓介　「せがれが、こぎゃん話（こんな話）を持ち込んですみません。わしは、今回のことについては、意見は差し控えときます。いろんな想いもありますが、今回は黙っときます。」

太　「啓やんには、聞かんでやってごせ。（聞かないでいてくれ）まあ、どげかのお。（どうかなあ）かなぎ方も十六島では五人になって。漁場はおらやつが何とか守っていけーし、種（アワビの稚貝）も最近じゃ良いもんも入ってくーやんなったしのお。（入って来るようになったからなあ）かなぎを受け継ぐには、後は

銛と担い手だわのお。何年か前、Uターンで来たけどすぐ辞めーだだけんのお。
（辞めるからなあ）まあ、一番は、担い手だわのお。今回説明されたことで、担い手が出来ればえがのお。（いいがなあ）まあ、滞在型って言わいても（言われても）、なかなか、かなぎの技術は身につかんかのお。（身につかないかなあ）」

太は、かってないように真面目に話をした。

他のかなぎ方がそれぞれ発言した。

かなぎ方「わしは、やっぱりダイバーが心配だわのお。あん時のことがやっぱり忘れられんわ。啓やんは、今回黙っちょーが言うに言われんとこだないかのお。」

「そーだも（それでも）、いつまで続くかのお。おらやつみたいな漁がのお。」

「ダイバーがいすこ（マナーが良い）にしちょーなら（しているのなら）、いいことだわのお。」

淀んだ雰囲気となったところで栄一がこう話した。

栄一「おまえやつ（かなぎ方）も、もうちょっと考えーだわや。何がかなぎが受け継がいもんで。あぎゃん（あんな）難しい船のこぎ方ならんし、首が痛いし、そぎゃん丈夫な歯をしとー者も少なくなっちょーわや。」

「鵜飼のように、ダイバーを鵜みたいに使わ、えだねか（よいではないか）。おまえやつ分け前半分やーけん捕って来い、言って。楽（らく）してみーだわや。」

啓介が立ち上がり、栄一をぶんなぐろうとしたとき、太や他のかなぎ方に止められ、次に拓海が、、、。

拓海　「栄一！お前、なんちゅう事言うんだ。」

と、今度は拓海が栄一に向かおうとすると、園山課長が拓海の体を横から止めた。

次には落合課長が「おい！」と栄一に詰め寄ると、栄一は落合課長を振りほどき拓海を両手で転ばせ地べたに押さえつけ、涙ながらにこう語りかけた。

栄一　「お前に何がわかーか。（解るか）都会に行ってしまったお前に。ここに残っちょー、わしらがどぎゃん想いで（どんな想いで）生きちょーか。お前に何がわかーか。消防団だてて（だって）人数おらんし、何歳になっても辞められせんし。（辞められないし）神楽も同じもんがずっーとやっとーし（ずっとやっているし）、花も描かないけん。（描かないといけない）体育委員もスポ少の指導者も代わり手がおらんし。高役（たかやく）（自治会総出で行う道路除草や溝掃除など）も年に何回も世話焼かないけん。（世話を焼かないといけない）土日もたいがい世話焼いとーわや。おらばっかだないず。（俺だけではない）かなぎ方もみんなだわや。海底に引っ掛かった釣り具の回収や漂着ごみの回収、誰が捨てたもんきゃい。（誰が捨てたもんなんだ）そーだにおらやつが回収しとーわや。（回収しているんだ）世話焼いとーわや。ちょっとぐらい楽できるとこあったてていだないかや！（楽できることがあってもよいのではないか）お前にわかーか！」

栄一は、涙も、鼻も流しながら、両手で拓海の胸ぐらをつかみ最後は顔を拓海の喉元に押しつけ泣いた。
青いジャンパーを着た他の漁協の職員が、栄一を取り押さえ拓海から離した時、漁協の山根支所長が「ええかげんにせや、わわ。(お前は)」と言い、栄一の前に跪き、人目をはばからず腕を振り上げては栄一の頭めがけてパチンっと叩きおろした。
栄一は泣き崩れた。
支所長　「大変すみません。うちの若いもんが。」
山根支所長は、驚いて突っ立ったままの渡部部長と園山課長に陳謝した。
すかさず、落合課長が口を開いた。
落合　「こーやちゃ(この二人は)、幼馴染で義理の兄弟ですけん。ちょっと栄一も想いが強くて、すみません。気にせんでください。」
すると、栄一のもとに拓海は詰め寄った。
拓海　「栄一。済まない。俺も、何とか力になりたい。」
二人は、涙を流しながら抱き合った。
太　「今日は、この辺ですまーこい。(おしまいにしよう)」
白々とした空気となったところで、太は告げた。
落合課長「そーでどげがいいかいのお。(それではどう進めていいのか)」
啓介　「ちょっと、かなぎ方で話し合う時間をごだっしゃい。(下さい)」

沈黙を続けていた啓介が、最後に一言口を割り、会はお開きとなった。
一週間後に、かなぎ方だけとの話し合いを持つこととなった。
かなぎ方以外の漁師たちは、皆、進め方に納得した。
明日一度東京に帰る拓海たち三人と落合課長は、【万作】で、とりあえず今日の労をねぎらった。
乾杯の発声に際し、落合課長はビールを片手にこう話した。
落合　「今日は、とんでもないところ見てもらってすみませんでした。」
「じゃれやこ、ですけん。」
渡部部長と園山課長は首をかしげた。
落合　「つばいこ、かな。」
「あっ、おーはいごん。」
更に、首をかしげて拓海の顔を見たが、拓海もうまく訳せない。
すると、ママが呟いた。
ママ　「じゃれあい？」
拓海　「そう、それ！」
一同納得して、ようやく乾杯が出来た。

翌日、拓海たち三人は、拓殖建設に帰社し、川辺副社長に状況報告した。
一方、十六島のセンターでは、その日から連日、山根支所長ら漁協職員立会いの下、かなぎ方の話し合いが行われた。そして、三回目の話し合いの場。
かなぎ方「栄一。お前の想いもよーわかー。(良く分かる)だども(だけど)、拓海はおらやつを助けらかと思って考えてごいちょーとこだないかや。(考えてくれているところじゃないだろうか)」
「啓やんには悪だども(悪いけど)、そりゃあ、奇麗ごとだねかや。(奇麗ごとじゃないだろうか)会社だけん儲けらかとしちょーとこだねかや。(会社だから儲けようとしているところじゃないだろうか)」
「だったらなんで、十六島だや。(だろうか)山陽の方が雨なと降らんし(雨も降らないし)、時化ーことも少ないだないかや。(少ないだろう)」
「そら、日本海の方が海がきれいだし、いろんなもんが獲れーけんだねかや。(獲れるからではないのか)」
太　「でも、なんで十六島だや。北陸や宮津やあの辺の方が都会から近いし、よけごと(たくさん)儲けることが出来らがや。(出来るだろう)拓海だけんだねかや。(拓海だからではないのか)」
支所長「拓海だけんだと思う。落合課長が言っとった。あいつ、地元の力になりたいって言っとったらしい。」

かなぎ方「何の得（とく）があーかい。（あるのか）」

太　「おらやつの、村や、かなぎが守れーけんだねかや。（守れるからではないのか）
　　啓やん、いーけん（いいから）お前もなんか言わっしゃい。（言えよ）」

啓介　「おらは、、、。」

栄一がつぶやいた。

栄一　「あいつ、いっつも気にしちょーに。（気にしている）ホントは。なんであいつに
　　あぎゃンことしただらか。（あんなことしただろうか）」

栄一は、また泣き始めた。

支所長　「栄一。もういーが。（もういい）そーよも（それよりも）、お前達ゃ、なんか損
　　なことがあーかい。（あるのか）」

支所長は、みんなに率直なところを聞いてみた。

かなぎ方「損かあ。そう言われーと、損は、ね（ない）わなー。」

啓介がようやく口を開いた。

啓介　「拓海は、あいつはあいつなりに想いを持っちょる。（持っている）あの時の、拓
　　海が中学の時のダイバーの密漁。あん時、拓海は、センターに一緒におって、、、。」
「わしと、太は英雄のようにみんなに褒めたてられ、さも天下とったやに（天下
取ったように）喜んどったに。（喜んでいたのに）村の、ご婦人方も、かなぎを
引退された方も、手叩いて褒めてございた。（褒めてくれた）」

啓介は、続けた。

啓介　「拓海は、泣いとったがあ。帰ってから、何泣いとーか、言って聞いたらこう言ったがあ。なんで海を好きなはずのダイバーと漁師がこぎゃンもめ事すーか。たった少人数の密漁するもんのお陰で、ダイバー全部が嫌われるんか。海を愛するもんやつ仲良くならんのかと。わしも、この前拓海と話すーまで、ダイバー全部が憎かった。あん時、わしはそういう捕まえ方をしとったかもっせん。せから、ウェットスーツ着たやつ見ると、犯人扱いしとったがや。」

太　「捕らにゃいーが。（捕らないならいい）捕らにゃ。そーが心配だわのお。（心配だ）」

皆、頷いた。

かなぎ方「捕らんこに（捕らなくて）、みーだけで何がおもっせ（面白い）かあ？」

「なんか聞いた話だが、おもっせ言うもんは、おもっせとや。」

「沖縄やハワイには、わざと行くもんもおーげなわ。（行く者もいるらしい）」

「ここ十六島の海もそげん（そんなに）負けらんでえ。沖縄だろうが、ハワイだろーが。」

「そら言えーず。（それは言える）」

支所長はこう諭した。

支所長　「拓海は、学生のころからダイバーやっちょーとや。（しているらしい）拓海に聞

いてみらっしゃい。（聞いてみよう）こんだ（今度は）、あいつだけ呼んで、市からは落合課長だけ呼んで、話し合わこい。どげだらか。（どうだろう）」

啓介を除くかなぎ方は「いだねか。（よいではないか）」と首を縦に振った。そして、太が啓介に、「啓やん、おもえもそれでいーだーが。（よいか？）」と尋ね、啓介も首を小さく二回縦に振り、そしてもう一度縦に振った。

支所長　「ほんなら、今日は一杯やらこい。栄一。焼酎持ってこい。」

栄一が、「ビール買って来たらダメかですか？」と伺うと、支所長は、「焼酎っ言っとるだらがあ！」と笑いながら右のポケットから二千円札を出した。

その夜、八時過ぎまで盛り上がった。

かなぎ方の会合の様子を聞いた拓海は、落合課長からの指示通り一人で帰省した。

平田市役所を訪れた拓海は、落合課長に連れられ、かなぎ方との会合の場である十六島の集会所へ向かった。

道中、拓海は落合課長から、栄一が記録していたかなぎ方との協議録のコピーを渡された。

拓海が一通り目を通したところで。

落合　「まあ、ふたふたと（じっくり膝を交えて）話さこい、っつうことだわな。」

拓海は、運転する落合課長の顔を見て、「はい。」と、しっかりとした返事をした。

二人が集会所に着くと、すでにかなぎ方と、山根支所長と栄一が集まっていた。

落合　「これはこれは、皆さん方御世話になります。」
落合課長は、入るとすぐ跪き、頭が畳に着くくらい平身低頭挨拶をした。
拓海も、落合課長の姿を真似、同じように「お世話になります。」とあいさつした。
支所長　「まあ、えがえが、早こと座ーだが（座れよ）。」
集会所は、床の間に近い方へ、長座卓がロの字に置かれてあり、両横の座卓にはかなぎ方が座り、下の方には支所長と栄一が座り、二人は支所長から上座に座るよう手まねきがあった。
遠慮しながらも、言われるとおりに拓海は上の座に座った。
少し間をおいて、支所長がこれまでのかなぎ方の会議の内容を、それぞれに確認するよう、ゆっくりと、また、一人ずつ見渡しながらしゃべった。
支所長　「っと言うわけで、まあ、かなぎ方の皆さんは、ダイバーが信用なるだらかっ、っつうことがやっぱり一番の心配だということだわな。まあ、そこんとこ拓海がダイビングの経験もあーけに（あるから）、率直に聞いてみらこいと（聞いてみようと）、言うことになったわけだ。せから（それから）、もうひとつは、まあ、なんだわや。（なんだろう）拓殖建設さんが、なんでこの十六島にわざわざやって来らいか、っつうことの本音のところが聞きたいわけだ。」
かしこまって正座をしている拓海に、支所長は胡坐をかくよう促し、「それじゃあ楽にさせてもらいます。」と拓海は答え、話し始めた。
拓海　「まず、ダイビングについてですが、国民の余暇活動が多様化しまして、海洋レジャーに目がいくようになりました。ダイビングの愛好者の人口も増えてきて

おります。まず、言いにくいことですが、皆さんもご存じかと思いますが、そう言うダイビングやレジャーフィッシングの方との海でのトラブルです。海は、皆さんの生活の場であります。しかし、今言うダイビングやレジャーフィッシングの方の余暇活動の場でもあります。それらを法律上排除することはできないのです。それは、ご理解ください。」

拓海は、皆の顔を見て続けた。

拓海　「ただ、ダイバーがアワビなど皆さんの漁業権の対象魚種となっているものを捕ることは、漁業法違反【漁業権侵害】となり、犯罪です。絶対にしてはいけない行為です。ですから、ダイビングの免許の取得の時に、それらはきっちりと講習を受けます。また、所属団体ごとに継続的に代表者が所属員に啓発していきます。我々が施設を建設した時には、徹底的にマナーについて、指導していきたいと思っています。」

皆静かに聞き入っていた。

拓海　「皆さんは二十年ばかし前のあの時の印象を持っていらっしゃると思いますが、僕もあの時のことが忘れられなく、ダイビングの資格を取得し、サークル活動の中で漁業者の方との共生について勉強してきました。以来、我々ダイバーがいろんな地域活動、例えば海岸のゴミ拾いに参加したり、海底にひっかかっている釣り具を回収したりすることによって、漁業者の方との距離が短くなってきています。本当は、漁業者の皆さんと同様、ダイバーもきれいな海が好きで

すし、きれいな海を守りたいと思っているんです。密漁があってはならないよう、我々も全力で啓発に努めます。」

拓海は、拓殖建設がこの地を選んだ理由について語った。

拓海　「わたくしどもの会社は、多くの公共工事や民間の開発を手掛けることによってここまでの会社となりました。会社の利益をもちろん内部留保もしながら、投資していただいている株主の方や社員へ配当をしてきました。しかし、これからは我々の責務として社会へ貢献をする時代が到来していると考えます。そこのところの想いが、今回の企画コンペで社内で認めていただいた要因です。都会地は、高度経済成長によって、もの、人があふれています。しかし、失礼かもしれませんが、、、。特に日本海側の漁村部は、地域がそして地域活動が支えられなくなるくらい、人口が減ってきています。栄一が言ったとおりです。」

感情が高ぶった拓海は、「ふうっ」と一息入れた。そしてこう続けた。

拓海　「なんか、自分なりにこの十六島から変えていきたかったんです。もう一度地方と都市とのバランスと言うか、、、。格差を縮めたかったんです。そして少しずつ田舎志向が都市部で巻き起こり、U・Iターンによる移住者が増えてきている時、短期的な滞在者の中から、少しでも定住者が出てこないかと。そのアプローチになればという想いです。」

かなぎ方「何も言うことはない。しゃん事（そう言うこと）が出来ーかや。ホントに。」

拓海　「施設を作ることは、すぐできると思ってます。ただ、滞在者に喜んでもらえる仕組みづくりは、皆さんの協力が必要です。」

かなぎ方「おらやつの出番もあーかい。（あるのか）」

拓海　「もちろん、ダイビングやフィッシングへの船の提供は、皆さんにお願いすることしかないと思っています。安全な運営を一番に考えていますから。それと、僕が目標としていることは、地域社会との融合なんです。皆さんの地域活動の一助となって、将来の定住に結び付けたいんです。なんとか、僕が育ったころのように、若い子どもたちの遊び声や、若い衆のにぎわいを取り戻したいんです。そうして、地域、伝統や漁業も含めて、守りたいんです。なんとかして、次に繋げたいんです。」

落合課長が言った。

落合　「定住かあ。おらやつ行政の定住対策は、すぐそーやつに補助金やーけん（あげる）、っつぅ話ばっかだったもんなあ。来たもんに補助金やーことばっかしで、こぎゃン風に実体験みたいなアピールすーこともなかっただけんのお。（なかったからなあ）」

栄一　「守り、繋げる、かぁ、、、。拓海、しゃん事考えてごいちょったかや。（考えてくれていたのか）」

栄一は、この前のことを思い出し、ガクッとうなだれた。

拓海　「本当は、ここはすごい魅力があると思います。」

太　「さ、そげだわや。（そうだ）沖縄だーが、ハワイだーが、おらだ（我々は）負けへんず。（負けないよ）」

一人のかなぎ方が失笑したら、みんな大声で笑い始めた。

支所長　「みんなそーでいーかいのお。（それでいいですか？）」

かなぎ方みんな、うんっうんっ、と首を縦に振った。

落合　「ほんなら（それでは）、また時期を見て全体会をしますけん。（しますから）また、連絡しますけん。」

そう言った時、一人のかなぎ方が「まあ、一杯焼酎やろこい。（焼酎のもうや）」と発言すると、啓介は、正子にすぐこっちへ来て支度をするよう電話した。

会議の話は抜きで、みんな昔の思い出話に花が咲いた。

太　「そーだだも（それはそうと）、拓海。お前、おせに（ちょっと大人に）なったのぉ。昔は、こぎゃンもんだったがのお。」

と、畳から七〇センチくらいのところへ手のひらをかざした。

太　「そーに比べ、栄一は口ばっかだけんのぉ。」

今宵も、太の独壇場だった。再びみんな大声で笑った。

拓海は、拓殖建設に帰社すると川辺副社長、渡部部長、園山課長に報告した。
副社長「それは、お疲れさんでした。だた、そろそろ地元の結論を出していただきましょう。長々と交渉事を進めるスタンスではないはずです。招かれて進出するということでしたでしょう。」
副社長は、外を見ながらこう諭した。
副社長「渡部部長さん。地元の方へ会合はあと一回のみで、わが社は結論を出したいと伝えてください。誰が良いのかなあ。布野市長さんか、横山県議会議員さんか、、。そこのところはお任せしますが、いずれにしても、そろそろ終わりにしましょうか。」
いつものように淡々とした口調で、話す内容は、いささか冷酷であった。
渡部部長「解りました。あと一度、三人で出向きます。」
渡部部長を残し、園山課長と拓海は一足早く企画開発部に帰った。
数分後、渡部部長が企画開発部に帰ってきて、川辺副社長との話の内容を、直接布野市長に伝えた。
布野市長も、十分理解された様子であった。

後日、平田市主催のもと、拓殖建設抜きで地元の者のみでの会を開催し、市の職員が前回の全体会の内容を出席者全員に確認し、かなぎ方との会合の様子を照会し、「なにか質問、意見はないですか。」と出席者の意見を伺った。

市で回答できるような内容についてはその場で答弁し、拓殖建設に出ていただく全体会において発言すべきでないような内容は、「その意見は、すべきでない。」旨伝えるという、いわゆる【事前調整会】であった。

皆、理解をして会は幕を下ろし、拓殖建設を招いて最後の全体会を行うこととなった。

全体会当日

布野市長「今まで、本当に拓殖建設さんには、地元説明会に何たび足を運んでいただきました。冒頭お礼申し上げます。また、参会の地元の方々にも、いろいろお知恵を出していただき、お礼いたすところであります。さて、本日は、大体の意見交換が出来たということで、最後に全体会を開いて、拓殖建設さんをここに集まったみんなで支えて、うまい具合に事業が進むよう、確認の場としたいと思っちょる。（思っている）何とか、最後には大きな拍手で会を終えたい。よろしく頼みます。」

そう布野市長があいさつした後、落合課長が、今日に至るまでの会合の内容を細やかに説明した。

落合　「そういうことで、これから皆さんとの質疑応答に入ります。なんかある人は、挙手の上、発言してください。」

二分くらい沈黙が続いて、落合課長が会を終えろうとした時、村の重鎮が発言した。

重鎮　「まあ、もう一杯いろんげなこと（色々と）教えてもらって、まあ、反対すーもんはおらんと思う。というか、皆さん基本的には、賛成しとらいて（賛成していて）、逆に一日も早く施設が完成して賑わえば、この地域も活気が出ると思っちょー（思っている）とこだ。まあ、施設は、拓殖建設さんがプロだけん、プロの目で作らいりゃよござんすわ。（作られればよろしいですわ）ただ、ここで何をするかというソフトの部分について、もうちょっと継続的に話し合いの場を持っていただきたい、というか、我々も一緒になって考えたいと思うところだが、、、。」

重鎮は、続けた。

重鎮　「まあ、栄一君も途中熱なって（熱くなって）、失礼なこと言ったって話聞いちょーが（話し聞いているが）、まあ、この十六島に住んで、一生懸命にやっちょーけんのことだけん。（一生懸命にやっているものだから）そこのところ、拓殖建設さんの方々も、これから施設の建設の準備もあろーとおもうが、なんと、こっちに誰か住まって（住んで）、じっくりとおらやっと一緒に練ってもらうと、とてもいいソフトの計画が出来ると思うがのお。そこんとこの取り組みについて、お尋ねしたいですわ。」

市長、落合課長、観光振興課長は、最後に発言をした重鎮に、頭を少し抱え、まさに苦虫を噛みつぶした顔になったその時、渡部部長が口を開いた。

結構重たい発言に、本来であれば、ある程度の期間や幾ばくかの事業費がかかること、誰をその期間派遣するか等のことから即答できないため、会社に持ち帰り川辺副社長と協議して回答するところであるが、渡部部長は即答した。

渡部部長「解りました。社員をこれから常駐させ、ソフト開発の場を含めて、皆さん方と協議の場をこしらえましょう。ただし、、、。」

渡部部長は、少し間を置いて話した。

渡部部長「皆さん、開発に際して、様々な許認可に係る同意が必要な場面では、同意していただけるということでよろしいですね。わが社としては、それが前提となります。」

落合　「拓殖建設さんがここまで本気だが、みんな賛成ということだわなあ。もう。」

自治会長が拍手すると、皆追随し、拍手喝さいとなった。

渡部部長「それでは布野市長さん、いずれ管理事務所も必要となりますので、十六島の中で管理事務所を建設できるような場所を譲ってください。」

園山課長と拓海は、渡部部長のそのような姿勢に眼を見合せた。そして、思い出した。川辺副社長との出発前の協議に、渡部部長が一人残って話をしていたことを、、、。

渡部部長の姿と川辺副社長の姿が、だぶって見えた。

会議は終わり、その後、市から【オリ（おかず）】に【酒】が振る舞われ、乾杯をして十分

もたたないうちに拓海たち三人への酌が行列した。

翌日、拓海たち三人は、副社長室を訪れ全体会の様子を報告した。
すると、あたかも内容を事前に掌握し、今後の予定の青写真が描かれているかのように副社長はこう話し始めた。
副社長　「皆さん御苦労さん。早速ですが、錦織君、現地に入ってもらうことになります。
あと、二、三人職員をつけようと思いますが、よろしくお願いします。向こうでは、とりあえず『㈱拓殖建設十六島営業所』という名称で事務所を開設しましょうか。ご家族のこともあるでしょうから、今日はまあ、内示ということで。
十六島営業所所長を委ねたいと思います。よろしいですね。」
拓海は、「はい。」と返事をし、三人で副社長室を退室した。
いや、「はい。」という返事しかできない雰囲気に包まれていた。
企画開発部に帰ると、渡部部長から話があった。
渡部部長「まあ、君しかいないだろう。よろしく頼む。」
園山課長「あまりの展開に、どう話してよいかわからないが、栄転には間違いない。それに、部長おっしゃるように、君しかいないだろう。頑張ってくれ。」
拓海は、その日ばかりは、午後五時、定時に退社し、里美の待つ家に帰った。
家には、吹奏楽部に入っている七海はまだ学校から帰ってきていなく、和は、友達と近所の

公園にキャッチボールに出掛けていた。
拓海は、今日会社であったことを里美に告げた。
里美　「長くなるの。」
拓海　「最短でも、開発に係る許認可に要する手続きで一年ちょっと、建設に約二年、それと初年度を見守ることになるから、、、。四年くらいはいるようになる。」
里美　「四年って長いね。一年かそこらだったら、子供たちの学校のこともあるから、あなたに単身でお願いするんだけど、、、。四年となると私はついていきたい。でも、子供たちはどう思うかしら、、、。」
拓海　「一緒に行きたいけど、七海は、今の中学辞めちゃうと、せっかくのエスカレート進学が出来なくなっちゃう。拓海はまだ小学生だからどうにかなるんだけど。」
里美　「子供たちに話しましょう。それで、二人に分かってもらいましょう。一緒に引っ越すことについて。」
一時間後、和が帰ってきて、しばらくして七海が帰ってきた。
和は帰るとすぐ、いつものようにプラスチック製の球を寝そべって天井めがけて投げだした。
相変わらず、五球に一球くらいは、手が届かないところへ行ってしまう。
里美　「みんな、こっちに来て。」
少し反抗期の七海は、まだ動こうとしない和の半ズボンの下の右腿をペチンと叩き、「早く来なさい。」と諭した。
和　「母さん、またお姉さんが叩いた。」

和は半ベソをかき里美に訴えると、里美は「またあ、和、泣くな！」と叱った。
四人が集まると、拓海は内容を告げ、七海と和の考えを素直に話すよう伝えた。
数分考えてから、七海はこう話した。
七海　「私、父さんと一緒に行きたい。学校のことならなんとかなる。」
里美が「本当にいいの？」と再度尋ねても、七海は自分の考えを変えることはなかった。その後、拓海が和に尋ねると、和は鼻をすするように少し泣きだした。
里美　「どうしたの？行きたくないの？」
和　「僕、友達できるかなあ。野球続けられるかなあ。」
和の左に座っている拓海は、こう笑顔で語りかけた。
拓海　「和、お前なら友達はすぐできるよ。それにスポ少もあるし、栄一おじさんが監督してるらしい。」
和は、二度首を縦に振った。
七海　「泣き虫　和。あんただけこっちに置いとく！」
「わーん。」　和は里美に抱きつき、里美は拓海と顔を合わせほほ笑んだ。

二〇〇五年　正月

拓海は、正月は東京で迎え、四日に家族を残し一足早く平田市に来た。

平田市から紹介された、元小学校跡地で開発地にもほど近く、開発地を見下ろす小高いところへ、営業所と併設して社員寮を建設することとなった。

拓海は、社員寮が竣工し、里美たち家族が引越しするまでの約三カ月間、実家に居候させてもらうこととなった。拓海が実家に帰り、啓介と正子と正月のあいさつを交わすと、十六島に古くから伝わる雑煮を食べた。

久しぶりに食べる、十六島海苔をふんだんに使った雑煮はとてもうまかった。

拓海　「春休みになるとみんながこっちに来るから、また、お願いします。」

啓介と正子は、とてもうれしかった。

正月休みが終わると、営業所建設のための安全祈願祭が行われ、横山県議会議員に布野市長、自治協会の役員らと拓海は、地元の神主による神事に参列した。

建物は二棟あり、一つの棟は最大百人収容できる会議室を備えた営業所と二階には１ＤＫの独身寮を五室、二階建て３ＤＫの拓海が居住する所長寮を併設するといった棟。横には、五階建ての社員寮の棟である。

営業所の棟は、三月下旬の竣工を目指し建設工事は急ピッチで進められた。

三月の暖かい日、営業所の棟は完成した。
それから数日後、本社からは社長が、来賓には富田代議士、横山県議会議員、布野市長及び市議会から議長等数名と、観光協会や商工会議所、建設業協会などから役職員が、また、自治協会長など地元代表者に加え、漁協の役職員らが参会し、にぎにぎしく開所式が挙行された。
渡部部長の進行で、経過説明の後に社長があいさつし、富田代議士の来賓代表挨拶、続いて拓海のあいさつとなった。
拓海　「、、、ということで、私どもがここに、根を生やし、皆さまに支えられながら成長できるよう全身全霊で邁進する決意であります。なによりも、今日に至るまで私どもとともに、明日のこの地域を見据え、ご指導いただいた地域の皆さま方に感謝を申し上げます。こうして、開所式を迎えましたことに対しお礼申し上げ、簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。」
参会の全員から、割れんばかりの拍手が鳴りおこった。
そのころ東京のマンションでは、引越しの準備が終わり、引越センターのトラックが荷物の集荷を終え、最後に、帰省してすぐ使う衣類や貴重品等を、里美、七海、和それぞれ一箱ずつの段ボール箱にまとめ、里美は駐車場まで車を取りに行った。
里美は、マンションに子供たちを迎えに戻ると、拓海に電話した。
里美　「準備が出来ましたので、これからこちらをたちます。計画どおり途中愛知で休憩して泊まり、明日の夕方くらいになります。安全運転で帰りますので、心配しないで大丈夫です。七海、和も元気ですよ。」

拓海　「うん。待っている。急がなくて大丈夫だから、安全運転で来てくれ。」
電話の最中七海は、みんなの荷物の口をガムテープで閉じてくれていた。
和が、天井に向かって、まだプラスチック製の球を投げて遊んでいる時。
『ペチンッ』
和　「母さん！またお姉さんが叩いた！」
東京の生活から、島根に。三人とも道中、わくわくとして笑顔でたくさん話をしながら拓海のもとにたどりついた。
満面の笑顔の拓海と、真っ赤に輝く夕日が迎えてくれた。
「父さーん！」車中、気丈に振る舞っていた和が、車を降りるとすぐ、両手を広げた拓海に抱きついた。

二〇〇五年四月一日　㈱拓殖建設十六島営業所

営業所に配属された職員が集合した。

営業所には、大阪支社の三十八歳の船本営業係長が営業課長として、本社から拓海のダイビングサークルの後輩である三十二歳独身の斎藤大地主任の二人に加え、地元採用の二十八歳の原という設計コンサルタントに勤務していた女性、計三人が拓海のもとに配属された。

建設工事に着手する時期には、建設課を設置し、技術職員が三名配属される予定である。

拓海　「それでは、改めましてよろしくお願いします。少人数で様々な許認可の手続きや、地元の諸会合、ソフトプランニングに着手していくことになりますが、どうかよろしくお願いします。来年には、技術職員を迎えることとなりますが、それまではこの四人に任されています。まあ、風通し良く、みんなのチームワークを持って前進していきましょう。私も家族ともども施設が好転するまでは、この地に住んで、地域に根を下ろしていきます。困ったことがあったら、家にも来ていただいて、酒でも飲みながら語りましょう。さあ、それでは、船本課長と斎藤主任は、出雲市(※今春旧平田市は旧出雲市等と合併)や建設業協会、自治協会長や漁協さんなど、今週のところであいさつ回りをしてください。それから原さんは、地元の建設会社から紹介されたキャリアのある方ですから、このあたりの許認可の手続きがどういうものなのか熟知されていますので、三人で全体のスケジュールについて立案してほしい。よろしくお願いします。」

船本課長、斎藤主任と原は、すがすがしい返事で答えた。

八日になって、中学校と小学校、それぞれの始業式が行われ、七海と和はそれぞれ地元市立校へ通うこととなった。といっても、ここ旧平田市には、小学校から高校に至るまで公立高校しかない。

七海が入学した平田西中学校の吹奏楽部は、県内屈指の実力校で全国大会にも毎年出場している伝統校である。早速顧問の先生に入部届を提出し、家に帰ったときには、満面の笑みだった。

和は、、、。

担任　「それでは、今日からこのクラスに転向してきた錦織和君です。お父さんの仕事の都合でこっちに来られました。みんな仲良くしてください。」

クラスは、学年に一クラスしかない。一年から六年までクラス替えもなく、転向して出ていく児童はいても、和のように転校してくる児童はほとんどいない。

子供　「へー。東京だとや。だけんスモッグの匂いがすーわ。」

担任がいなくなるとすぐ、いじめっ子が習いたての言葉で、東京の空気を匂ったこともないのに、和をからかった。

和は下を向き、鼻をすすり、涙が出そうになったとき、、、。

舞　「だらず（馬鹿か）。おまえら、今先生が言っただらが。（だろうが）」

クラスで一番背の高く、和より五センチくらい高い落合課長の末っ子　舞　が、男の子の腿をたたいた。舞はクラスの学級委員であった。

子供　「痛ってえ。」

舞　「謝れ。すぐ和に謝れ。」
この学校では、コミュニケーションを取る勉強の一環として、ファーストネームで呼び合うことにしている。和には、それがとても新鮮であった。
子供　「ごめんなさい。」
和は、首を一度縦に振った。
給食が終わり、昼休憩のとき、和が校庭でキャッチボールをしている児童を、体育館の横の出入り口の階段から眺めていたとき、舞は和に声をかけた。
舞　「なんかあったら私が守ってあげる。」
和　「、、、。」
和は、舞の真っ直ぐな表現に、心ときめき、言葉が出なかった。
舞　「ってか、和も言い返さなきゃ。仕返ししなよ。」
舞はそう言い放って、キャッチボールをずっと見ている和にこう語りかけた。
舞　「和、野球すんの？」
和　「うん。」
舞　「うちもするんょ。ポジションどこ？」
和　「ピッチャー。」
「へえー。」と舞は言うと、さっき和をからかった男の子にグラブをもう一つ持ってくるよう指示し、和に男の子へ投げるよう、グラブとボールを渡した。

“ビュンッ”　和が投げた球は、キャッチャーの男の子の前でワンバウンドし、男の子の横を大きくそれたが、子供たちが見たこともないそのスピードに、「やっべっー（やばいくらい球が速い）。」という歓声が沸き起こり、舞をはじめみんなが和のもとに寄ってきた。

みんな　「和、一緒に野球やろーぜぇ。やった、やったぁ。」

大はしゃぎだった。

帰ってから、和は学校での出来事を拓海に話した。

拓海が和に、「こっちのスポ少で野球をするだろう。」と問うと、和は答えを躊躇した。

何故か問いただすと和はこう答えた。

和　「向こうで野球始めたのは、先生が野球したらって言われたからで、、。」

拓海は、こう諭した。

拓海　「確かに、始めたきっかけは担任の先生が君のキャッチボールを見てスポ少ですよう勧めた。だけどね。和はもう野球をはじめ、続けている。歩きだしているんだ。」

和は、じーっと拓海の顔を覗き込んだ。

拓海　「最初の一歩は確かに先生に背中を押されて歩きだした。でもね。自分で歩きだしたかどうかって、もうどうでもいいことじゃん。もう歩いてるんだから。それより、楽しく、力強く、歩くことが大切じゃん。立ち止まったら、また、歩くんだ。前を向いて。和、野球続けよう。」

和は、納得した。

翌日、和は拓海に連れられ、日野栄一が監督を務める【西部野球スポーツ少年団】に入団した。

栄一は、和も加わって行われたキャッチボールを見た後、みんなを集合させ、それまでピッチャーをしていた六年生でキャプテンの息子の栄次にこう言った。

栄一　「栄次。はい、これ。」

栄次に渡されたものは、キャッチャーミットだった。

栄次　「えっ。キャッチャー？」

栄一　「おまえ、これがファーストミットに見えーかい？」

栄次　「いや、、、。」

栄一　「いままで、キャッチャーがおらんで、普通のグラブで交代ごうたいでやっちょただらがぁ。（やっていただろう）良かっただらがぁ。（良かっただろう）正捕手が出来て。」

みんな納得した。ポカンと口を開けた栄次を除いては。

次の週　十六島営業所

拓海は、課長らが取りまとめたスケジュールについて、説明を受けた。

課長　「ここの農地を一部開発地に取り入れ、農地の転用手続きや開発の手続きで一年くらいはかかると思います。そこから建築の手続きなどで数カ月はかかろうかと、、、。是非、ここの農地を景観上も取り組みたいんです。」

拓海　「これくらいの規模だとすれば、建設工事が二年くらいかかるだろうから、今から三年後のゴールデンウィークに間に合わないことになるのかあ。何とか、行政への手続きの作業も短縮して、建築の図面も本社で準備してもらったり、工期が短くなるよう本社と連携を図って行こう。やはり、こういった施設のオープンは、ゴールデンウィークを目指したい。いずれにせよ状況はわかったので、本社に伝える。ありがとう。それぞれ更に手続きのスピードアップに努めてほしい。」

社員　「解りました。」

三か月が経ち、夏休みとなった。

里美も、田舎の生活に慣れ、地元の婦人会の活動やＰＴＡ活動に積極的に参加をするようになり、地元の方々からも、「所長さんの奥さんって、ホントにこっちで生まれた方みたい。」とみんなに愛されるようになった。

里美は、他のＰＴＡの方が都合がつかない時も、「自分は暇だし、子供たちの笑顔あふれる姿を見てることが楽しいから。」と、プール当番をかって出て、ほぼ毎日のように小学校に行くようになっていた。

七海は、毎日部活動で中学校に通い、和は家から約１．５キロメートル離れた栄次の家に行っては、集落の前の石積み防波堤の前でカサゴ釣りか、べべ獲りをし、栄次がいないときには、啓介の家に行って、プラスチック製の球を天井めがけて投げるという毎日を繰り返していた。

啓介　「和、お前また寝そべって球投げちょーか。（投げているのか）だいしゃ（少しは狙ったとこに投げれーようになったかや。」

和　「緊張すーと、どこめがけていーか（めがけてよいのか）わからんやんなーに。（ようになる）」

和のずーずー弁（出雲弁）も板についてきた。

啓介　「的を決めーだがや。（決めろよ）あそこの天井の節狙ってみーだがや。（狙ってみろよ）」

和　「やってみーわ。」

和は、そう答えながらも、『それくらいなことはしている。』と思って投げている。

むしろ、啓介が言っている意味がこの時は分からなかった。

毎日が、こうして時間がゆっくりと過ぎていく。

里美、七海、和とも、『引っ越してきて本当に良かった。』と感じていた。

拓海は、毎日忙しいながらも充実した仕事ができ、家族の笑顔も相まって心豊かな毎日を送っていた。

農地の転用申請を提出し終えて、ソフト面のプラニングを始めることとした。

拓海は、落合課長に相談し、観光協会、商工会議所の関係者に加え、自治協会、漁業者、婦人会、漁協に農協等の委員からなる【周辺観光クルーズ】、【体験型産業】、【食のフロンティア】、【地域活動体験】、【マリンレジャー】という五つのワーキンググループを立ち上げ、それぞれ月に二度ずつ土・日曜日や夜間に会議室でワーキングを行った。

【周辺観光クルーズワーキング】は、地元の旅行会社も参加してもらい、市内の観光コースに加え、松江城など周辺の観光コースをモデル化し、バスでの周遊パックを商品化するとともに、隠岐諸島への高速艇の就航についても話し合った。

【体験型産業ワーキング】は、季節ごとの地元固有の産業をカレンダー化していった。

春には、メバル釣りに定置網観光、米の植え付け、初夏にはぶどう狩り、秋には米の収穫に梨狩り、冬から春にかけては板海苔作りに板わかめづくりなど、地元の豊富な資源の再発見に沸いた。

【食のフロンティアワーキング】も同様に、地元で獲れる素材をカレンダー化し、おいしい食べ方講座や、漬物作りに、一夜干しづくり、などの各種加工教室を企てた。

【地域活動体験ワーキング】では、神楽や獅子舞などの体験教室の計画に加え、高役など参加した場合の地域貨幣換算を議論した。

【マリンレジャーワーキング】では、定置網観光、フィッシングとダイビングについて話し合った。

そのワーキングには、釜浦の漁師　健治　の孫で、漁協に入社五年目で、四月から平田支所に赴任した　真（まこと）　が加わった。

真は、松江で勤務していたころ、勤務地の近くのダイビングスクールでライセンスを取得したという二三歳のとても陽気な青年だ。

真は、高校まで野球経験があり、夏の島根県大会でベスト四まで導いた、地元じゃ少し有名になったピッチャーで、消防団の訓練にもいつも参加し、春から西部野球スポーツ少年団のコーチに就いている地元愛の強い人間である。

真は、ワーキングが始まる前から、十六島営業所に出入りし、空き時間を見計らっては、拓海のダイビングの色々な話に聞き入っていた。

真は、このソフトプラニングにかかわろうと、次第に全てのワーキングに自ら参加を名乗り出て、仕事場から直行し、ワーキングが始まるまで和とキャッチボールをし、たまに夕御飯をともにするなど、ちょっぴり家族の一員のような存在になってきていた。

真　「おお、ええ球じゃ、ええ球じゃ。さぁ来い。」

和　「エイ。」

相変わらず、力が入るときには、どこに投げて良いかわけが分からなくなる。

真　「そう言う球がなくなると、ホントおまえすっげーピッチャーになるんだがのお。まぁ、まだ五年生だけんのぉ、怪我せんきれいな投げ方を身につけて、オーバーワークせんように、ちゃんとケアして、少し違和感があったら、ちゃんと言うことが大事なんよな。あと、メンタルな！もっと強く持って。今日は、この位であがろうや。」

真は、いつも三十球投げさせては、丁寧にクールダウンさせていた。

里美　「ちょっと多く作りすぎたから、真さんよかったら一緒に食べない？」

真　「おばさん、いつもすみません。」

「それにしても、いつもとてもうまいです。」

一口食べた後、満面の笑みでこう続けた。

真　「七海。俺が五つ若かったら、おばさんの手料理の腕前の遺伝子を持つ七海を、口説いとったに。」

七海　「ない、ない。五つ減ってもおっさんじゃん。だし（その上）、私ゴリマッチョのソース顔より、文化系のショーユ顔が好きなの。」

みんな大笑いした。

【マリンレジャーワーキング】が始まった。
参加者は、拓海たちに加え、落合課長と、漁協からは山根支所長、栄一に真。
漁師方からは、定置網の社長と漁労長、一本釣り会会長ら三名の釣り方、かなぎ方からは啓介と太らの五人である。

拓海　「今日は、第一回目ですので、先ずわが社の基本的な考え方をお話します。わが社が企画しますソフトプランでは、隠岐諸島への高速艇を除いては、皆さま方の協力を仰ぎたいと思っています。つまり、ここでのマリンレジャーは、皆さまの漁業の合間にお願いしたいと思っており、宿泊者を含めた施設の利用者が自らプレジャーボートなどを運転し、レジャーを楽しむということは一切考えていません。また、水上バイクなども考えていません。」

真　「えっ、いいんですか？そんなことでいいんですか？」

拓海　「企画の目的の一つが、地域との共生なんです。そして、将来この企画を通して定住を促すことが出来れば。だから、皆さんとのかかわりの中で進めたいんです。皆さんの漁船を出していただくか、専用のレジャー船を作って皆さんに運転してもらうかは、ケーススタディーしながら考えましょう。」

太　「さっ、何のことかい？」

拓海　「あっ、ごめんなさい、例えば定置網観光、一本釣り、ダイビングなどそれぞれで使用する船を、場面場面でどういうふうに提供することが好ましいか考えていきましょう。」

かなぎ方「そーわ、いわー。密漁なんてないがや。」

拓海　「密漁のことも少し気にはしましたが、何よりも皆さんと施設利用者が一緒にいる空間をプロデュースしたかったことと、安全面を考えて、、、。」

支所長　「そぎゃンこと、去年言ってごいちょったら（言ってくれていたら）、なんたび話し合うこともなかったに。」

支所長は、笑いながら、且つみんなに言い聞かせるように「のお、のお」と相槌を打ちがら話した。

拓海は、次の話を切り出した。

拓海　「定置網の社長さん達には、ほかにお願いがあるのです。瀬戸内海などで実施されている定置網観光に加え、定置網に遠隔装置の水中カメラを設置させていただき、例えば危なくない大型の魚類が入ってきたとき、網の中でダイビングをさせていただきたいんです。魚と戯れるために。」

漁労長　「そりゃ、漁の時間と合わないなら出来ー事だわな。だども（だが）、水中カメラつけてもらうのはいいが、おらやつもそれ見らしてもらっていいかい？魚があんましはいっちょらな（入っていなければ）、網揚げすーこともせんですんし。（しなくていいし）」

拓海　「もちろんいいですよ。というか、こちらに皆さんの控室もいるでしょうし、そこへモニターをつけましょうか。たくさん魚が入ったときには、希望者に一緒に網揚げをさせていただくとかできますか？」

漁労長　「しゃんこた（そういうことは）、みやす（容易な）ことだわな。」
太　「漁労長、お前あんまし厳しくしすぎーなや。定住すーもんがおらんやんなーけに（定住する者がいなくなるから）。」
漁労長　「おまえたちに言われたくないわ。」
皆、大笑いした。
「お前たちゃ、笑ってしまって話が進まんがぁ、はや、本題に戻らこい。」との山根支所長の合図で、皆協議を進めた。
拓海たちは、ワーキングの内容を都度取りまとめ、本社にもメール送信し、上司等の意見を仰ぎながら次回ワーキングに臨むなど、地元と本社との架け橋に奔走していた。

九月も終わるころ、栄次ら六年生にとって最後の公式戦が行われた。
旧平田市内の五少年団による大会の決勝まで駒を進め、決勝戦は、二日目の日曜日行われた。
その日は、和はいつも以上に力（りき）んでいた。
六回が終わるまで、和は相手打線を二安打無失点に抑えていた。
七回表、西部スポーツ少年団の攻撃。ツーアウト三塁。バッター栄次。
栄一　「キャプテンらしいとこ、ちょっとは見せろや！」
真　「楽に楽に。センター返しだぁ。」

ボテボテのピッチャーゴロで万事休した。「あーあ。」という、保護者を含めた嘆きでこの回の攻撃を終え、七回裏相手チームの攻撃が始まった。

和は力んでしまい、スリーボール・ツーストライクからの大暴投により、ランナーノーアウト二塁になってしまった。

すかさず、ランナーは三盗し、キャッチャー栄次が投げた球は、三塁手を大きくそれレフトが取り三塁に投げたが、ランナーは悠々のセーフであった。

栄一　「なにしとーかい（何してるんだ）キャッチャー。一回集まれや。」

内野手が皆集まった。

栄次　「ごめん。和。」

和　「いいんや。僕が出したランナーだけん。」

舞　「終わったこと、どげでもいいがん。（どうでもよし）延長戦までがんばろっ。」

ファーストを守っている舞は、冷静にみんなを鼓舞した。そして、誰よりも声を出した。

舞　「バッチ来ーい！」

バッターは、大きく振り遅れ、打球は舞のもとへボテボテのゴロとなり、舞は迷わずバックホームをし、三塁と本塁の間でランナーを挟んだ。

ボールを捕球した栄次は、三塁の方へボールを持ちながら詰め寄り、三塁手との距離が縮まったところでボールを投げ、ホームベースは和がバックアップした。次に、三塁手は、ランナーがホームに走り出したことに従い、和との距離が縮まったことを見計らって和にボールを投

げ、その後、ランナーが三塁に引き返すプレーを見た和は、ボールを持って三塁方向へ詰め寄ろうとした時。

和は栄次がランナーのそばまで来ていることに気付き、栄次めがけて強いボールを投げた。

「あーあ。」ボールは大きくそれ、転々とする間、決勝点が入り、チームは惜敗した。

栄次　「和、泣くな！」

舞　「さあ、並ぼ！」

和が、三塁と本塁の間で崩れ泣いていたところへ、栄次と舞二人は近寄った。

和　「ごめんね、栄あんちゃん。」

栄次が、和の左腕をつかみ立たせようと持ち上げ、舞は、和の右側からそっと背中に手を当て、みんなが整列するホームベース付近に導いた。

里美　「泣くなあ！和。」

甲高い里美の声で、みんな手を叩いて笑った。

審判はクスッと笑った後、一呼吸を置いてから、右手を天高く上げ「ゲーム」の号令をかけた。

十月に入って、二百勝をあげたプロ野球選手の講習会が松江市で開かれ、和は新チームのキャプテンとなった舞とともにユニフォームを着て参加した。

講師　「君たち、１．５メートル先の的に百発百球当てれるかい？僕は当てれるよ。」

講師は、そう言うと床に的を置き、真上に目を置き、目の下からボールを落とし的に当てて見せた。

講師　「これがコントロールってことなんだよ。的に向かってボールを目線の先で投げるんだ。目線の先でね。」

和は、目からうろこが落ちた想いをした。

約二時間に及ぶ講習会から帰ると栄次の家に急いで行き、講習会の内容を自慢げに報告した。

和　「すっごいよ、すっごいこと習ったよ。」

和は、あまりの嬉しさに、啓介の家に行っては、同じことを啓介と正子に話し、寝転がって、いつものように天井めがけてプラスチック球を投げてみた。

和　「ここかあ、ここでリリースすんのかあ。すっげー。全部いいとこに行く。」

啓介　「おー、そりゃあ、おらやつかなぎと一緒だわな。目線の先に銛おいて、獲物めがけて投げーわなあ。太が何十年たっても分からんでのお。」

啓介は、自分のかなぎとも似た話をしている和をいとおしく思い、和の頭をなで、こう言った。

啓介　「和、お前もいいかなぎ方になれーとまっしゃい。(なれるはずだ)」

和は、それから放課後、家に帰る前にはいつも舞とキャッチボールをした。

二人とも、コントロールが見違えるほど良くなっていた。

和　「いいねえ、舞。」

舞　「和もいいよ。でも、うちはキャッチャー無理だわ。和の投げる球早くて、少し

怖い。」

和　「まだ、本気で投げてないよ。じゃ、行くよぉ。」

和は、本気で投げるふりをした時、「いじわる！」と舞が大声をあげた。そして二人は、笑ってキャッチボールをやめ、ボールを軽く投げながら少しずつ近づき、三メートルくらいになったところでグラブからグラブへと腕を回転しながらトスして渡し、クールダウンした。

真っ赤な夕日を背にして。

十月の終わりに、平田市の五少年団の新人戦が行われ、西部野球スポーツ少年団は、和が登板することもなく決勝へコマを進め、決勝戦はいよいよ和の登板となった。

審判　「ストライクスリー。集合」

「ゲーム。」

その日の和は、二安打無四球の完璧なピッチングだった。

真　「なんてて（なんということか）、みちがえるようになったのお。」

舞　「ナイスピッチング。」

栄一　「さあ、これでシーズン有終の美で終わった。こーから、厳しいトレーニングの冬がまっちょーけんのお。（待っているからな）保護者の皆さんに挨拶して帰るぞ。」

子供たちの今シーズンは、終わった。

拓海の仕事も順調に運んでいた。
五つのワーキンググループの作業もまとめ作業に入っていた。
そして、ここで一度、ワーキンググループごとの方向性のすり合わせをしようとの委員からの意見があり、各ワーキングから数名ずつの出席を得て、全体会を開催することとなった。
忘年会を兼ねて。
落合課長の進行のもと拓海がまず今日までの委員の方々の尽力に対するお礼を申し述べた後、それぞれのワーキングの経過を船本営業課長が説明し、意見交換が執り行われた。
落合課長「ということで、今日までの経過を説明いただきましたが、何か意見・質問はありますか。」
自治会長「いやあ、まったくもってありません。漁師方はどげかいの。（どうでしょう）」
支所長　「たいがい（だいたい）みんないーあんばいで。のお。」
かなぎ方「まったくもって、こげんわやつ（我々）のこと考えてごいちょらい（考えてくださっている）とは思わんだった。本にこぎゃンことがなーだらか（なるだろうか）、と今も疑心暗鬼ですわ。」
皆一同、「そげだ（そうだ）、そげだ。（そうだ）」と感嘆していた。
拓海は、今年度一杯このワーキングを今のペースで開催したい、とお願いし、皆の拍手により了承された。

拓海　「それでは、ささやかながら皆さま方のご協力に感謝いたしまして、簡単ではございますがこの後宴席をと考えております。少しばかりのお時間を頂いて、宴席に換えさせていただきますので、よろしくお願いします。」

社員に加え、漁協の職員やご婦人方も手伝い、速やかに宴席が整った。

拓海　「それでは、皆さま方の今後ますますのご健勝並びにご健康を祈念して、カンパーイ。」

皆、恵比寿祭りのように、いい笑顔で飲んで騒いだ。

里美も、七海も、和も十六島の生活に慣れ、地域に溶け込んできた。

里美は、日中、地元の水産加工場に人手が足りなく、里美に是非との依頼があったことと、拓海からも、一夜干し作業が素人にとってどういう塩梅で出来るのか、モニタリングのようなことを頼まれ、そして、里美自身も興味があったことから、喜んで毎日四時間くらいのパートに出るようになった。

冬が来て、地元の特産の十六島海苔の加工作業も手伝うようになった。

春には、板わかめを作る作業にも出る予定である。

七海は、持ち前の勉学意欲も旺盛のうえ、吹奏部の部活動も一生懸命楽しみながら参加している。

和は、日が沈むまで舞らと校庭でキャッチボールをし、帰ってからは、相変わらず天井めが

けてプラスチック球を投げている。
皆、充実した日々を過ごしている。

二〇〇六年　正月

元旦、拓海一家は、十六島の宮に参り、錦織家の墓参りをしたのち、啓介の家に正月のあいさつに訪れた。
啓介の家で、おせち料理に加え、この地伝統の“海苔筆”という十六島海苔をふんだんに使ったお雑煮を頂いた。
特に和は、この雑煮がとても気に入り、何杯も何杯もおかわりした。そして、毎日のようにお雑煮を食した。
五つのワーキングプロジェクトの会合も、年を越えてから、いわゆる手詰まりの状態となってきた。それは、この地域特有の冷たい風が吹き荒れるこの季節に、提供できるものが少ないからである。この地域は、積雪こそ少ない。というより、風が強く、雪も積もらないという気候に思えてしまうほど、冷たい風が吹き荒れる。
海上のしけが続き、隠岐諸島への高速船もしばしば欠航するほどである。
拓海ら社員四人は、落合課長と観光振興課長、山根支所長ら漁協職員と、ゆっくり時間を掛けて話し合い、何でもいいから意見を出し合おうと会合を持った。
そして、落合課長の提案で、録音をした上で、一杯飲みながら話そうという企画で始まった。

落合課長いわく、飲んだ時の会話ほど面白い話はない。しかし、翌朝になれば忘れているから録音するのだそうだ。

拓海　「この十六島の方々は、この季節に何してるんですかねえ。」

支所長　「まあ、海苔摘みかなあ。しかし、それは危なくて、無茶すぎる。」

落合　「もう少しあったかくなれば、フキノトウ味噌づくりがあるわあ。」

原　「そりゃ、いただき。」

栄一　「地合の漁師は、昔冬場に酒造りしとったとや。（していたらしい）今でも何人か酒蔵に行くもんがおーげなわ。（いるらしい）」

船本　「それ、もう少し聞かせてください。」

落合　「まあ、酒造りの職人。出雲杜氏って言うくらい、結構全国に出向いて、酒を造るんだ。昔から、出雲杜氏は有名だ。ここ平田には、酒の神さんもおらっしゃー（いらっしゃる）くらいだけん、酒文化はそりゃあ昔からあっただろうて（あったでしょう）。」

拓海　「酒かあ、、。大社町にはワイナリーもあるし。それは面白いテーマかも。ちょっと船本課長に斎藤君、原さん、もうちょっとこの地域の酒文化を調べてみてくれ。それと、酒米作りにブドウ作り。面白いかもしれない。」

支所長　「出雲の西の方では、焼酎用の芋つくっとーとや。」

落合　「三酒の何とかかい。字は違うだども。」

真　「酒とくりゃ、やっぱし酒の肴も考えらんといけんでしょう。」

拓海　「真。お前面白いこと言うな。この時期、獲れるものを洗いざらい出し合ってみましょう。」
支所長　「ナマコだな。おらは。赤ナマコは香りがいーだ。」
原　「さっき言われたフキノトウ味噌づくりや、漬物など面白いと思うわ。」
観光課長　「粕漬けもうまいよ。アマダイに鯛、イカなんかうまいで。イカ飯なんかもうまいで。」
原　「なんだあ、いっぱいあるじゃん。」
拓海　「酒造りはできないけど、酒米作りやブドウ作りの手伝いはできる。そしてこの時期に出来た新酒を味わう。酒蔵巡りをしよう。そして、地元で獲れた食材を使って酒の肴を作ろう。酒をテーマに一杯いろんな物語が出来る。冬は、冷たい潮風が吹くゆえ、そして寒いがゆえ、この地で出来る食があるんですね。明日覚えてるかなあ。」
落合　「ほらまっしゃい（ほらみろ）。録音してあーわな。」
みんな、地酒を飲みながら、お酒と、酒の肴の話題で盛り上がった。
支所長　「だいたいこっちの辺は、神有月って言って、百八十（ももやそ）神集いて、昔から酒宴が盛んだっただけんのお。（だったからねえ）」
真　「なら、わしらの先祖さんは、神さんっつうことですか。」
落合　「まっ、そぎゃンとこかもっせんのお。（そんなところだろうかなあ）」
話が尽きず、夜は更けていった。

五つのワーキンググループの検討作業も進行していった。
和も、里美も、七海もこの冷たい風が吹き荒れる冬、暖かい地域に支えられながら、それぞれ成長した。和は、舞より5センチ低かった身長も、むしろ少しばかり高くなったように見える。
二月十四日、和は授業が終わり、いつものように舞と校庭でキャッチボールをしたあと、舞から丸い箱に入ったボールの形をした手作りのチョコレートをもらった。
舞　「うちの、魂のボールを受け取ってえ。」
うれしそうに、そして少しほおを赤らめた舞は、小走りに走って逃げた。
和には、とてもいとおしく思えた。
和が、舞からの贈り物のお返しをする前の日、キャッチボールをしたあと、いつものようにボールを軽く投げながら少しずつ近づき、グラブからグラブへと腕を回転しながらトスして渡し、クールダウンした。
その時、舞から「お願いがある。」と願いを打ち明けられた。
舞　「うち、いつも声をあげ元気なようにしてるけど、ホントはいつも不安で、不安で、心が折れそうになるんょ。それで、、、。」
和　「それで？」
舞　「和のグローブのウェブ（親指と人差し指の間にある網）を、おまもりにしたい

から、うちのと交換して欲しいんょ。」
「いいよ。これでよかったら。」
和は、舞のグローブを受け取り、家に帰ってから数時間かけてやっとの思いで、ウェブを取り外し、それぞれのグローブに取り付け終えた。
その間、里美から「なにをしているの。」という問いかけがあったが、和は知らん顔をしていた。もちろん、里美もウェブを交換していることくらいはお見通しだったが、、、。
そして翌日、和は舞にクッキーを挟んだグローブを手渡した。二人とも、お互いに少し色は違っていたが、二人して歓喜しウェブをおでこにあてた。

集落の前で、天日と潮風の中で板海苔を干す風景も、すっかり春の日差しが増すにつれ、板わかめを干す風景に変わってくる。
そして、フキノトウが芽吹き、春が来た。
和も七海も、最高学年を迎えた。
春休み中も、和は野球に明け暮れた。
土日は、スポーツ少年団活動で、その他の日は、舞とキャッチボールをし、雨の日は天井に向かってプラスティック球を投げた。
四月になると、毎週、毎週、公式戦が続き、ゴールデンウィークには全国大会に通じる島根県大会出雲市予選の準々決勝、準決勝、決勝が行われる予定である。

拓海ら社員も、二年後のゴールデンウィークにオープン出来るよう、正念場の気持ちを持って、夜遅くまで、そして土日を返上し働いている。
五つのワーキンググループの検討作業もほぼ終了し、全体会を開きながら、まとめに入ってきている。

そんなある日

真　「拓海さん。それにしてもこんな企画が実現したら、ホントすごいですよ。この地域に生まれて良かったあ。ホントそう思います。拓海さん、そろそろダイビング教えてください。是非今度休みが取れたら、行きましょうよ。」

拓海は、大学時代にライセンスを取得し、以降ランクアップをしながら、今ではアマチュア最高峰といわれるマスタースクーバダイバーと言われるライセンスを取得している。
真も、ライセンスの階級を上げていこうと意欲的であり、拓海、斎藤に出会ってからずっとダイビングに誘っていたが、拓海らは、なかなか日程が合わなく、この一年間行くことが出来なかった。

拓海　「おれもこの一年行けてないから、ゴールデンウィークあたり、今の仕事が一段落したら行きたいんだよね。」

真　「是非お願いしますよ。」

四月、拓海は、二年後のオープンに間に合うよう、そして、ゴールデンウィークに家族と過ごせるよう、がむしゃらに働いた。
自分でも疲れがたまっていることに気付きながら、、、、。
そしてなんとか、予定していた手続きの申請も終え、五つのワーキンググループのまとめも終えることが出来、全体会で報告をし、割れんばかりの拍手喝さいで会を終了した。
また、建設中であった五階建ての社員寮も完成し、備え付けの家具などの什器の納入で慌ただしい日が続いた。
ようやく、おおむねの仕事が一段落し、ゴールデンウィークを迎える。
拓海は、船本課長と斎藤と原に、明日からゴールデンウィーク一杯長期休暇を取るよう指示し、船本は本日最終便で帰省し、斎藤は五月三日に帰省、原は友人と東京へ観光することを知った。
そんなある日。
拓海　「それでは、みんな、ご苦労さんでした。まだ明日、午前中に什器の搬入が一部あるが、量もそう多くないから、私が納品の検収をします。みんな、ゆっくり休んでください。六月一日には技術職員もやってくるし、土地の売買契約もそれくらいになるから、また、忙しくなる。次会うときは、リフレッシュして元気で会おう。」
斎藤　「僕もまだいますから、明日出れますよ。」
拓海　「いや、息子のスポ少も午後だし、僕一人で大丈夫だよ。大地、休んでくれ。あ

りがとうな。」
そう拓海が言い、みんなゴールデンウィークの休暇に入った。
その夜拓海は、かねてから誘われていた落合課長と山根支所長と栄一との四人の中間慰労として、【万作】に行った。
拓海は仕事も一段落し、幼馴染の友との昔話に花が咲き、気を許して久しぶりに酔いしれた。そして、疲れもピークにあったのか、二時間たったころには、あくびも我慢することが出来ず、ついには、コクリッコクリッとうたた寝をするさまを見せてしまった。
横の席には、落合課長の同僚三人が飲んでおり、酒の行儀に厳しい落合課長に向け、一人の者がこう言った。
同僚　「落合さんたるものが、そんな姿を許すんすかっ。」
落合　「わわ（貴様は）、黙っちょれ。こなの（こいつの）苦労が分からんもな（者は）えらん（いらない）事言うなや。」
同僚は、「すんません。」と言うとすぐ帰って行った。
口数の少ないマスターが、「タクシー呼びましょうか。」と口を開いた。
落合　「栄一、拓海を連れて帰ってやってごせ。（あげてくれ）」
栄一は拓海を起こし、自分の右肩に拓海の腕をからませ、拓海を持ち上げ連れて帰ろうと出口の戸をあけたとき、　拓海は真っ赤に照った満面の笑みを浮かべ、「皆さん、ありがとうございました。」と敬礼した。

翌朝の四月二十九日、土曜。拓海は定時に出社し納品を検収した。
和は島根県大会出雲市予選も順当に勝ち上がり、いよいよ四試合目で午後三時から準々決勝が行われる。準々決勝で勝ち上がると、翌日に準決勝と決勝が行われる。
準々決勝の相手は、優勝候補筆頭で剛腕投手率いる出雲東スポーツ少年団だ。
前評判通りの投手戦が繰り広げられ、先攻の西部野球スポーツ少年団も得点圏にランナーを出すも、あと一本のヒットが出ず、七回表の攻撃が終わった。
和はこの日抜群の投球内容であった。
和は、イニング間の投球練習での投球フォームチェックの仕方を決めていた。
プレートから、６フット（足）出し、少し土を掘ってからそこへ左足を置きなおし、リリースポイントを講習会で習ったように、目線の先にボールを置きチェックするという、一連の動作をしてから練習球を投げるようにしていた。
そして、練習球を投げ終わり、キャッチャーからの送球を捕球しバッターを背にしたとき、毎回グローブに願い事をするかのように唱えてからプレートに立っていた。
この日の投球内容は、六イニングを終え、被安打一、無四球という抜群の内容であった。
七回の裏試合は、ワンアウト後セカンドゴロを二塁手がファーストへ悪送球し、ワンアウトランナー一塁となり、盗塁後の送りバンドが成功し、ツーアウトランナー三塁となった。
舞の掛け声で内野手がマウンドに集まり、みんな気合を入れた。
和も、いつものようにもう一度、何らかの言葉を唱え気合を入れなおした。

しかし、ツーストライクからの三球目、サード正面への強めのゴロを三塁手が後逸し、サヨナラ負けとなった。
球審が集合を呼び掛け試合終了を促すものの、三塁手もその場で泣き崩れ、和もしゃがんでマウンドから降りられなかった。グローブを抱きしめたまま。
願いはかなわず、敗退した。
里美　「和。泣くなあ。」
いつも通り、甲高い声で、応援席の皆を笑わせた。
応援に来ていた啓介も正子も皆、いい試合を拍手でたたえた。
みんな片付けも終わり、野球場を後にし、それぞれ家路についた。
和は家に着くと里美から啓介と正子も応援に来てくれたことを聞き、啓介の家に向かった。
里美は啓介に和が向かっていることを電話しておいたが、「一時間たっても和が来ない。」と啓介から連絡があった。
拓海は、少し心配になり啓介の家に向かうと、和はやはり石積み防波堤にいて、しょげていた。
拓海　「やっぱりここだったかあ。みんな心配するだろ。」
和は下を向き、もう一度泣きだした。
和　「勝ちたかった。正面だったし、捕ってほしかった。」
拓海　「泣くな、悔しいだろうが。サードの子をせめちゃいけないぞ。強い球を打たれたんだ。打った子もうまかったし、和が凡打で抑えられれば良かった。」

拓海は、和の顔を見るとこう諭した。
拓海　「良く投げた。だけどな、それも終わったことだ。次頑張ろう。」
拓海は、そう言いながら、右手で和の背中をさすり、一緒に啓介のもとへ向かった。
真っ赤な真丸お月さんが、二人を照らした。
拓海　「明日は、満月だ。」

翌日、拓海は和の試合敗戦後に、真からダイビングに誘われ、斎藤とともに釜浦の健おっつぁんに船頭を依頼し、【観音グリ】というスポットへ行くことになった。
【観音グリ】は、釜浦の漁港から約五百メートル北北西に位置し、五十メートルの海底から水深六メートルくらいまでに聳え立ち、観音様のような形をしている岩であることから【観音グリ】と、古くから地元の漁師に名付けられている。
そういう地形であることからプランクトンが多くわき、それを目当てに様々な魚類が集まる釣りのスポットでもある。
そしてこの日は、晴天ではあるが潮の流れが少しあり、干満さの大きい満月の日であった。
午後、一時からのダイビングに備え、午前中は三人で十六島営業所の会議室で準備をし、真が一足早く釜浦へ向かった後、拓海は車で斎藤と向かった。
斎藤　「いやあ、久しぶりですねえ。天気もいいし、最高ですね。それにしても、先輩、ずっと忙しかったんですが、大丈夫だすか？」
拓海　「大丈夫さ大地。真はまだ初級者だから、ケア頼むぞ。」
斎藤　「はい、わかってます。任せてください。」
三人は、道具を健おっつぁんの船に積み込み、船は漁港を出た。
一〇分もしないうちにダイビングスポットに到着し、三人は再度残圧をチェックし、健おっつぁんに約三十分であがることを告げ、一人ずつ船から潜水した。
海はとてもキラキラと美しく、イワシの群れや、ブリなどが遊泳しており、三人はその美しさにとても魅了されていた。

そのころ、家で一人になった和は、舞たち友達も今日は忙しかったため、啓介の家に遊びに来て、和たちが【観音グリ】へダイビングに行ったことを話し、天井に向かってプラスチック球を投げ始めていた。

啓介はその話を和から聞いた時、経験上【観音グリ】は、下に持っていくような潮に急に変わり、ましてや干満差の大きい日であることから、いやな予感がした。そのため、すぐさま健おっつぁんへ電話をし、気をつけるよう促した。

かれこれ、十五分くらい【観音グリ】の上層をドリフトダイビング（流れに身を任す）していたころであろうか、真を挟んで斎藤が先頭となり、後ろに拓海という順で、【観音グリ】を岩に沿って約一〇メートルくらいまで潜水していった。

真はまだ初級者であることから、十二メートルしか潜水できなく、斎藤はそこでいったん立ち止まり、三人はその水深で岩に沿って左回りに半周旋回し、二メートル潜水したときである。

突然、ダウンカレント（海底に向かって沈み込むような潮の強い流れ）が発生した。

拓海と斎藤は、こういう場合の対処として、とにかく岩にしがみつくことを知っており、すぐさま、両手で岩にしがみついた。真は、一瞬対処に遅れ、三メートルくらい深い場所へ沈み込み、必死で岩にしがみついた。

拓海と斎藤が残圧を見たとき、既に三十分くらいが経過していた。

残り五分しかない。

ダウンカレントも弱りそうになく、三人とも両手を岩から手を離すことが出来ず、装着しているウェイトをはずすことすらできない。そして、三メートル下にいる真は、引きずり込まれる潮の力に耐えきれない状態となっている。

拓海と斎藤は、アイコンタクトをし、少しずつ真の方へ下がっていった。

拓海の体力も疲労もあってか、限界に近付いてきた。

残圧もなくなった。

拓海は、もう一度斎藤の目を見つめ一度だけ顔を小さく縦に振った。

斎藤は、拓海が何を考えているかすぐさま気付き、顔を横に振った、、。

しかし、拓海は岩から手を離し、自ら真の方へ潜水し、拓海の頭の位置で真の背中側のウェイトを両手で握りしめ、自分の腰の位置まで真のウェイトを思いっきり押し寄せ、斎藤の位置まで放り投げた。

真をつかんだ斎藤は、必死になって岩をけり上げ、真を海面の方へ押し上げた。

真と斎藤の二人は、ようやくダウンカレントから逃れることが出来た。

しかし拓海は、、、。

真を上へ放り投げる反動で、ダウンカレントに飲みこまれてしまった。

海面に上がった真は、パニック状態となり、斎藤はすぐさま健おっっぁんに助けを求め、その後、海中を覗きこんでも、拓海の姿はどこにも見当たらなくなってしまった。

そして、「助けてくれ、助けてくれ、拓海さんを助けてくれ。」と叫ぶ斎藤の異変に、健おっっぁンは気付き、すぐさま啓介に大声で電話をし救助を求めた。
啓介は、山根支所長に事態を連絡し、山根支所長から緊急出動の連絡を受けた漁師たちは総出で船を出し捜索に当たり、一時間後、第八管区海上保安本部（境海上保安部）から巡視船艇も来て、海上保安部所属のダイバーが救助に当たった。

三十分後、拓海はダイバーによって水中で発見された。

啓介は、正子とともに仏壇の前で四つん這いになり、畳に頭をこすりつけ拝んでいたところ、声を詰まらせて話しかけてきた山根支所長から、拓海の訃報を受けた。
動顛していつもよりまして耳鳴りが激しい啓介は、うまく聞き取ることが出来ず、正子が啓介に代わって話を聞いた。
啓介は、正子から話をようやく聞き取ることができ、「おー。おー。」と隣の部屋に和がいることを忘れ、集落じゅうに聞こえるくらい慟哭した。
正子は、すぐさま里美に連絡をし、里美と七海、啓介と正子と和は、拓海が運ばれた市立病院へ向かい、その後、医師による拓海の死亡確認を受けることとなった。
その時初めて、何が起こったか理解でき、和と里美と七海は泣きわめいた。

あまりにあっけない拓海の死であった。

真と斎藤は、センターの前の岸壁に横付けしている健おっっぁんの船で、ずっと震えている。
栄一がやってきて、健おっっぁんから話を聞くと、栄一は船に飛び乗り、「おまえ、なんてことしてごすかや。(なんてことするのか)」と抵抗もしない真の上に乗り、おもいっきり、真を何発もぶんなぐった。すぐさま山根支所長、落合課長らによって栄一は抑えられた。
真も慟哭がやまない。
斎藤も、震えが止まらなかった。
しかし、次の瞬間、ぽつりとこう話した。
斎藤　「止めたのに、、。拓海さん、真君を助けたかったんです。」
真も、そのことに気付いていた。「ごめんなさい。ごめんなさい。」と下を向き再び叫んだ。
里美は喪主として、啓介の意向から先祖をまつる啓介の家の仏間で通夜を迎え、翌日拓海の遺体を乗せた霊きゅう車は火葬場に向かう時、運転手の計らいで開発地により近いセンターの前の海に面した岸壁を通った。
岸壁に泊めてあった定置網の船からは、まるで別れを惜しむかのように漁労長が汽笛を鳴らし、後を追うように、そこら中の漁船が連呼した。
それはあたかも漁船が泣く声のように、あたりに響いた。
葬儀は、営業所の大会議室で社葬により執り行われた。
拓殖建設や市役所の関係者、漁協役職員、来賓に加え、十六島じゅうの人々が喪服を着て集まり、中に入れず長蛇の列をなし、いたるところでむせび泣く声が聞こえてくる。

里美は、最後まで、喪主を務めあげた。通夜に葬儀と慌ただしく、悲しむ余裕もなかった。七海も、そんな里美に寄り添いながら、忙しく世話をした。
ただ、和はまだ幼いこともあり、泣きじゃくっていた。
初七日もなんとか無事に終え、翌日、里美のもとへ真と斎藤が来た。
斎藤　「奥さん。本当にどうお詫びをしてよいか、、、、、。」
真　「僕の身代わりに、拓海さん、、。」
里美　「うちの主人は、斎藤さんと、真君の話をよく話していました。特に真君のことは、この地域になくてはならない、すごい青年だと、、、。」
真　「ごめんなさい。ごめんなさい。」
真は、悲しみのあまり泣きわめいた。
里美　「今はまだ、私自身の心が整理できなくて、うまく言えないけど。これ以上自分を責めないでください。主人が、想って、したことなんですから。」
真と斎藤は、ぼろぼろと涙を流し、嗚咽が止まらなかった。
二人が帰り、七海と和のいる隣の和室へ里美は向かった。
和と七海は隣の会話が聞こえ、和は、また泣きじゃくった。そこへ里美が入って来ると、里美は立った姿勢から、全身の力が抜けるがごとく崩れ落ち、跪き、泣き崩れた。
ポツリポツリと畳に落ちる大粒の涙。「助けて。」と小声で訴えた。和には、そう聞こえた。

いつも気丈な母。いつも泣いてる自分を奮い立たせてくれる母。いつも明るく応援してくれる母。自分がまた、泣きじゃくっている姿を見て、「泣くなあ。」と叱られるものだと思っていた和は、そんな母の姿を見てつくづく思った。

強くなる。

和は、誓った。

その後、里美と七海と和で、これからどうするか話し合った。
『前を向いて生きよう。』それが父　拓海の願いである。そう確認しあいながら。
そして、里美はここ十六島にいるとみんなに甘えすぎること、渡部部長から拓殖建設の事務へ帰らないかと勧められたことから、和と七海に「東京へ帰ろう。」と誘った。
答えを導くまで幾分少し時間はかかったが、二人とも異論はなかった。むしろ、二人は何故か逃げ出したい気持になっていた。
拓殖建設は、本社でこのプロジェクトの進行について社長を含め議論し、まだ土地の売買契約にも至っていないことから、無期延期の方針を下し、営業所は閉鎖を決定し、関係機関にその旨通知し了承を受けた。
ただ、営業所と社員寮の跡地利用については、今後検討を図ることとなった。
次の土曜日の午後、三人で手伝いながら励んだ所長寮の荷物の送り出しが終わり、里美は自治協会の方や婦人会の方々、漁協に挨拶に行った。
七海は、友達との最後のお別れに部活動の顧問や仲間に会いに出かけた。
和は、一足早く啓介の家に向かったが、途中石積み防波堤により、海を見つめた。
遊ぶ場所だった海。
そして、父の命を奪い取った海。
幼いながら複雑だった。

泣き虫だった和は、咽びながらもこみ上げる涙を必死でこらえていた。
家で里美から連絡を受け、和を待っていた啓介は正子に尋ねた。
啓介　「正子、和はどこだらか。(どこだろうか)」
正子　「さっき防波堤のところにいるの見かけたよ。」
和を心配した啓介は、小走りに防波堤へと向かい、真っ赤に染まる海を見つめ、背中を小刻みに揺らしている和に声をかけた。
啓介　「和。泣いているんか。」
震えながら大きく息を吸い、和は啓介にこう答えたのだ。
和　「いんや。僕は泣かない。強くなるんだ。お母ちゃんとお姉ちゃんを悲しませんけん。」
その日の十六島の水面は、鏡のように、真っ赤に輝く夕日を映していた。
和は、それ以来つらいことがあっても歯を食いしばり、人前で涙を流すことはなかった。
ただ、表情が顔に出なくなり、心の底から笑うことなく、せいぜい作り笑いをするくらいになってしまった。
もちろん弱音など言うはずもない。
その日は、和と、里美、七海は最後のお別れの夜を啓介の家で過ごさせてもらった。
里美　「本当にお世話になりました。それから東京に帰るなんて、わがままかもしれませんが、お許しください。」

啓介　「こっちにおって欲しかったが、おらだてておまえやつ（俺だって君たちを）、食わしちゃーことくらいなーだが（生活させることぐらいなるんだが）、里美さんや、七海、和が一番いーことさないけん。（しなくちゃならない）元気でおれよ。」

里美　「すみません。」

啓介は、天井を向いて泣いた。

やがて、明子と景子に栄一が顔を見せた。

重たい空気を察してか、栄一は和にこう話した。

栄一　「和。お前、向こうに行っても野球は続けろよ。お前なら、頑張ればプロにいける。そうだ、甲子園に行ったら、俺が今ここにいるみんなを和の応援に連れていくよ。こっからだと、五時間ありゃいけるし、日帰りできるからな。」

景子は栄一に「はあ？」と疑問符を投げかけた。

景子　「あんたもコメ男やねえ。甲子園の前に秋に関東地区優勝したら、神宮だで。たまにゃ東京に泊まらせてみろや。」

皆、「くすっ」とうすら笑いをして、少しなごんだ。

和を除いては、、、。

翌日、東京に帰る出雲発やくもに乗るため、和と里美、七海の三人は、朝、啓介の家を出発した。里美は、拓海のお骨を抱えて、、、。

啓介と正子、栄一と景子に見送られ、集落の前のバス停を後にした。

すがすがしい春風が吹く中、バスのクラクション音がなびく。

バスは、石積み防波堤を背にし、船揚げ場を横切り、最初の停留所の漁協前で止まり、人が乗車しないことを確認してすぐさま発車した。
和の目には、毎日のように授業の終わりに舞とキャッチボールをしていた校庭が見えた。
すると、、、。
舞が、バスに向かって、父　落合課長と並んで立って手を振り、見送ってくれた。
ただ、ちょうど二人の前にバスがゆっくりと通りすがったとき、舞が、父の胸元めがけて泣き崩れる姿が見えた。
「やだー。」とぼろぼろに泣き崩れる舞の姿を見た里美は、運転手に「少しだけ、ほんの少しでいいんです。止まってください。」と懇願し、バスは止まった。
和は、舞に向かって、足の上に乗せていたプラスチック球を包み込むグローブを胸に当て、舞の目を見て三度首を縦に振ると、何かしら舞にも伝わった。
そして、バスは、軽快なクラクション音を一度だけ鳴らし、出発した。

東京に帰り、和と七海は公立の小・中学校に転校した。
和は、近くのスポーツ少年団に入団し野球を続け、七海も吹奏楽部に入り、三年生最後の演奏会に間に合うよう日夜練習に励んだ。
里美も、拓殖建設に正職員として再度勤務し、一生懸命に日々を過ごした。
三人とも一学期が終わるころには、昔の生活を取り戻すことが出来るようになった。
そして、里美は少し気持ちにゆとりができ、ずっと悩んでいた拓海のお骨を、市内の納骨堂へ一時的に安置した。
夏休みが過ぎ、二学期に入ると七海は受験勉強に精を出し、かつて在籍した有名私立大学の付属校である京王高校を受験するよう担任からもすすめられるほど、成績も右肩上がりに伸びてきた。
和は、私立中学から誘いもあったが、七海と二人私立校へ進学すれば母への負担も大きくなることや、硬式野球クラブからの誘いもあることから、公立中学への進学を希望した。
二学期も終わり、三学期になり、そして、七海は京王高校に合格した。

二〇〇七年春
新たな学校でのスタートとなり、和は、近くの公立の中学校へ入学し、市内の硬式野球クラブへ通うようになり、七海は京王高校に入学し吹奏楽部に入部した。
和は、中学校では陸上部に入部した。

硬式野球クラブは、夏休みなどの長期休暇期間を除いては、土、日曜日、祝日だけに活動が限定される。そのため、クラブ員は、部活動に入部しないか、若しくは個人競技種目を選択する。それは、土、日曜日など部活動の試合があるときにでも、硬式野球クラブに行くことで、部活動のメンバーに迷惑をかけてしまうためである。

和は、その理由と、少しでも野球のためになることを考え、陸上部に入部した。

陸上部に入部しても、ただ単に長距離で自分を追い込んだり、約三十メートルのダッシュをするだけで、タイムを計ろうともしない。そして、部内でも結構速い方になっても、リレー選手を辞退する。他の部員からすれば、到底理解できない行動に見えた。

しかし、硬式野球クラブでは、二年生になると投手で四番を任されるほどの選手となった。

そして、三年生になる直前の春休みには、様々な私立高校から監督のもとへオファーがあり、里美へも監督から連絡がしばしばあった。

七海は、京王高校でも成績はトップクラスであり、一学期の終わりの三者面談では、担任から、「成績優秀者であり、京王大学への推薦入学ｏｋです。」とお墨付きを頂いた。

夏休みに入り、七海は部活動も終わり部屋で受験勉強に励んでいた日のことである。和は野球の練習に出掛け、里美と二人であった。

「ピンポーン」とチャイムを鳴らす音が聞こえ、里美は二人の客人を家に迎え入れた。

七海は耳を澄ますと、何やら男性が各部屋やキッチンに浴室、そしてトイレを見て回る様子がうかがえた。七海は、少しドアを開け、更に聞き入った。

そして、その男性が帰るときに、「それでは、後日見積書を作成し、お持ちし相談させていただきたいと思います。」と里美に告げ、「バタンッ」とドアを閉じる音が聞こえた。

七海は里美に問いかけた。

七海　「母さん、どういうこと？この家売っちゃうの？」

里美　「この家も少し広いし、二人には悔いが残らないように、行きたいところに進学させてあげたいの。和には言わないでね。」

七海　「私は、ここで暮らしたい。まだ、父さんとの生活、忘れたくない。」

里美　「ありがとうね。あなた、京王大学に行って、勉強して教員になりたいって言ってたでしょ。私の夢でもあるのよ。和にも、せっかくいいオファーがあってるもの。行かせない手はないのよ。今年度いっぱいでここを出ましょう。」

七海は、母が笑顔で諭してくれる姿を見て、涙が止まらなかった。

里美は、七海の両手を両手で温かく包んだ。

次の日、七海は職員室へ行き、担任へ高校卒業程度の職員募集がある八王子市職員採用試験を受けたいと伝えた。

担任は、様々な意見や質問を七海にぶつけたが、かたくなに意見を変えようとしない七海の姿を見て、受験の手続きや公務員試験の内容などについて、その日から七海にアドバイスをするようになってくれた。

勉強のかいがあって、一次試験の合格通知と二次試験の案内が七海のもとに届いた。

それからというもの七海は、大学受験の勉強はせず、学校の授業が終わってからは、担任や進路指導の先生に面接の練習をしてもらったり、現代文の先生に小論文を見てもらったりと、公務員試験に手を抜くことはなかった。

そして、和が、野球の古豪で西東京でベスト８常連の、名将　長谷川監督率いる【修実高校】に推薦入学の話がまとまった十一月の初め、七海のもとへ八王子市役所の合格の通知が届いた。

七海は、満足そうに事情を里美に話した。

七海　「母さん、私、就職先決まったの。就職するの。八王子市役所受かったの。」

里美　「何で？大学に行くんです。七海。まだ、間に合うでしょ。」

七海　「教員志望じゃなくなったし、大学出ても市役所なかなか受かんないわ。せっかく受かったんだからその方がいいでしょ。だから、この家でいさせて。」

そんな話をしている時、和が学校から帰ってきた。

和には、七海が自分の進路に悩み、変更をしていることなどまったくわからなかった。

七海が部屋にこもって勉強しているのは、大学受験の勉強だと信じてやまなかった。

和　「姉さん何で？教員なりたいって言ってたでしょ。出来れば、中学理科の先生になりたいって言ってたじゃない。何で就職なの。やめてよ。僕のためならやめてよ。姉さんや、母さんが犠牲になるなら、僕は野球なんてしない。ぼくこそ、勉強できないんだから、高校出たらすぐどっかに就職するから。」

七海　「今まで母さん、たくさん私たちのために考えてくれたの。それで、本当に十分なの。和が野球選手で活躍してくれること、私の願いでもあるのよ。和が父さ

んと楽しそうに野球の話をしていたこと。和がよくマウンドで泣いて母さんに叱られて、父さんが隣でほほ笑んでたこと。そう言う父さんの優しい面影を見続けたいの。私、和の野球の試合に行き続けて、父さんの面影に会いたいの。まだ、ごめんね母さん。和。私まだ父さん忘れられない、、、。もう少し甘えたかった。」

正座をしていた七海は、下を向き泣いた。畳に、「ポツリ、ポツリ」と大粒の涙がこぼれる音がした。

和　「僕が、授業料が少ない公立高校に行っても、姉さんの進路は変わらないの？市役所なんて、、、。まだ就職しなくていい方法はないの？」

七海　「ありがとう。けどね和。言っても八王子市役所よ。なかなか入れないわよ。」

和　「ほんとに教員って夢はいいの？」

七海　「今は、その夢なくなった。ほんとよ。でももし、またなりたくなったら、そんとき考えるわ。通信教育受けて資格取る手もあるんだし。あなたこそ、野球辞めるなんて言うな。続けるのよ、必ず。そして大学野球もするの。こっちの大きなリーグで活躍するの。その先は、わかんないけどね。」

七海は、そう言い立ちあがり、和との会話中ずっとスカートのすそを握りしめ、小刻みに震えていた里美の左腕を手繰り寄せ、立ちあがらせた。

和は、真一文字に口を結び、立ちすくんでいた。

少ししてから、七海は口を開いた。

七海　「さて今日は、お祝いの会をしましょう。料理は、和、手伝うのよ。私が作るから。そして母さん、今日は少しビールを飲んでください。そして、私をねぎらってください。いや、母さん自分をほめてください。」

里美は、七海が言うように近くのコンビニで缶ゴールを一本買って帰り、食事の時、小さなグラス二つに注ぎ、仏壇の前にそっと一つを置き、乾杯と同時にたしなもうとした。

しかし、涙があふれ出し、手が震え、グラスが揺れなかなか飲めなく、左手でグラスを持つ右手を抑えても震えが止まらず、鼻息でグラスは曇り、いったんグラスをテーブルに置いた。

里美　「ありがとう。」

そう言った後、目をつぶりながら深呼吸を二度繰り返し、ビールを少し口にした後、里美は微笑み、七海とそして仏壇の拓海に「おめでとう。」とグラスを一度ずつ軽く持ち上げた。

和は、終始涙をこらえていた。「ふうー、ふうー」と時折、目を閉じては息を噴き出しながら。

和は、三年生が中学総体を終え、部活動を引退した後も、自分一人で陸上部の練習に混ざり、自らのトレーニングにいそしんだ。

ランニング、そして筋トレーニングに体幹トレーニングにと。

高校に入る前に、和は一回りもふたまわりも大きく強くなった。身体も、心も。

そしてまた、錦織家に新しい春がやってきた。
七海の新社会人。
和の高校入学。
二人とも、希望を胸に新たな門出の日。それぞれの進路先へ歩き出した。
桜の花びらが舞う春風に、そっと背中を押されて、、。
和は高校に入学すると、すぐに野球部の練習が始まった。
中学時代に体験入部で何度か練習に参加はしていたが、いざ正式に入部すると、思っていた以上に厳しい練習であった。その上、入部者は県外生を含めて名だたる精鋭が三十人もいた。投手は、そのうち十人である。和のような右の本格派投手は三人しかいなく、左が五人とサイドスローが二人である。二年、三年生もだいたいそれぐらいの人数構成である。
全体で三十人の投手。そこからベンチ入りできる投手は、多くて五人である。
練習は、投手組は六班に分けられ、捕手、内野手、外野手の野手組は全体で六十人を三班に分けられる。投手組の上位二班と野手組の一班目をＡチームと、投手組の次の二班と、野手組の二班目をＢチームと呼び、それぞれ練習試合はその構成で行い、残された投手組の二班と野手組のもう一つの班は、練習試合すらなく、遠征にもいかず、通称【いのこり組】と呼ぶ。
公式戦や練習試合の様子を長谷川監督が判断し、入れ替えをする。
ただ、投手における監督の評価として、Ａチーム、Ｂチームそれぞれ先発投手として期待をかけている選手を二人ずつ置いている。
和は、入部すると一年生では、数人しか入れないＢチームからスタートすることとなった。

和は五月の練習試合で初めて中継ぎで登板し、そして結果を残し、六月には二試合目の先発を任されるようになった。

数日後、和は監督からバックネット裏に建てられている監督室に呼ばれた。

監督　「錦織。Ａチームだ。先発はないし、選手権（甲子園予選の西東京大会）で投げることはないが、練習試合に同行させ、経験を積むため、Ａチームに入れる。」

和　「ありがとうございます。」

監督　「先輩たちの公式戦や遠征での態度。体のケアの仕方。チームの雰囲気。全て学べ。」

和　「はい。」

それから和はＡチームに同行し、先輩の威厳と努力、チームへの献身的な行動など色々間近で見て学び、そしてエース投手の品格を教わった。

選手権は終わった。結果は、ベスト８であり、和はベンチには入れなかった。

泣き崩れるエース投手。肩を抱きかかえるキャプテン。

テレビでよく見る風景も、身近な先輩の姿をみると、胸が熱くなった。

みんなで、球場に隣接する広場に集まり、キャプテンから後輩へバトンタッチの言葉が送られ、長谷川監督は先輩たちをたたえ、三年生の高校野球の幕は下りた。

新チームとなり、和はＡチームに属した。

夏休みには多くの練習試合が組まれ、関西、東北、北陸へと遠征を重ねて、その分金銭的な負担を家族に強いた。

和　「母さん、ごめん。」
里美　「何言ってるの。行かせてもらえるってことは名誉なことでしょ。」
和　「けど、毎回毎回五万円って、今月三回目で、ホントに大丈夫なの？」
そばで聞いていた七海が話に加わってきた。
七海　「大丈夫だよ。記録してあるし、あなたの将来プロ入りの契約金もらうし。せいぜい頑張ってや。」
そう、七海は和の左肩をポンッと叩きながら言った。
和　「はい、頑張ります。」
和は、遠征で結果を残し、二試合目の先発を任されるようになっていた。
関西遠征、東北遠征、北陸遠征。和は、球のキレ、コントロールとも冴えていた。
小学校からのルーティンとして投球前に行っているしぐさは、今でも続けている。
プレートから、６フット（足）出し、少し土を掘ってからそこへ左足を置きなおし、講習会で習ったように、目線の先にボールを置き、リリースポイントを確認する。
そして、練習球を投げ終わり、キャッチャーからの送球を捕球しバッターを背にしたとき、毎回ウェブに願い事をするかのように唱えてからプレートに立つ。
少しも変わらず、中学、高校と続けている。
秋季大会には、和は背番号　１０　をつけ、一回戦に先発し、被安打五、無四球、無失点で初の公式戦にデビューした。

しかし、チームはプロ注目選手で、右打者としては高校ナンバーワンスラッガーの神田率いる関東西高校に、準々決勝で惜敗した。最終回、神田のサヨナラツーランホームランで。

秋は冬となり、和にとって初めての冬季練習が始まった。

中学の硬式野球クラブでは、土、日、祝日と長期休暇期間しか練習がないせいか、冬季においても基本練習ではあるが、キャッチボールやバッティング練習は行われる。つまり、ランニングやトレーニングだけを一日中行うという体験は、高校で初めてである。

しかし和は、中学時代に陸上部で自分を追い込んでいたため、上級生についていくことはできた。

苦しい顔も見せず、ひたむきに。

反面、いかなる時でも、腹の底から笑うこともなかった。

長い長い冬季練習が終わり、和の体つきはまた一回り大きくなった。

身長一八三センチ、体重八〇キロである。

そよ風すがすがしい春も終わり、夏となり、選手権が始まった。

和は、背番号　１０　をつけ、エースと交互に先発し、準々決勝でも先発し、修実高校を五年ぶりのベスト４に導いた。

準決勝は、あの関東西高校である。
５回終わって、０対０と、両チームともエースが投げ合い善戦していた。
ただ、神田の打球は、一人ずば抜けていた。
６回終わっても、両チーム得点圏にランナーを進めるものの、あと一本がでず、得点には至らなかった。
そして７回。関東西高校の攻撃。
先頭の３番バッターがレフト前ヒットで出ると、打者は神田である。
関東西高校の監督も、名将として名をはせる人物であり、神田が立つこういう場面では、盗塁や送りバントなど小細工は使わず、一球すら神田にとって無駄にすることなく勝負させる。
初球、神田の内角低めへ一四〇キロのストレートであった。
ベンチから見ても、それはいい球に見えた。
しかし、打球はライナーで左翼ポール際に飛び込んだ。放物線すら描くことなく。
和　「これが神田か。」
はじめて、和は度肝を抜かれた気持になった。
９回も神田に打順が回り、次は、バックスクリーンへの特大ホームランとなった。
結局、３対０で修実高校は決勝まで駒を進めることはできず、関東西高校は甲子園に春夏連続出場となった。

新チームとなり、また、遠征が始まった。
和は、背番号　1　を渡され、エースにふさわしい風格すら身に着けていた。
遠征も終盤となり、関西の強豪校と連戦を続けていた。
疲労もピークとなったが、和は、顔に出さず、与えられた試合を全力でこなしていった。
秋季大会の組み合わせ会が行われ、キャプテンが帰って来ると、順調に勝ち上がれば、準決勝で関東西高校と当たることが発表された。
和は、監督室に呼ばれた。
監督　「どこか痛いか。球速も上がってこない。」
和　「いえ、大丈夫です。」
監督　「無理をするな。俺は、高校で終わる選手をここに入れてるんじゃない。大学やその先を目指す選手を作り上げているつもりだ。だから、痛い時、違和感があるときには休ませる。」
監督はそう言い、和の右の手のひらを握り、まっすぐ右腕をのばさせ、肘のところへいきなり右手親指を当てると、「痛いっ」と和はたまらず声を出した。
監督　「準決勝で状態次第で投げさせるかもしれない。一週間ノースローだ。それから少しずつ投げていく。間に合わなかったら、それはそれで仕方ない。どうせ素直に聞かないだろうから、コーチをつける。必ず従うこと。わかったな。」
和　「はい。」

監督の指示に従い、整形外科にも足を運んだが、骨や筋などには幸いにも影響はなく、オーバーユースのための疲労の蓄積という診断結果であった。
和は初めて、いのこり組に落ちた。
しかし、与えられたメニュー以上にトレーニングやランニングをこなしていった。
いのこり組の同学年のメンバーや後輩投手の杉原は、和のそういう姿を見て刺激になった。
メンバー「あれがエースなんだな。やっぱり考え方が違う。」
杉原　「一緒に練習させてもらっていいですか。」
和　「もちろん。」
一通りのコーチから出されたメニューが終わってからも、和は両翼のポール間を走った。
杉原達もついてくる。
杉原達は、和のスピードにも付いていけず、二往復ずつの五本目が終わったところで、四つん這いに身体は砕け、もう走ることができなかった。和はその後も、もう五本走り、ゆっくりとクールダウンした。
五日たっても、和の練習は増えていくばかりだ。杉原たちは和にこう尋ねた。
杉原　「率直に言って、走りをこんなにして、野球はうまくなるんですか？」
和は、答えなかった。
杉原　「だったら、ピッチングやノック受けた方がうまくなると思うんですが。」
ようやく和は口を開いた。

和　「野球って変わった競技だよな。きつい練習していても、試合になるとピッチャー以外は、半分はベンチにいて、体力勝負じゃないんだ。だけどピッチャーは一人だけ違う。7イニングを過ぎてから、ましてや連投をすれば、息もあがって来る。そういう時体力がないと、強打者との勝負で弱い気持ちになるんだ。」

神妙に聞き入っている杉原たちにこう話し続けた。

和　「僕も、もともと強くない。そして、よく自分に負けそうになるんだ。特に暑い日で、試合の後半、ファールで粘られたりしたとき、弱気になって変化球や外角低めで逃げたりしそうになる。だから、そんなときでも強い気持ちを持てるように、自分を追い込んで。きつい練習したから、こんなとこで逃げるなって自分に言い聞かせている。弱い心を追い払う。自分に負けない。いや、自分に勝てないやつが相手に勝てるわけない。だから、うまくなるかどうかじゃないんだ。」

初めてだった。杉原達後輩にとって、こんなに話をしてくれる和は。

怒ったり、笑ったりもせず、無口なように見えていた。違う次元の人間のようにも思えていた。なぜ、ここまで表情もなく自分を追い詰められるのか。そう、いつも疑問を抱いていた。

杉原　「先輩は強いです。なのにそんなこと考えてるんですか。いい投球をしてそれを自信にしておられるかと、、、。」

和　「そんないい投球はまだできていない。もっと、いい投球ができるようになりたいんだ。神田にインズバ（インコースへ速球）で三振を取りたい。そのために

は、まず、体力をつけて、強く、逃げない心を持たないと、、。いつかお前たちも、そう言う場面が必ず来る。だから負けるな。よし、もういっちょ走ろう。」

杉原　「えっ、まじっすかっ。」

杉原たちは、何となく理解できたが、まだ、そう言う投球場面の経験がなく、全てを理解できていなかった。しかし、後に、和の言うことが十分わかる日が来た。

和の、疲労から来る痛みは、次第にやわらいできた。

秋季大会は始まり、和も少しずつ投球練習を開始し、それまで大会での出番はなかったが、試合形式での練習で、かつての調子を取り戻すようになってきた。

関東西高校との準決勝の前日、和は監督室に呼ばれた。

監督　「良くここまで作ってきた。もう大丈夫か？」

和　「はい。大丈夫です。」

監督　「明日、先発だ。任せたぞ。」

和　「はい。」

和は家に帰ると、里美と七海にそのことを話した。

七海　「よくやった。じゃあ明日は母さんと一緒に見に行く。ちゃんと言い球放れよ。」

和　「うん。」

里美　「頑張りなさいって、頑張ってる子に、ありふれたことしか言えないけど、それしか言葉が見当たらないの。ごめんね。」

和は、そううつむいてしまった母の想いを十分わかっていた。

和　「ありがとう。精一杯頑張る。」
そして、いつものようにグローブを磨いた。少し色の違うウェブのところは念入りに。

準決勝の日
多摩総合運動公園野球場は、バックネット裏と内野席はほぼ満員となった。
里美と七海は、修実高校の一塁側応援席に、父兄そろいのシャツと帽子を着飾って、メガホン片手に他の父兄とともに陣取った。
準々決勝から先の試合は、ラジオの実況中継がある。二人は、小型ラジオを用意して片耳で聞きながら試合を楽しむ余裕さえ身につけていた。
試合は、息をのむ投手戦が繰り広げられ、得点が入らないまま七回裏、関東西高校の攻撃となった。
里美と七海は、修実高校が守備の時は、応援席の鳴り物も禁止であり、都合よく実況に聞き入ることができる。
実況　「さあ、ここまで両投手とも、素晴らしいピッチングです。迎える関東西高校の攻撃ですが、修実高校の錦織君、関東西高校の神田君をここまで、第一打席サードゴロ、第二打席三振と抑えています。素晴らしいピッチングです。」

「関東西高校は、七回裏打順は、一番バッター平山君から始まりますが、この選手は俊足でとてもいいですねえ。おっと、初球三遊間。打ち取った当たりですが、飛んだコースがよく、ショートがファーストに投げるも悠々セーフです。」

ノーアウト一塁。

実況　「二番バッターは、迷わず送りバント。成功しました。ナイスバンドです。」

ワンアウト、二塁。

実況　「三番、今日は当たっていません。ツーストライクワンボール、四球目、空振り三振。チェンジアップだったでしょうか。」

解説　「素晴らしいチェンジアップですねえ。」

ツーアウト、ランナー二塁。

実況　「さあ、ここで神田君。本日錦織君の前に凡退しております。おっとここで、キャッチャータイムです。マウンドに近寄り何やらベンチを見ている様子です。」

解説　「伝令が出ました。長谷川監督何を伝えたでしょうか。敬遠でしょうか。」

実況　「キャッチャー構えて、どうやら勝負するようですねえ。」

「初球、インコース、ストライク。とてもいい切れですねえ。勝負です。二球目落としてきた、ボール。ワンボール、ワンストライク。三球目、高めの球に、つられて振ってしまいました。ワンボール、ツーストライク。神田君追い込まれました。四球目。」

敬遠はなく勝負するさまに、皆固唾をのんだ。

実況　「打ったぁ、痛烈なセンター前ヒット。二塁ランナーは、回った、回った。バックホームもいい球が帰ってきた。」
「ワッー」という歓声の後、場内は「シーン」と静まり返った。
実況　「アウト。アウトです。ナイス返球です。得点入りません。」
解説　「神田君とてもいいバッティングでしたが、あたりが強すぎましたね。それとセンター。とてもいい返球でした。素晴らしい。」
この回の攻撃が終わり、八回も互いにランナーを出すものの得点できなかった。九回表の修実高校の攻撃も、三者凡退で終了した。
実況　「さあ、九回裏関東西高校の攻撃ですが、投球練習を終えた錦織君。いつものようにマウンドへ帰るとき、何やら唱えてプレートに戻りました。錦織君のこのプレートへの入り方。そして、毎回先頭バッターに対しては、プレートに両足置き、グローブを胸に位置し、左足を後ろに下げながら大きく、そしてゆったりと振りかぶる投球フォーム。いつも決まったルーティン。形になってますねえ。」
解説　「私は、錦織君を中学の時から見てますが、まさに一糸乱れぬ、お決まりのルーティン。いいですねえ。華がありますねえ。」
実況　「さて、打順は一番バッター平山君、先程は三遊間へのあたり内野安打でした。少し三塁手は深く守っています。おっと、今度はセフティーバンドをやってきました。ナイスバンド。セーフ。」

解説　「何とも平山君、いろいろなことやってきますねえ。」
ノーアウトランナー一塁。
実況　「関東西高校勝ち越しのチャンスです。二番バッター迷わず送りバンド。成功です。」
ワンアウトランナー二塁。
実況　「さあ、三番バッターですが、先程は空振り三振と、錦織君に今日は全くあっていないですねえ。」
解説　「なんかやってきますかねえ。先ほどの先制点のチャンスも神田君の痛烈なヒットで得点にならなかったですからねえ。エンドランもありますね。」
実況　「なんとここでセーフティーバンドです。一塁手取って三塁へ。セーフ。セーフです。フィルダースチョイス。ワンアウトランナー一、三塁となりました。」
解説　「いやあ、そういうことですか。」
ワンアウト一、三塁。
実況　「キャッチャーまた、タイムを取ってベンチを見ました。」
解説　「長谷川監督は、勝負なんでしょうね。彼は。」
実況　「気合を入れなおして、錦織君、一呼吸入れてどうやら勝負の模様です。」
「初球インコースストレート。神田君後ろへのけぞりながらもストライクです。ワンストライク。二球目、同じコース、ストライク。神田君手が出ませんねえ。」
解説　「いいボールですねえ。ここは、コースを広く使いたいですねえ。」

実況　「キャッチャーのサインに首を横に振り、さあ、三球目。打った、これはいい当たりですが、三塁線ファール。ライトは定位置より少しセンター寄りに動きました。さあ、ツーストライク四球目。ストレート、これも粘ってバックネットへのファールボール。」

解説　「素晴らしい勝負ですねえ。」

実況　「さて、ここでサインに頷き、錦織君五球目。ここで一塁ランナー走りました。」

また、ここで場内が「シーン」となり、あたかも、スローモーションの映像を見ているかのように観客全ての目に映った。

実況　「ふらふらっと上がった打球は、ファースト後方です。セカンド追いつけるか。」

観客全てが固唾をのんだ。

実況　「ライン際、捕った。捕りました。三塁ランナーがホームへタッチアップ。一塁ランナー飛び出して二塁付近。捕った二塁手はようやく立ち上がり、ボールをファーストへ。ファースト、、、。」

「アウトです。」

解説　「タイムプレーですか、、、。球審、ホームベースを指差していますよ。」

実況　「ホームが速いんですか。これを見たファーストすかさず、三塁へ送球をしました。捕った三塁手は、グラブを上に挙げ、三塁の塁審にアピールしています。」

「セーフ。セーフです。正規のタッチアップということです。球審、本部席に向かって一点と宣告しました。サヨナラです。三塁ランナー平山君、両手をつき

挙げて、そこへナインが集まってきました。スコアボードには一点が刻まれました。試合終了です。」

解説　「こういうことがあるんですかねえ。」

実況　「いやあ、これはどうしようもないことでしょうか。」

解説　「どうしようもない得点としか言いようがないですねえ。私も何回かは見たことがあるんですが、ここで、こういうことがあるとは思いませんでした。セカンド、キャプテンの小田君もファインプレーなんですよ。良くあのライン際の球を飛び込んで捕球しました。ただ、やはり平山君の足も速かった。バックフォームしても間に合わなかったでしょう。ライトが定位置だとしても、捕れない所に落ちていましたからねえ。まあ、どうしようもない得点としか言いようがありません。」

その時、和は膝に手をやり、がくりとうなだれた。

神田も、ファーストベース手前で呆然と立ちすくんでいた。

その光景が目に入った実況は、こう続けた。

実況　「錦織君、そして、犠打を放った神田君。二人とも、その場から動けません。この勝負どちらが勝ったのでしょうか。しかし、試合に勝ったのは関東西高校です。」

解説　「両高校とも白熱した素晴らしいゲームをしてくれました。これぞ高校野球の醍醐味ではないでしょうか。」

実況　「神田君、錦織君、二人の勝負は、春、そして夏と持ち越しでしょうか。」
解説　「楽しみですねえ。」
実況　「それにしても、なんとドラマチックな終わり方でしょうか。」
数分後、監督のコメントと和の様子を伝えた。
実況　「ここで、長谷川監督の談話が取れました。『神田君、敬遠すればこういう結果が変わってきたかもしれない。しかし、選手は高校野球で終わりじゃない。いま直面している戦いに勝負させてやりたかった。自分が批判されても、選手は悪くありません。よくやりました。』長谷川監督のコメントでした。」
「投手の錦織君は、口を横一文字にして、無言のままだった模様です。ここで、準決勝第一試合の実況を終わります。」
里美と七海は、イヤホンを耳からはずし、満足そうに笑顔で家路についた。
修実高校の選手たちはバスに乗ってグラウンドに戻ってきた。
そして、監督を真ん中にして、選手たちは円陣で座り、その周りを応援の選手が取り囲んだ。
監督　「俺もこういう試合の終わり方は初めてだ。しかし、みんな、逃げなくよく戦った。キャプテン、どうだ。」
セカンドを守る小田朗（あきら）キャプテンは答えた。
小田　「はい、みんな精一杯戦ったと思います。良かったです。」
監督　「錦織、お前はどうだ。」

和　「僕は、、、。」
監督　「何だ。」
和　「逃げました。三球目、四球目とバッターにあってきて、五球目、ストレートを投げずに、外角低めへスライダーでかわそうと、、、。逃げました。」
するとキャッチャーが和を助けるかのように口をはさんだ。
捕手　「錦織じゃなくて、僕が要求しました。」
監督　「そうか。ふん。」
監督は一呼吸置き、こう続けた。
監督　「三振を取りに行った球だったのか、そうでないのかは錦織しかわからん。それより大体だなあ、野手、もうちょっと打たんかい。バッテリー一点しかとられてないんじゃ。おまえらみんな春までに体変えさせてやっから。走ってこーい。」
選手　「はい。」
きれいな西日に照らされる中、選手たちは集団で、グラウンドを走りだした。「いち、いち、いち、に。いち、いち、いち、に。」と掛け声をあげながら。
和は帰宅し食卓に席するとすぐ、里美と七海に「ごめんなさい、勝てませんでした。」と伝えた。
二人とも、「お疲れさん。」と和の目を見て笑顔でこたえ、その後夕食では、野球の話をすることはなかった。

長い冬錬の始まりである。
このチームに対する長谷川監督の手ごたえと期待からか、例年の練習メニューも大幅に見直され、よりきつくなった。

ストレッチ
四股　二十回×三本
外野ポール間ダッシュ　三往復×十本
ベースランニング　十周（野手）
シャドーピッチング　百五十回（投手）
ウェイトトレーニング　各種　計一時間
四股　二十回×三本
集団ランニング　三周
ストレッチ

これが平日のメニューである。選手は口々に、「相撲部より四股うまくなったんじゃね。」と笑いながらささやくようになった。
最初の日曜日には、長谷川監督は父兄を招集し、学校の会議室で食事指導会を開いた。
監督　「選手の身体を一緒に作って欲しいんです。栄養補助食品の摂取は、基本的には私は理解者ではない。そして、昔のように三合飯を無理やり食べさせるなど、

内臓に負担をかけるようなやり方は、今後の選手の成長を考えても反対です。本日は、私が昔から親交のある管理栄養士さんにバランス栄養食について教示してもらいます。これから父兄の方は食事作りが非常に大変になると思いますが、選手の成長をバックアップして欲しい。」

長谷川監督がそう紹介した後、管理栄養士が、持参したバランス栄養食マットを父兄に配布し、マネージャーに手伝わせ食事を一品ずつ説明しながらマットに並べたのち、出席者全員で食した。

最後には、小田キャプテンが全選手を父兄の前に並ばせ、全員で「よろしくお願いします。」とあいさつし、指導会は終了した。

毎日が、とてもきつい練習であった。父兄も品を換えながらも一生懸命食事作りに取り組んだ。

クリスマスの数日前の土曜日、監督の都合で突然オフになった。

和は、七海から「グローブを持ってきなさい。」と誘われ、老舗で地元中高生に人気のスポーツショップに連れられた。

ショップに着くと七海は店員に、「グローブのオーダーをしたいので詳しい方お願いします。」と最初に来た若い店員を交代させるがごとく、いささか失礼な発言をあっさりと口に出した。

これは、クリスマスプレゼントだな、と薄々感づいていた和は七海に、「いや、いいよ。そんな高いの注文しなくて。」と言い聞かせようとしたが、七海は、「ここは黙っていなさい。」とすぐさまあしらった。

するとこの店でグローブの修理を手掛ける四十代後半の店員がやってきて、和に、「おー、こんにちは。」とよく和のことを知っている様子をし、七海の話を聞いた。

七海　「グローブのオーダーをしたいんです。投手用で、このウェブ使って。」

和は、不思議な顔をした。

七海は続けた。

七海　「このウェブは使いたいので、はずしてもらって、この色にあうものを作ってください。それから穴の数もなんとかあわせて作ってください。」

和　「えっ、なんで。」

七海　「あんたどうせ新しいグローブ買っても、このウェブに換えちゃうでしょ。」

和　「えっ、知ってたの？」

七海　「あんたが、小学校五年生の時、母さんから教えてもらったの。よくもまあ、使い続けているよね。」

七海は笑った後、和に形を整えるためタオルで巻いていたグローブを、棚の上に置かせた。

ウェブを見た店員がこう話した。

店員　「このウェブ、軟式のじゃん。まあ、ここで捕るわけじゃないけどなあ、、、。」

七海　「あっ、ついでにウェブ補修しといてください。」

和が申し訳なさそうな顔をすると、七海は笑いながら話した。
七海　「なんて、しょぼくれた顔してんの。どうせプロ野球選手になったときの契約金から差し引くんだから。」
和　「ありがとう。」
和はグローブに巻いたタオルを紐解くと、中からプラスチック球が「コトンッ、コトンッ」と床に落ちた。
七海は、再び笑った。

年末から年始の部活動は、三十一日から三日まで休み、四日の朝八時にグラウンドに集合し、近くのお宮へ皆で参った。
グラウンドへ帰ると、長谷川監督から持田トレーナーという定年後の老人を紹介された。
持田トレーナーは、いかつい身体つきをしているうえ、鼻髭を生やし、眼光鋭く怪しげな雰囲気たっぷりの人間に見えた。
選手同士で、「こんな爺さん、教えれるのかよ。」と小声で交わしていたが、その筋トレや体幹トレーニングたるや非常に近代的で、今までしていたつもりになっていた選手の度肝を抜かれた。
トレーニングは、三時間を予定されていたが、初日は一時間も続かなく、持田トレーナーは満足げに帰って行った。

選手たちは、みな「まじかあ。」とがっくりとうなだれた。
その後も、土、日曜日になると、午後このきついトレーニングが加わった。
一月も終わり、二月に入っても、きつい練習は続いた。
しかし、退部する者は一人もいなかった。むしろ長谷川監督の卓越したマインドコントロールで、みな苦しい時、何故か笑いが起こるようになっていた。そして、キャプテンはじめ選手同士で、「よし、ここ頑張ろう。」と励ましながら、みな自分の壁を越えていった。

二月十四日
和は、練習から疲れて帰ると、七海から小包を渡された。
和は、七海からのチョコレートと勘違いをして、七海に「ありがとう。」と言った。
すると七海は、「はあ？」と眉間にしわを寄せながらこう和に言った。
七海　「バーカ、私じゃないし。ってか、小包であんたに渡すか？」
和は、よく見ると、舞からの贈り物だった。
あわてて、和は自分の部屋に入り、まず机の上に小包を置き、深呼吸をした。
和は、舞のことが好きだった。
小学校の時、何も話さず十六島を離れてしまった後悔を今でも胸に抱き、そして思う度、逆に『好き』と言う感情が膨らんでいた。だが、どうすることもできないままでいた。
あれから、六年も経とうとしているけど、、、。

そして勇気を出して、袋が破れないようにそろっと開封すると、かわいらしい箱が入っており、ふたを開けると、三つ折りの便箋が昔もらったものと同じボールの形をした手作りのチョコレートの上に乗せられていた。

便箋を開くと、『元気ですか？』と一行だけ書かれていた。何回も書き直したらしく、前の紙に書いた薄いボールペンの跡が見えたが、、、。

三つ折りの、一番下の折り目をはぐると、『うち、お願いがある。お返しはＤＭ（ダイレクトメール）。』とアドレスの上に書かれていた。和は、昔と同じだな、そう思うと、昔の思い出が、まるで写真集がめくれていくように脳裏によみがえった。

何年振りだろうか。自然と涙が流れ落ちた。

そして、メールを送った。『元気だよ。舞は元気か？』

すると、二人のメール交換は続いた。

舞は、女子一人で中学野球に混ざり、出雲実業高校に進学してソフトボールを続けているらしく、キャップテンを任され、四番でファーストを守っていることを知った。

和が、感情に押し流されないよう、『じゃ、またね。お互い頑張ろう。』と最後のメールのつもりで送信すると、舞の写真が送られてきた。そして次のメールには、『和も写真ちょうだい。』と書かれていた。

ほんと変わんねーな、と思いながらも、舞からの写真を保存しようと指で押すと、写真は少し大きくなった。

和は、あれっ、と思い、親指と人差し指を使って画像を大きく、更に大きくすると、制服姿の舞の右肩にかけたリュックの横に、和と昔交換したウェブが縫い付けられ、携帯電話入れになっているのが見えた。

和は、涙が止まらないようになった。

しばらくして、舞に自分の写真を送るため、部屋から居間に出て、「姉さん、写真撮って。」と七海にお願いしたものの、和は携帯電話を食卓に置きもう一度部屋に帰った。

人前で泣かない、特に母と姉の前では。そう父が亡くなったとき誓った。

あれから、幾度となく泣きそうになったけど、、、、。今は、我慢できそうになく、一度部屋に帰った。

七海は和の行動を不思議に思いながらも、和の携帯電話が食卓に置かれた瞬間に電源が入り、映っている画像をじっくり見て、和も写真を撮って舞に送ろうとしていることに気付いた。

数分後、居間にレインボーミラーのスポーツサングラスをかけた和が戻ってきて、椅子に腰かけた。

七海は、「舞ちゃん、かわいくなったねえ。」と言い、続いて「何であんたはこんなんかけてるの。」と言いながら両手で和のサングラスを外そうとした。

和は、ぎりぎりだった。瞬きしても、下を向いてもこぼれそうな涙。

七海は和の見開いたままで真っ赤に染まった目を見たとたん、「ごめんなさい。」とサングラスをもとの位置に戻した。

七海は「もう一回。」と何度も何度も手を震わせながら和の写真を撮ろうとしたが、ぶれてうまく撮れなかった。
ようやく撮れた写真は、笑顔のない、むしろ苦虫をかみつぶしたような和だった。
和は、メールを見返す度、自分が送った写真があまりに残念な写真だったことを悔み、ホワイトデーに、自分が持っているメジャーリーグの帽子の色違いのものを舞に送り、その夜、帽子をかぶった自分をもう一度七海に撮ってもらい舞に送信した。
和のうっ憤は少し晴れた。
内容的には、メガネを取っただけの無表情にもかかわらず。

三月に入ると、春の陽気が次第に感じられるようになり、練習は、秋までのように三班に分けられ、それぞれ交代しながらノック練習も取り入れるようになった。
その時、長谷川監督は全員を集合させるようキャプテンに指示を出した。
どうやら、指導が始まる気配である。
そもそも長谷川監督は、【野球人として】の規律、【野球道として】の指示が、どこの高校よりも厳しい。
【野球人として】の規律としては。
眉毛をそらない。
グローブの紐は、親指の長さまでとする。

登下校は、制服着用で寄り道しない。
練習時グラウンド内は練習用シャツ、オーバーストッキングを着用する。
Tシャツ、ネックウォーマーは着用してはいけない。
水筒を持参し、飲み物は自分で準備する。
野球バッグは、一寸のズレなく並べる。
挨拶をきちんとし、常に父兄、指導者に感謝をし、謙虚でいる。
などであるが、もちろん監督も選手同様実践している。
また、【野球道として】の指示としては。
常に相手チームや審判員をリスペクトする。
グラウンド内で三歩以上は歩かなく走り、私語はしない。
雄たけびを上げず、ガッツポーズはしない。
いかなるデッドボールを受けてもファーストまで全力疾走をする。
常に全力でプレーをする。
エラーした選手を叱責することなく、エラーした選手は下を向かず。
などである。
指導が始まった。
監督　「あのなあ、野球道として、攻守交代が遅いんだ。守備に入るときな。審判さんにせかされて入るようじゃ遅いんだよ。攻守交代一分半とかそんなんじゃだめよ。真っ先に入って、特に内野手は。自分の守備位置をスパイクでならすくら

いの余裕がないとだめなんよ。だから、野球の神様がわざわざイレギュラーさせるんだよ。こんな広いグラウンドのちょっとしかない凹みにボールが当たるんだよ。自分の試合の入り方をせんとだめなんだよ。」

選手たちは頷き、十分理解した。

監督　「それとな。これからもう少ししたら練習試合もあるんだが。バッターズボックスへの入り方もな、審判さんにせかされて入って、素振りもできんと、いきなり落ちる系の球投げられて、おまえら打てるんかい。打てへんだろ。ここで、一球損していることになるんだ。だからな、投球練習三球のうち、二球の間はネクストバッターズボックスで素振りして、あと一球のところでサークルの後ろで素振りして、キャッチャーがセカンド投げたら余裕を持って入って、そこでまた、十分素振りしてリラックスするんだ。自分の入り方をしないといけない。自分の間を持つんだ。守備も、打席も。」

監督が、全員の顔を見ると「はい。」と答えた。

そして、監督が「そこんとこ徹底していこう。」と指示すると、キャプテンが「集中、徹底していこう。」と皆に気合を入れ、皆もまた「集中、徹底していこう。」と追随した。

まさに、「よし、ここ頑張ろう。」に続く合言葉、「集中、徹底してこう。」が生まれた瞬間だった。

監督は、思った。【凡事徹底】。このチームは強くなる、と。

三月中旬から練習試合が始まり、父兄らは口々に、「本当にでかくなってる。いやあ、みんな頑張ったね。」と、選手の頑張りをよそに、自分たちの食事作りの頑張りをたたえあった。確かに、一見しただけで、肩幅が増し、胸筋は膨らみ、お尻はでかく上向きとなり、太ももからふくらはぎにかけてパンパンに張った体形となった。みんなのユニフォームをワンサイズ大きくする必要があるくらいだ。

バッターの打球は勢いを増し、駆ける姿も勇ましく、対戦チームと試合をする前から結果が予想できる。

昨年の秋季大会前の練習相手は、今やBチームでもコールドゲームで勝利するくらいである。Aチームはと言うと、東東京か近隣の他県の強豪校との練習試合に加え、関西遠征計画が日増しに監督室のスケジュールに加えられていった。

春季西東京大会まで、修実高校の勢いは止まらなかった。

月日がたつのは早く、和もいよいよ最終年となった。

そして、四月も終わり五月となると、春季大会が始まった。

修実高校は、無難に準決勝をも勝利し、八年ぶりに決勝まで駒を進めた。

和は、準々決勝から登板し、一八イニングを投げ、五安打無失点と抜群の投球内容であった。

決勝の対戦相手は、神田率いる関東西高校である。

ひと冬越した神田は更にでかくなり、ここまで三ホームランを放つなど打球は高校生離れをし、ひときわ異彩を放っていた。
和も神田も、球場ですれ違っても、互いに意識して目を合わせることはなかった。
それは、決勝の試合開始前の整列の時でも。

決勝
里美と七海は、新しい父兄用の応援シャツに袖を通し、帽子をかぶりタオルを首に回し、応援団の前の方に座って、ラジオのイヤホンをつけながらメガホンを持って応援した。
修実高校は、一番ショート福岡、三番サード瀧という二年生三遊間コンビの活躍が光り、二点を先制し、和も関東西高校打線を三安打無失点に抑え、九回裏最後のマウンドへ向かった。
実況　「さあ最終回、関東西高校の攻撃が始まりますが、修実高校錦織君。ここまで素晴らしいピッチングで関東西高校を三安打無失点。中でも神田君を完全に抑えきっています。しかしここは関東西高校、打順は一番平山君からの攻撃です。」
解説　「両チーム、ひと冬越えて抜きんでてますね。体格も、パワーも。そこへ来て錦織君、さすがです。」
実況　「いつものように、リリースポイントを確認してからの投球練習。そして、マウンドに帰るとき、胸にグローブを置き、何やら唱えています。さあ、初球、両

足をプレートに置き、ゆっくりと大きく振りかぶって。ストライク。初球、直球インコース。すばらしいキレのあるボールです。」

解説　「二球目、ストレート高めをバンドでしょうか。打球はダックネットです。」

実況　「セフティーだったでしょうかねえ。」

解説　「空振り三振。ワンアウトです。」

実況　「おっとここは打たされてファーストフライ、キャッチです。ツーアウトです。神田君まで打順が回わせるか。」

解説　「三番バッター、ツーストライクから粘ってセンター返し。セカンド追いついたが、投げられない。転がったコースがよかったですねえ。」

実況　「さあ、神田君につながりましたねえ。一発出れば同点ですか。錦織君、神田君の勝負は本当に手に汗握りますねえ。」

解説　小田がタイムを取ってマウンドに行くと、内野手全員とキャッチャーがマウンドに集まった。

小田　「ここ、頑張ろう。集中、徹底していこう。」

全員　「集中、徹底していこう。」

みんなの気合が入りなおした。

そして、和は再びプレートに着く前、胸にグローブを置き一呼吸入れた。

実況　「さあ、プレーがかかりました。初球、空振り。ワンストライクです。」

解説　「ストレート内角高め、厳しい球ですね。」

実況　「大きく力強いスイングでしたが、空振りワンストライク。バットを両手で持ち上げ、大きく状態をそらして構えなおしました。」
「二球目。首を横に振りここは、落としてきました。見逃し、ツーストライク。神田君、構えたまま身動きしません。」
解説　「錦織君、余裕がありますねえ。」
実況　『『コン、コンッ』とバットでホームベースを小さく叩き、バッターズボックスの土を右足でならして、さあまた、バットを両手で持ち上げ、大きく状態をそらして構えなおしました。」
「三球目。内角へのストレート。バットは止まったか、、、。スイング、スイングです。神田君、手が出ません。自分のスイングをさせてもらえませんでした。修実高校優勝。」
解説　「お見事ですねえ。錦織君。素晴らしいピッチングでした。」
実況　「修実高校、十二年ぶり春季六回目の優勝です。」
応援席が歓喜極まる中、里美と七海は「はあーっ」と息を噴き出しイヤホンをはずすと、二人は笑顔で両手を握りあった。
和は夕方帰ってきて、二人にまじめな顔で「勝ちました。」と報告した。
七海　「おめでとう和。もっと喜んでいいのよ。」
「うん。」と笑顔を見せず首を二度縦に振った和を見て、里美は笑顔でこう言った。
里美　「ありがとう。」

和は、鞄からメダルを取りだし、仏壇に供え、手を合わせこう言った。「父さんありがとう。続けてこれて良かったです。」と。

修実高校は、おおよそ夏の選手権メンバーを絞りつつ、それらの選手を率いて土、日曜日ごとに他県強豪校との練習試合を重ねていった。
五月も終わろうとする日、和は舞からメールをうけた。
そこには、こう綴られていた。

私の野球人生は、本日をもって終了しました。泣
今まで、つらい時も頑張ってこれたのは、両親、指導者の方々。
そして、和のおかげ。ありがとう。
少しでも長く、チームメートと野球を続けたかったけど、これが実力。涙
けど、切り替えて将来の夢【保育士】に向かって、これからは勉強に励むのだ。
あとは和、頼んだぞ。
夏休み、甲子園に応援行くからね。

優勝した高校との二回戦で敗北した舞からのメールだった。
『夢かあ』、和は舞のメールの【夢】と言う文字が心に響き、今の自分を振り返りこう思った。

『俺の夢ってなんだろう。俺って野球を取ったら、何が残るんだろう。将来何になりたいんだろう、、、、。』

和は、むなしくなってきた。自分の将来について考えずに歩んできたことを悔いて。

六月も下旬になると、甲子園予選である選手権予選西東京大会の組み合わせが発表され、修実高校は第二シードで、順当に勝ち上がれば、決勝で第一シードの関東西高校と対決することとなった。

練習も、疲労を蓄積しないよう軽めのメニューが組まれ、今までよりも早く家路に着く毎日となった。

和は、これからの自分について少しずつ考えるようになった。

なりたいものが今はまだない。

しかし、とりあえず就職しよう。

だか、今の自分は甲子園という全国での実績もなく、社会人野球のチームから呼ばれる実力もまだない。

あれば話もあるはずだ。

ＭＡＸ　一四三キロ　の投手なんて掃いて捨てるほどいる。

だから是が非でも甲子園に出て、評価される投球を見せたい。

そう考えていた。
それは、夢ではなく、ただ漠然と就職する、そのために野球で目立ち、社会人野球を運営できるほどの優良企業に就職する。そうすれば、母や姉への負担や心配もなくせるだろう。そう考えるようになってのことだった。
だからと言って、どこの社会人野球チームにあこがれ、入りたいという希望もなかった。
和は、就職という進路についてそう考える一方、大学進学という道はあえて考えないようにしていた。というより、大学進学と言う門戸は、開けてはならない【我慢する扉】、と思っていた。
本屋で野球の雑誌の棚の前でも大学野球の関係誌は見なく、ドラフト候補選手を掲載する雑誌でも【大学生編】の記事は飛ばして読んだ。
姉が就職したように、自分も大学進学への道は家族への負担などを考え、はなから諦めた挙句に。

選手権予選西東京大会が始まった。
修実高校は、初戦、和が先発し、五回コールドで勝利すると、二回戦以降は、左腕で二年生の杉原が素晴らしいピッチングを演じた。

そして修実高校は、準々決勝、準決勝と和の力強いピッチングとともに好調打線の大量得点で、難なく決勝に勝ち上がった。対戦相手は、準決勝十三回、神田のサヨナラツーランホームランにより駒を進めた関東西高校である。

いよいよ最終決戦　七月二十八日（土）の時がきた。

里美は他の父兄とともに、修実高校グラウンドに集合し、応援道具などを手分けして持ち、会場へ到着し、七海は午前中用事をしてから午後到着した。

七海　「ごめんね。遅くなって、、、。」

里美　「本当にいいのよ、無理しないで。」

七海　「さすがに大学野球になるとリーグ戦だから、毎回休み取って見に来れないだろうし、、。彼女とやらもできてると、そう姉が見にも来れないか、と思ってね。」

里美　「それもそうよね。」

二人は笑顔でこう話し、イヤホンをいつものように耳にした。

実況　「やはり修実高校、関東西高校両者の戦いとなりますこの決勝戦。修実高校は準決勝難なく勝ち上がりましたが、関東西高校先制されながらもよく追いつき、延長十三回、神田君の左中間へのサヨナラツーランホームランで駒を進めてきました。」

解説　「いやあ、見事なホームランでしたねえ。」

実況　「修実高校は、ここまでエースの錦織君が三試合に登板。残りの試合は二年生の杉原君が投げております。長谷川監督も、『ピッチャーの杉原、ショート福岡、サード瀧、三人の二年生トリオの成長がめまぐるしい。』と語っていました。」

解説　「修実高校、これほどの部員数の中で、二年生が入って来るということは、センスもさることながら相当の努力とメンタルをしているんでしょうねえ。」

実況　「そして迎え撃つ、二年連続甲子園出場を目指す関東西高校。投手陣も充実しておりますし、神田君この大会でも二本塁打。高校通算六十八本塁打を記録しております。」

解説　「楽しみですねえ。錦織君と神田君の対決は、、、。」

試合は、投手戦となり、六回終わって０対０のままだった。里美と七海は固唾をのんで戦況を見守った。

実況　「六回終わって両校得点ありません。さて修実高校。七回の攻撃は打順よく、バッターは一番ショート福岡君です。初球、打った、ライトオーバーです。これは長打になるかあ、二塁打。悠々セーフです。ノーアウトランナー二塁です。」

ノーアウトランナー二塁。

実況　「修実高校、初めて得点圏にランナーを出しました。」

「そして二番バッターはキャプテンセカンドの小田君。ここは、送りバンド、見事に決めてまいりました。」

解説　「こういうところですねえ。修実高校の強さは。きっちりと決めてきますからね

え。」

ワンアウトランナー三塁。

実況　「さて、当たっていますサード、二年生の瀧君、同じく二年生の福岡君を返すことができるでしょうか。」

ワンボール、ツーストライクと追い込まれた。

実況　「追い込まれました瀧君。第四球目、打ちました、ライトバック、ライトバック、フェンスに当たって打球が転々とする間、打った瀧君三塁打。三塁打です。均衡が破れました。修実高校一点先取です。」

解説　「いやあ、追い込まれて、良く振り抜きましたねえ。」

その後、四番バッターの犠牲フライでこの回二点を取り、裏の関東西高校の攻撃に転じた。

和の、投球前のルーティンは続いている。

プレートから、6フット（足）出し、少し土を掘ってからそこへ左足を置きなおし目線の先にボールを置き、リリースポイントを確認する。

そして、練習球を投げ終わり、キャッチャーからの送球を捕球しバッターを背にしたとき、毎回ウェブに願い事をするかのように唱えてからプレートに立つ。

実況　「プレートに両足を乗せ、グローブは胸元に。錦織君、ここから大きく振りかぶって、ストレート、ワンストライクです。」

その後、ツーストライク取った後、バッターに粘られた。

実況　「スリーボールツーストライクのまま、バッター粘って七球目。あっとこれはボールです。今大会初めての四球ではないでしょうか。さすがに、疲労もありますでしょうかねえ。明らかなボールでした。」

解説　「まあ、どちらの投手も疲労はありますでしょうねえ。」

ノーアウトランナー一塁。カウント、ワンボールツーストライク。

実況　「ここは落ちる球。見逃し三振です。」

ワンアウト、ランナー一塁。

実況　「三番バッターは、今日は、今大会当たっております。」

解説　「関東西高校のこのバッターも二年生、楽しみな選手ですねえ。」

外角へのスライダーでワンストライクの後。

実況　「打った、これは痛烈な当たり三塁線、三塁瀧飛びつくも打球はフェンスまでとどいて、それをレフトが捕って、ようやくボールが戻ってきました。しかし、一塁ランナーは三塁コーチャーが止めました。ランナー二塁三塁です。いやあ、ナイスバッティングです。」

解説　『パワーは神田君を上回る』と関東西高校の監督さん、言ってましたからねえ。」

ワンアウト、ランナー二塁三塁。

実況　「一打同点の場面、ここで神田君です。今までの打席、神田君は錦織君に対し、自分のバッティングをさせてもらえません。ここですかさず、セカンド、キャプテン小田君、ピッチャーのもとに近寄りました。」

小田は、タイムを取った後、内野手と捕手がマウンドに詰め寄った。
小田　「打たれたって、同点だ。勝負だ、勝負しかない。よし、ここ頑張ろう。」
選手　「よし、頑張ろう。」
実況　「初球、ストレート、見逃しストライクです。ワンストライク。バットを持ち上げ大きく沿りかえった後、構えなおして二球目、落ちる球。見逃し、ツーストライクです。」
場内は張り詰めた空気となり、応援団の鳴り物も鳴り止んだ。
次の瞬間。
実況　「打ったぁ。これは大きい。レフトバック、レフトバック、フェンス際、レフトジャンプ。捕ったか、捕ったか、捕りましたぁ。しかし三塁ランナー捕球を見て、ホームイン。一点返しました。」
内野手と捕手は、口々に「オッケー、オッケー、ツーアウト、ツーアウト。」と励まし合い、次打者は凡退した。
八回の攻撃は、両者とも得点に及ばず、九回表の修実高校の攻撃は、九番バッター和の空振り三振で終えた。
実況　「さあ、いよいよ最終回の裏、関東西高校一点を追う攻撃が始まります。」
ツーストライク、ワンボール後。
実況　「インコース、ストレート、見逃し三振。錦織君まだ球威はありますねえ。」
解説　「気迫の投球ですねえ。」

ワンアウト、ランナーなし。
実況　「ワンアウトから、バッター一番、平山君。初球、打ったぁ、一、二塁間。関東西高校、同点のランナーが出ました。」
ワンボールの後送りバンド成功。
実況　「関東西高校、ここは送ってきました。関東西高校のバンドもさすがですねえ。」
解説　「色々な考え方もあるでしょうが、ここでなんとか、今大会当たっている三番バッターの一振りで追いつきたいと言うところでしょうか。」
実況　「最終回、得点圏に同点のランナー、俊足の平山君を置いて、三番バッター。先程は痛烈な三塁線を破る二塁打でした。ここで、また、キャプテンの小田君がタイムを取りました。本日二回目のタイムです。選手がマウンドに小走りに集まってきました。」
解説　「ナイスタイミングですな。小田君いい笑顔してるわ。」
小田　「みんな笑顔でな、ここ、頑張ろう。ツーアウトだ、ツーアウト。」
選手　「よし、頑張ろう。」
実況　「さあ、プレーがかかりました。錦織君くん初球、ストレート。打ったぁ、これは三塁席への大きなファールボールです。」
ワンストライク。少し更に瀧が後ろへ守備した。
実況　「インコース、差し込まれた打球は、三塁線ボテボテのピッチャーゴロとなって、、、。」

「錦織君、投げれません。完全に打ち取った当たりでしたが、ランナー一塁三塁となって逆転のランナーが出ました。何とか、神田君に繋げようとする執念でしょうか。」

解説　「これはしょうがない。」

ツーアウト、ランナー一塁三塁。

実況　「そして、神田君です。先ほどの打席では、犠打を記録しておりますが、本日錦織君からヒットは出ていません。修実高校、一点差を守りきることができるでしょうか。」

解説　「最後にまた両者の戦いとなりましたね。これも何かの縁ですかねえ。」

初球、一塁ランナーが盗塁し、セカンド小田が捕手の送球をカット後、三塁に送球するしぐさをした。そして、三回目のタイムを二塁塁審に要求した。内野手、捕手が集まった。

実況　「伝令です。ワンストライクを取ったところで、伝令。ここは、敬遠もありますかねえ。」

解説　「うーん。敬遠、、、。敬遠ありますかねえ。長谷川監督は、、、。うーん、、、。」

伝令　「監督な。『つらい時、迷った時にこそ一歩前へ出ようや。結果を恐れるな。勝負だ。その方が悔いが残らんだろう。』って。」

選手たちは、監督の一言に背中を押され、迷いが吹っ飛んだ。

小田　「みんな、悔いないな。ここ、頑張ろう。集中、徹底していこう。」

選手　「集中、徹底していこう。」

小田は、ありったけの笑顔で、みんなの勇気を奮い立たせた。
伝令がベンチに帰ると監督は両手で喉元のところに【〇（丸）】のマークを作り笑っていた。
みんな、緊張のあまり鳥肌が立ち、ガチガチになっていたが、少し余裕ができた。サードの瀧を除いては。
和は、ウェブに想いを吹き込んだ。
実況　「さあ、仕切り直しです。プレーがかかりました。どうやら敬遠はありません。神田君と勝負です。二球目ファールです。三塁線それました。」
ツーストライク。
実教　「さあて、三球目。ここは、落としてきた、外角低め。チツプです。はあー、よく当てましたねえ。」
解説　「本当によくあのボール当てましたねえ。決めに来たボールでしたねえ。」
実況　「ピッチャー錦織君、グローブを胸元に置き、プレーの合図とともに大きく振りかぶった。さあ、四球目。」
実況　「打ったあー。これは、サード正面。」
場内は静まり返り、全ての観客、全ての選手らは思った。『終わった』と。
実況　「サードはじいた。ボールは転々とファールグラウンドを転がった。ようやくショートの福岡が三塁ベンチ前のボールに追いつきましたが、二塁ランナーも帰って、サヨナラです。関東西高校サヨナラ勝ちを収めました。」
解説　「いやあ、またこういう劇的な試合でしたねえ。」

実況　「記録はエラーです。エラーの表示ランプが点灯しております。関東西高校歓喜の渦です。サードの瀧、立ち上がれません。それを見た錦織君と小田君が迎えに行って、ようやく立ち上がり、両高校整列しました。」

球審の『ゲーム』の合図ともに、関東西高校は、ホームベース付近に横一列に整列し、声高らかに校歌を斉唱した。

校歌を歌い終え、一塁側応援席に飛び跳ねるようあいさつに向かう関東西高校。

全打席結果的に無安打だった神田も、この時ばかりは笑顔だった。

対照的に、修実高校選手は小田の集合の合図にも、瀧は右腕で顔面を覆い号泣し、同じく涙を流す福岡。杉原らに抱えられながら、三塁側応援席に歩き出した。

和も、いつもと違い力が抜け、最初の一歩が出なく、二、三歩遅れてキャプテンの横に整列した。

小田の『ありがとうございました。』のあいさつに続いて応援席に一礼するも、和は放心状態であった。

応援席の父兄もメガホンを片手に立ちつくすままであったが、里美と七海は、涙をこぼしながらも、選手、和に拍手してやった。「良くやったよ。和。」と。

選手たちは、控室に入った。

まだ、泣き崩れている瀧に対して、福岡はこう言った。

福岡　「瀧。何でそらすんだ。しかも、ボールを見失うなんて。目を閉じとったんか。先輩たちに、、、。」

瀧は、言葉がでない。
キャプテンの小田は、皆に「止めよう。胸を張って帰ろう。」そう諭した。
控室を出て、帰るバスに乗り込む途中、監督と和は、ラジオ局の者にインタビューを受け、ラジオで流された。

実況　「只今、長谷川監督の談話が取れました。『神田君との勝負は、監督の指示でしたか？』という問いに長谷川監督は、『自分の指示です。選手たちは、高校で終わりではありません。目の前の勝負から逃げて欲しくなかった。』そう声を詰まらせて、その後に、『しかし、これが選手にとって本当によかったかどうか。その答えは選手がいつか振り返って考えてくれると思う。』と答えた模様です。」

解説　「長谷川さんらしいですなあ。」

実況　「錦織君のコメントですが、『歩かせる気はありませんでした。逃げなく真っ向勝負ができました。悔いはありません。監督、チームメート、そして親に感謝しています。』とのことのようです。」

里美と七海は、他の父兄とともに片づけをしていたが、手を止めラジオに聞き入って、「うん。」と首を一度縦に振り、イヤホンをはずし帰路についた。
グラウンドに監督、選手は到着し、監督を囲んで選手は輪になった。

監督　「良く、戦った。キャプテン、どうだった。」

小田　「みんなよく戦いました。逃げなかったと思います。」

監督　「副キャプテン（捕手）。お前はどうだ。」

捕手　「みんな最後まで、声を出して一丸となれました。」
瀧は、口火を切った。
瀧　「すみません。僕のせいで、、、。」
瀧は、頭を抱え、帽子のつばを下にずらし、泣き顔を隠した。
和　「僕が、、、。」
和が話しだすと、みんな和がここで何を言うのか、神妙な顔つきになった。
和　「強い球打たれました。瀧がはじいたのは、僕のせいです。力負けです。すみませんでした。」
和は、呆然としながら語りつつも、心は、昔の自分より確実に強くなっていた。
ほんの少し間をおくと、後輩達は一斉に、上を向いたり、下を向いたり、右手で顔を拭ったりしながらそれぞれに涙した。
監督　「よし。もう終わりにしよう。みんな良くやった。瀧、福岡、今から監督室へ来い。」
監督室に入り、皆が椅子に座ったところで、監督がこう二人に話した。
監督　「お前ら責任を取れ。」
瀧は、すかさず謝った。
瀧　「僕のエラーで、、、。」
すると監督は、、、。

監督　「そんなことじゃない。俺の言うとる【野球道】にお前ら反した。責任を取れ。瀧はキャプテン、福岡が副キャプテンとなって、必ず次は関東西高校に仕返しするんだ。」

泣きながら、ぜいぜい肩で息をしながら帰ってきた瀧と福岡の姿を、三年生たちはとても愛くるしく見えた。

そして、後輩部員と三年生は対面し、修実高校恒例の後輩部員からの決意表明。

泣きじゃくり、うまくあいさつもできないキャプテンに、『走ってばかりで野球がうまくなるのか』と尋ねた杉原ら。

彼ら後輩たちが、翌年、関東西高校を破って甲子園で校歌を歌うなど、その時三年生たちは、想像だにできなかった。

遠く離れた十六島。
舞は、和の試合の模様を、インターネットの高校野球速報で見守っていた。
九回裏、ツーアウト、ツーストライク。あと一球、、、。舞は願った。
しかし、舞の願いは届かず、甲子園で会えることはなくなった。
舞はひらめいた。
今夜スポーツ番組でこの試合のハイライトがある。
怪物神田君を放映するために。
舞は、早速録画の準備をして、その時を待った。
予感は的中した。
実況　「ピッチャー錦織君、グローブを胸元に置き、プレーの合図とともに大きく振りかぶった。さあ、四球目。」
その時だった。舞は、震えた。

『うちのウェブ』

何度も録画した映像を見返した。そして、和がグローブを胸元に置いている瞬間に画像を静止した。
舞は両手で顔を覆い、もう、涙が止まらなかった。
修実高校が負けたシーンなど、どうでもよかった。負けたことすら忘れていた。

その後、和へのダイレクトメールに、入力しては消去し、入力しては消去し、何度も何度も繰り返したが、結局送信できなかった。
『会いたい』と。

そんな舞に、数日後、突然和からメールが届いた。
『近くそっちに行きます。』
舞はすぐさま『やったー』と顔文字付きでメールを返した。
甲子園に出て、評価される投球を見せたい。
そして、知名度を上げて、社会人野球を運営できるほどの優良企業に就職する。
そのチャンスを奪われた和は、目標を失い、虚脱感に陥った。
何から、どう進んでいいか、解らなくなった。
野球部の連絡網で三〇日（月曜日）に、三年生のミーティングが開催されるとの連絡が回ってきた。例年、選手権を終えると、進路協議のための面談が行われる。和は、今そのタイミングであることも承知の上であった。しかし、どうして良いのか、解らなかった。
ミーティングで監督から一週間後の月曜日に、監督、担任、保護者と選手の四者面談の説明があり、それまでにそれぞれ進路について考えてくるよう指示が出された。
和は家に帰っても、なかなか面談の話を切り出せなかった。
すると、七海が帰ってきた。

七海　「あー、和、帰ってたの。ちょうど良かった。母さんと話してもう決めたんだけど、甲子園いけなかったから、今年は、『十六島へ行こうね』って話して、今度の木曜日の夜行バスで出て、日曜日の夜こっち帰って来るの。そのつもりでいてねぇ。私たち、もう休みを取って、旅行会社にチケットの手配もお願いしてきたから。」

里美　「今年、お父さんの七回忌を【昭和の日】にしたでしょ。そのご報告にと思ってね。」

和　「うん、わかった。僕も話があるんだ。」

ようやく、話すチャンスがやってきた。

和　「来週の月曜日に進路の面談があって、監督と担任の先生と僕と保護者で話しあいしなきゃいけなくて、母さんお願いできないかな。」

和は、何でもないようさらりと話したが、やはり里美と七海は心配だった。

里美　「私は行くけど、、、。和はどうしたいの？」

和　「うん、就職する。」

七海　「どっか、社会人野球の会社から誘いがあったの？」

和　「いや、とりあえず今のところないけど、就職希望って言おうと思ってる。」

七海　「野球はどうするの？」

和　「解らない。」

七海　「何になりたいの？」

和は言葉がつまった。
七海は、和のそういう態度にいてもたまらず言及した。
七海　「和。野球辞めるなんて言うな。そして大学野球するの。こっちの大きなリーグで活躍するの。そう、前も言ったよね。」
和　「いや、就職って決めたんだ。」
里美はこう諭した。「もう少し、時間があるから考えなさい。」

次の日、七海からチケットが全てとれたという連絡を受けた里美は、正子に「急なことですが、三人で十六島に行こうと思っております。ご迷惑かけますがよろしくお願いします。」と連絡をすると、正子は電話の先で、啓介とともにはしゃいだ様子で、「待ってるよ。気をつけてね。」と大喜びしてくれた。
その夜、景子から里美に「朝出雲市駅に着くバスを迎えに行く。」という内容の電話があった。
景子は、里美の電話の声から、何か悩んでいる様子をうかがい知り、和の話を聞き出すと、栄一に電話を代わった。
里美もどうして良いかわからず、父親的な意見を知りたかった。
栄一　「そげかね。(そうなの) 分かった。おらが話してみーわ。安心して、気をつけて帰ってくーだよ。(来るだよ)ほんなら、朝おらが出雲の駅まで迎えに来ーけん。(行くから)」

里美は、胸のつかえが少しとれて、十六島行きに期待を寄せた。
何とか、思い直させることはできないだろうか。里美も七海も、和が本当は金銭的な心配から就職する気持ちになっていることなど、お見通しだった。
里美は、甲子園に行けず、拓海の七回忌の報告と言う十六島行きに、一縷の望みをかけた。

到着時間より十分速くバスが出雲市駅に着いた。
和、里美と七海は少しベンチに座り待っていると、、、。向こうから、制服姿でリュックを背負った女子高生が、手を振りながら走ってきた。
舞だった。
里美　「舞ちゃん？大きくなったねえ。」
舞　「みなさんこんにちは。監督から聞いて。『学校まで乗せてくれるから』って言ってもらって。」
舞が和を見て、「和、ちっとも変わんない。でも大きくなったねぇ。」と言うと、和はほんの少し照れ笑いした。
学校での進路説明会がある舞を出雲実業高校へ送り届け、その後啓介の家に向かった。
峠を越えると、眼下に広がる美しい景色。真っ青な空の下のきらきらと輝くまばゆい海。
懐かしかった。

啓介の家に到着すると、啓介と正子と景子は、家から飛んで出て、荷物を全て三人が持って、「はやこと（早く）、はいらっしゃい（はいりなさい）」と促した。
それぞれにあいさつを交わした後、仏壇に手を合わせ線香をあげた。
その後席に着き、お茶を飲みながら近況を報告したり、尋ねられたり、、。
それからみんなで、山の中腹にある錦織家の墓参りをし、そして栄一の運転で三人は久しぶりに出雲大社へお参りをし、出雲蕎麦を食べ啓介の家に戻ってきた。
帰ってきて、またお茶を飲んで団欒している時、真があいさつにやってきて、座敷に上がるや土下座した。

真　「おばさん、七海、和。その節は、本当に申し訳ありませんでした。」
里美　「あなたが悪いわけじゃないから。もう、自分を責めないでください。」
七海は、真の左手薬指の指輪を見つけた。
七海　「ってか、真さん、結婚したの？」
真　「えっ、俺のこと待ってた？」
七海　「何勘違いしてるのよ。あなたみたいなデリカシーのない人が、よくまあ結婚できたわねってことよ。」
二人の馬鹿話に花が咲き、それを皆が笑って観戦していると、栄一は和の肩を小さく叩き、「ちょっと二階に来い」と誘った。
栄一は、二階の和室で和と座卓を挟んで向かい合って座り、和に進路のことについて穏やかに尋ねた。

栄一　「和、お前そーでどげすーや。（どうするんだ）高校卒業したら。」
和　「就職しようと思ってます。」
栄一　「そうでなんになりたいや。（なりたいんだ）なんがしたいや。（したいんだ）」
和は答えられなかった。そこへ栄一は重ねて尋ねた。
栄一　「なりたいもんがないかや。そぎゃんもん（そんな者が）がどげやって（どうやって）何処につとめーてて。（つとめるのか）」
和は、少し間をおいてこう話した。
和　「まだ、どうしていいかわからない。野球ばっかりしてて、何になりたいかも、何がしたいかも、考えがまとまらなかったです。これから決めていければと思って、、。」
七海はそっと和室の外で座って聞いていた。
和　「けど、姉さんに自分の夢をあきらめさせて犠牲を強いたから、僕も大学進学なんて考えちゃ駄目だから。就職しないといけない。」
栄一　「そぎゃん、なんがしたいかもわからんもんが、みやすげに（容易く）就職なんて見つかーかい。（みつかるのか）」
次の瞬間、思ってもない言葉が和の口から出てしまった。
和　「もし、就職口がなかったら、おじいちゃんに教えてもらって漁師にでもなろうかと思って、、。」
栄一は、座卓をまたいで和に乗りかかり、和の胸ぐらをつかみ罵声を浴びせた。

栄一　「ふざけーなや。そぎゃんもんが、漁師になれーかや。（なれるわけがない）海で生きれーかや。（生きれるわけがない）ここでなんがつとまーかや。（務まるわけがない）馬鹿にすーなや。（馬鹿にするな）」

栄一が、和の頬をめがけて叩こうすると、とっさに七海が部屋に入り、栄一の手を振り払った。『あっ』と栄一が思った瞬間、『パチンっ』と、七海は和の頬を叩いた。

七海　「ふざけるな。犠牲？あんたなんかにそんなこと言われたくない。」

和　「姉さんの教員の夢を奪ったから、、、。」

七海　「もう、そんな夢なんてないから。あたし、今満足してるから。それに、、、。」

少し間をおいて、七海は再び話し始めた。

七海　「【犠牲】なんかじゃない。その時の私の想いは、、、。」

「【貢献】って言いなさい！」

そして、七海はたたみかけた。

七海　「クソガキのくせして、自分を卑下して。なにもわからないくせして、あたしを悲劇の帝王みたいに思うんじゃないわよ。」

七海は和に、『ずっと思っていたことを言ってやった』と清々した。

そして、少しずつ少しずつ、荒くなった息遣いも治まったころ、横で『ポツリッ、ポツリッ』と畳に何やら落ちる音がした。

辿ってみると、栄一の涙だった。

七海　「おじさんどうしたの？何か悪いこと言った？」

栄一は、首を横に振り語り始めた。

栄一　「拓海のこと思いだいてのお。(思い出してね) 拓海が会社の (拓海の会社の) ここでの開発の説明会の時にのお。(時にね) おらはここに残って、いろんげな (色んな) 世話焼いて、さも犠牲者のように生きちょうことを、ここから離れて生きとる拓海に言ってしまったがあ。(言ってしまった) 拓海にのお、『お前にそぎゃんこと何がわかーか (何が分かるのか)』って。だも (でも)、拓海たちのここでしようとしとーこと (しようとすること) は、わしが犠牲と思っとることと何も変わらん事だっただがあ。ただただ拓海やちゃ (拓海たちは)、『地域貢献していきたい。地域を守っていきたい。』と常がね言ってござった。(言ってらっしゃった) 七海が言う【犠牲】か【貢献】かわからんが、やっとることは一緒でも、気持が違うわのお。想いが違うわのお。それで、人に与える影響は全く違ってくーけん。(違ってくるから) 七海、お前は、えら (立派に) なったのお。」

栄一は、もう一度和に怒鳴った。

栄一　「和よ。お前みたいな、なんになっていーかも (何になっていいのか) まだわからんもんは、社会に出てくーな。(出てくるな) まだ、学生でおれ (学生でいろ)！」

シンと静まり返っている時、戸が開き、啓介が入ってきた。

啓介　「おっきゃん声 (大きな声) で外にまで聞こえーがなあ。おらは耳が悪て (悪くて) 何いっちょーか (何言っているのか) わからんが、この辺でもう止めらっ

しゃい。（止めよう）どっちがどげだい（どっちが良いのか悪いのか）わかーへんだだもが（解らないが）、二対一はいけまいがあ。（いけないだろう）はや、もう降りらこい。（下に降りよう）」

みんな下に降りて、居間に座った。

景子に連れられ里美は夕御飯の材料の買い出しに出かけていた。景子の思いやりだった。

正子は、魚やアワビをさばいていた。

啓介　「和、お前もビールくらい飲めーだらがあ。（飲めるだろう？）」

和　「おれ？まだ高校生だよ。」

啓介　「しゃん、担任の先生、こぎゃンとこまでこーへんわなー。（ここまでは来られないだろう）」

栄一　「おやっさん、何いっちょーかい。（何を言ってるのか、いけないでしょう）七海はのんててや？（飲めるだろう？）」

七海　「うん！」

啓介は、七海が飲めることを知り、ポケットから五千円を取りだし、栄一に買ってくるよう命じた。

栄一は、「やっぱ、ビールないんかい。」と捨て台詞を吐き買いに出かけた。

みんな、大騒ぎをしながら楽しく食事をした。

和も、ほんの少しほほ笑みながら。

八時を過ぎると、いつもより二、三杯多く焼酎をよばれた（焼酎を飲んだ）啓介は、「先にあ

がーけん（先に二階で寝るけど）、おまえやつ（お前たち）、しゃんとやってがっしゃいよ。（しっかり飲めよ）」と、先に寝床に着いた。

それから栄一は、みんなの前でもう一度和に言い聞かせた。

栄一　「大学で、もうちょんぼ（もう少し）自分を見つめ直せや。いろんげな（色々な）辛いこともわかーだどもが（よくわかるんだが）、背向けて逃げーなや（逃げるな）。真正面から向きあわっしゃい。せからのお（それからな）、もうちょっこし人とかかわって、人と支え合って、いろんげな苦労をしてみらっしゃい。時間もたっぷりあーけん。（あるから）野球も、もうちょっとなかい（もう少しの間）続けれや。」

栄一は、和にしみじみと言い聞かせた。

景子も、「栄次のだあずだてて（馬鹿な栄次だって）大学に行っちょーけん（行っているから）、和だって行けーわね。（行けるわよ）」と笑いながら諭した。その後、「お金は、そげんそげん心配したこともないよ。（心配しすぎる必要まではない）みんな奨学金借りちょーけん。（借りているから）」と金銭面の話もしてくれた時、里美と七海は「そう？」という顔をして聞き耳を立てた。

お金の話が聞けたことは、里美と七海に、そして和にとっても、とても収穫だった。

しかし和はまだ「大学に行きたい」と、この場では言い出せなかった。

翌朝、八時前に和が起きると、里美と七海はすでに起きていた。
和　「じいちゃんは？」
七海　『朝のうちほどでも』って、六時前に、かなぎに出掛けられたよ。おばあちゃんも、『ちょっとバフンウニ獲りに行く』って一時間くらい前に出掛けられた。」
正子は、親しい地元の海産物屋から頼まれたときにだけ、バフンウニを獲りに行き、帰って身を取りだし奇麗に洗浄して納めている。
今日は、風もなく、とても穏やかな凪の日だった。
和は、ご飯を食べてから、少しあたりを散歩しに集落の坂をおり、石積み防波堤に辿りつきたたずんだ。
波は全くなく、水面は鏡のように青空に浮かぶ入道雲を映している。
啓介の船が、少しずつ近づいてきた。
そこへ、右手に大きなチューブの浮き輪を、左手にはたくさんのバフンウニが入った網を持った正子が、和の姿を見て近寄ってきた。
正子　「波がないけん（ないから）、こぎゃんとこまで（こんなところまで船が）寄ってきたわ。」
興味深そうに啓介の漁の風景を見ていると、正子は「ほいしょ」と、防波堤から海にめがけて浮き輪を投げだした。
浮き輪の内側には網が備えられ、中には水中眼鏡が入っている。
その後正子は、浮き輪の様子をじーっと不思議そうに見ている和の後ろにそーっと近付き、

「よいしょっ」と和の背中を押し、和は頭から海へ飛び込んだ。
和は、後ろを振り向くと、正子が「ひゃっひゃっひゃっ」と笑って見ていた。
正子から浮き輪の中に水中眼鏡があることを知らされた和は、すぐに眼鏡をつけた。

久しぶりに泳ぐ十六島の海。
潜ってみると、そこはまるで草原のように海藻が生い茂り、ゆらゆらとたなびいている。
緑にもたくさんの色があった。
透きとおる海中は、何十メートルも先まで霞むこともない。
太陽の光が水面を突き刺し、啓介の体重で少しだけ動く船の淵をそって海中を照らす。
和はあまりの美しさに身震いがした。

和は浮き上がり、啓介に「じいちゃーん」と手を振り、「じいちゃん、すげーきれいだ。」と大きな声で啓介に言うと。
啓介　「あたーまいだわや（当たり前だ）、わやつがいっと守っとーわな。（俺らが一生懸命守っているんだ）」と自慢げに話した。
そして、啓介のかなぎの様子をうつぶせに浮きながらしばらく見た。

一発でアワビやサザエをつかみ獲る銛。
外敵のヒトデやタコも一撃で仕留める。

「すげえー、じいちゃん、すげえー」、と啓介の漁に感動した和は、声を大にした。
すると啓介は、獲ったアワビの殻を取り、和の近くに「ほいしょ、クロ（クロアワビ）は香りがえーけんやってまっしゃい。（とてもいい味だから食べてみろ）」と投げつけた。
和はあわてて水中眼鏡をつけ、ひらひらと沈むアワビを取り、浮きあがって水中眼鏡をはずしてアワビにかじりついた。
シコシコとした歯ごたえに、口の中で広がる磯の香り。
和は食べながら、じいちゃんの研ぎすまされた技に感服し、そして昨日の自分の言動を恥じ、心の底から啓介に謝った。
和は「ごめんなさい。」と小さく口にし、涙があふれ出た。
その姿を近くで見ていた啓介は、和の言葉が聞こえないまま和の目を見てこう言った。
啓介　「和、お前水中眼鏡つけらんと（つけないと）目が真っ赤っかだがや。（ひどく真っ赤だよ）」
啓介はそう言い、真っ黒な顔をしわくちゃにして笑った。
和は、石積み防波堤に上がる手前で、昔ボッカ（カサゴ）釣りをしていた穴んぽ（岩と岩との隙間）を水中眼鏡で覗きこみ、今も住みかにしているボッカを見つけて嬉しんだ。
和は啓介の家に帰ると、舞と出雲のショッピングモールに行く準備を急ぎ、約束したバスに乗り込んだ。
バスには、老夫婦一組だけが肩を並べて座っており、その斜め後方に和は座った。

十六島バス停をバスが出発すると、【小学校前】で舞は乗り込んできて、和の隣に座った。
二十九人乗りのバスに、仲良く二組が隣同士で座っている。
なんとも微笑ましく、嬉しかった。
しかも、約束もしていないのに、色違いのメジャーリーグの帽子をかぶっているなんて。
ショッピングモールでは、まるで恋人同士のようにゲームセンターではしゃぎ、プリクラでたくさん写真を撮った。舞は和が想像する以上に近付き、そして変顔もさせた。
喫茶店に入る途中、すれちがう舞の知り合いの娘が「マジあれ、舞じゃん。男の子と歩いてる。」、「えっ、舞、イケメン」って左手で口を覆いながらも漏れる声が聞こえる。
和は、素知らぬ顔で歩いた。歩き慣れていた。
和は、長身で、坊主頭ではあるが端正な顔立ちであり、最近相当増えてきた高校野球女子から結構写真を撮られたり、追っかけられたりしており、すかし方もお手の物だった。
しかし、知り合いとすれちがう度、自分の左手にわざと抱きつきピースして答える舞が、和はとても嬉しく、そして愛らしく思えた。
あっという間に時間はたち、帰りの電車に乗り、そしてバスに乗り換え家路についた。
「明日、この辺りをぶらぶらしよう。」と約束をして、バスを降りる舞を見送った。
翌朝、和と舞は小学校の前で待ち合わせをし、そろっと小学校を覗いてみると、玄関のカギが開いていおり、舞は「おはようございまーす。誰かおられますか？」と大きな声で尋ねた。
すると教員室から「はーい。」と、和が過ごした五年生と六年生の少しの間の担任が出てきた。
和　「先生。」

先生　「舞ちゃん、この方もしかして和？」
舞　「先生、そうです。」
先生　「あらあ、いいお兄さんになられてえー。」
先生は、この春からこの小学校へ教頭になって戻ってこられた。
先生に連れられ、かつて過ごした教室に入り、自分らが座っていた席に腰かけた。
そして、近くで獲れる魚介類や珍しい海洋生物を飼育していた場所へ案内された。
今も変わらず、生徒たちにより飼育されている。
そして、近くの廊下には海洋生物などの飼育記録が展示されている。
タイムスリップしたように懐かしい。
先生に聞くと、スポーツ少年団は、今日は練習試合に出かけているらしい。
和と舞は、先生と別れ校庭に出て、体育館の横の出入り口の階段に並んで座った。
お互いの進路の話になって、和は舞に聞いた。
和　「舞、保育士になりたいんだ。」
舞　「そう、勉強頑張って地元の県立大学にいければと思っている。和は？」
和　「うん。まだ何になりたいか解らない。だから、進学しようと思っている。」
舞　「野球は続けるでしょ？」
和　「うん。続ける。」
和は、はじめて進学したい気持ちを口に出した。

互いに交換したウェブをまだ大事に使っていることも話し、この六年間にあったことなど会話が弾むと、舞はさりげなく和に質問した。

舞　「和って、彼女いるの？」

和　「相変わらず、直球だなぁ。」

舞　「いるの？」

和　「いないよ。舞はいるの？」

舞　「好きな人はいるんだけと、付き合えてない。」

和　「ふーん。」

こういう話に鈍感な和は、これ以上舞に聞くことを終えた。

帰る時間が近づき、二人はたちあがり縦にならんで校庭を出ようとした時、舞は和の背中におでこを押し当て、後ろから和を抱きしめた。

「今度いつ会える？」と聞く舞に、和は立ち止りながらも答えることができなかった。

震える舞のおでこ。

たぶん泣いているような気がした。

和は、後ろにいる舞にそっと両手を添えた。

和と里美と七海の三人を乗せたバスが、啓介、正子と栄一、景子に見送られ十六島バス停を出発した。

校庭の横を通り過ぎる時、舞が作り笑顔かもしれないが、両手を振って見送ってくれた。
一畑電車に乗り、出雲発やくもに乗り換え、岡山駅で新幹線に乗り継ぎ東京へ帰った。
道中、里美と七海は、和の口から『大学に行かせて欲しい。』と聞き出した。
里美には、拓海が導いてくれたように思えた。
そして家に帰ると、七海は、『和の大学の入学の前祝いと、本当は七回忌に啓介と東京に行かないといけないところ代わりに十六島に帰ってきてくれたお礼』という名目で正子からもらった茶封筒を里美に渡した。
早速封を開けると、中には五十万円という大金が入っている。
里美はあわてて正子に電話した。
里美　「お母さん、こんなことしていただいたらいけません。」
正子　「栄次の時もしちょーけん。(してるから) いーけんね。(いいからね)」
里美は、電話で正子に聞こえているにもかかわらず、涙した。そして、電話を和に代わった。
和　「本当にごめんなさい。僕、頑張る。じいちゃんにも伝えてください。」
ようやく、和の心が固まった。

監督と担任の先生との四者面談で、和は大学への進学希望を伝えた。
そして、野球も続けたいと、監督に意思を伝えた。
監督から、「それじゃあ、俺と進路先のことを詰めていこう。」と言葉をもらった。

和は家に帰って、七海の顔色をうかがいながら面談のことを申し訳なさそうに話した。
七海　「『ごめんなさい』じゃなくて、『ありがとう』でしょ。言葉も使い方よ。」
七海は、和に笑顔でたしなめた。
後日、和は監督から「話がある。監督室に来い。」と呼ばれた。
監督室に行くと、小田も呼ばれていた。
監督　「俺の恩師が現在監督をしていらっしゃる大学、東京産業大学の練習会に行って来い。」
和と小田はびっくりした。東京産業大学は、国内大学野球屈指の帝都リーグに属し、しかも、アマチュア野球界で名だたる飯塚監督率い、就任五年目の二〇一二年に一部リーグに昇格した実力校である。
修実高校からは、一昨年にキャプテンで四番バッターだった林先輩が入学している。
それから、練習会までの一週間、和と小田はみっちりと練習に励んだ。

練習会当日
和と小田は、他の高校生よりも早く東京産業大学のグラウンドに着き、マネージャーに挨拶した。
高校生が揃うまで、二人は練習を見学した。
二人は、いささかびっくりした。

大学野球は、長髪でスポーツサングラスをかけ、足首まであるパンツをはき、リストバンドをつけているものだと思っていたが、ここは、身なりは修実高校とほとんど変わらず、坊主頭に名前付きの練習着を着て、オーバーストッキングと言う足元だ。

ただ、帽子とスパイクだけはこの大学特注のものだった。

飯塚監督も選手と全く同じ身なりである。

ランニングから帰ってきた林先輩がやって来ると、声をかけてくれた。

その後、林先輩は飯塚監督に、「こいつら、まあまあ野球の道学んできてますから。」と話しかけると、飯塚監督は、「そうかあ。」と一言だけ返した。

練習会が始まると、投手、捕手、野手はそれぞれ分かれて、大学生に交じって指導を受けた。

予想以上にハードな練習で、高校生は大学生より早く練習を終了し解散となった。

大学でもらった書類の中に、野球部員が主に在籍する学部の資料が入っており、和は興味深く家で見返し、その上インターネットでも大学について調べた。そして、『この大学の生物資源学部で第一次産業のことについて学びたい』と希望するようになった。

和は、里美と七海に「入れるなら東京産業大学に進みたい。」と素直に伝えた。

里美も七海も応援してくれた。

小田とも話すと、小田はこう言った。

小田　「おれん家（ち）、お茶農家で、、、。出来れば農業の教師になりたい。だから、東京産業大学に入れるんなら生物資源学部に入り教員免許を取得したい。お前は？」

和　「俺まだ何になっていいかわからないけど、第一次産業のこと勉強したいから、朗と一緒で生物資源学部に行きたい。」
小田　「おー、そりゃ一緒にいければいいなあ。」
和　「そーだなあ。」
後日、二人は再び長谷川監督に呼ばれ、東京産業大学進学の意思を聞かれ、「行きたいです。」と即答した。
そして、数日後、推薦入試の資料が、長谷川監督から二人に渡された。
十一月に東京産業大学の推薦入試を受験し、二週間後、二人の元にめでたく合格通知が届いた。
里美と七海は手放しで喜んだ。
しかし、和は里美と七海の前で、お金のことで迷惑をかける気持ちから手放しで喜べず、せいぜい『はにかみ笑い』をする程度であった。
里美は、十六島の啓介、正子、栄一と景子にも伝えた。
和は、電話を代わり皆に「お陰さまで、行かせてもらうことになりました。」と礼を述べた。
そして、数ヶ月前すでに志望校に合格していた舞にもメールで連絡をすると、その後、長々とした文章を何度も何度も送りあった。

年が明けしばらくすると、【一月三十一日野球部寮入寮、二月一日から春季練習開始】の知らせが自宅に来た。
和も里美も予想だにしなかった。
こんなに早くに、家を出ることになるなんて、、。
しかも、わずか一時間を切る移動距離の学生も入寮だなんて、、。

巣立ちの朝。
入寮の知らせが届くと、和はマネージャーに寮の様子を伺い、里美と入寮のための準備に追われた。
寝具にタオル、洗面道具に薬箱。
寂しい、と考える余裕もなく、むしろ二人にとって良かったかもしれない。
里美は、和が家を出るときに伝えることを少しずつメモをするようにしていた。

栄養をしっかりとる
寝冷えをしないように
アイシングを面倒くさがらずに
足首と肩甲骨の柔軟を続ける
爪が割れないように手入れする

乾燥したら加湿器をすぐつける
水分補給をこまめに

すべて和の体のケアのことだった。

野球道具以外の荷物は、前日運送会社に引き渡し、あっという間に巣立ちの朝を迎えた。
早い時間の食事を終え、和が「じゃあ、行くから。」と里美と七海に告げた時、里美は、エプロンのポケットのメモを取り出すこともなく、ほんの「オフの日には帰ってきなさい。」という言葉ですら言うこともできず、ただ「じゃあね。」と見送ることが精いっぱいだった。
あまりの突然の巣立ちは、泣くことすらできなかった。

和は、小田と大学正門で待ち合わせ、野球部寮に到着した。
この寮は、大学の新しい学生寮が完成した際に、古い学生寮を野球部寮として使用することとなり、野球部のほぼ全部員が入寮する。一、二回生は二人部屋で、三回生と四回生は、一人が退部したり、マネージャーや学生コーチという役員になって役員室へ引っ越したとき一人部屋となる。

和と小田が野球部寮に入ると、【艱難汝を玉にす】という難しそうな言葉と、何やら呪文のような七文字、の二幅の大きな掛軸が正面に掛けられていた。
この掛け軸は、飯塚監督を慕う書家が、監督就任を記念して、監督の座右の銘を描き寄贈したものらしい。二人は、その掛軸の迫力に圧倒された。
和と小田は、マネージャーに連れられ監督室に行き飯塚監督に挨拶し、自分たちの部屋に案内された。
二人は同室であった。互いに安心した。
それから、二人は大学の練習に加わった。
想像していた以上に厳しく、つらい練習だった。
先輩たちは、自分たちと体が一回りも二回りも大きく、そして、精神状態も自分たちが子供に思えるほど大人だった。
飯塚監督の考え方は、高校野球で実績があろうが、なかろうが関係なく、選手とコミュニケーションを持つ。試合での起用についても、その時の選手の実力や状態でしか評しない。

飯塚監督は、誰よりも早くグラウンドに来て草むしりをし、誰よりも遅くグラウンドを後にする。
口数は少ないが、きちんとした服装をし、両腕を組み仁王立ちして練習を見る姿は、キラリとした存在感がみなぎる。
練習の時間は、朝の練習が五時半集合で二時間程度あり、授業の合間も練習し、夕方五時くらいからまた練習という、平日でも毎日が三部練習である。
土、日曜日、祝日と長期休暇中は、早朝の練習はないが、八時から夕方の六時までの練習である。
和は、小田とともに耐えた。
まだ、背番号は当分ないものと自覚しながらも。
そして、このころから和の心の中に、今までにはなかった感情が宿ってきた。
高校野球までは、自分なりに練習をすれば、或いは学年が上になれば半分くらいはベンチには入れた。それが、大学野球となれば、ベンチ入り出来る割合も少なく、自分が入れる確証も、今のところ自信もない。
今までは、少し目の前の手が届きそうなところにあった目標とする成果が、今は手が届くところにない。そして見当たらない。
しかし、みんな必死で、しかも何やら笑顔できつい練習をこなし、むしろやりがいを持っているようにすら感じる。

『何だろう』
『何でこんなに頑張れるのだろう』
先が見えない。
先輩たちはどうやって強い心を持ち、どう自分と向き合っているのだろう。
そう思え、悩むようになった。
小田と寝食を共にし、たくさん互いの感情や意見をぶつけ合うようになった。
はじめて本音で話し合える友ができ、よく夜が更けるまで語り合った。
大きな声で笑ったり、涙を流すことはまだなかったが、、、。
二人はこんな話をした。
いつか辞めるだろう、野球は。しかし、大学で途中で辞めることについてどうなんだろう。
ベンチに入り、スタメンで活躍する者が是で、頑張っているけどベンチに入れなければ非なのか。
熟慮したあげく、自分との折り合いがつけば辞めることもいたしかたないのではないか、、、。
そして、ベンチ入り云々ではなく、自分の評価は自分でしかわからない。
ある日、二人はこの結論に達した。
二月の後半になると、ベンチ入りの候補者がキャンプに行き、三月上旬には他大学や社会人チームとのオープン戦に参加する。
そして、間もなく背番号が渡され、三年生の背番号のない選手の中から、新しくチームや選手のサポート役に回るマネージャーや学生コーチという役員への就任が監督から宣告される。

また、退部する選手が多いのもこの時期だ。
まだ、大学生にもなっていない和と小田にとって、非常に考えさせられる時期でもあった。
二人はようやく入学式を迎えた。
その日の練習は早めに終わり、林先輩が『入学おめでとう』と書かれたデコレーションケーキを持ってきてくれた。
林先輩は高校時代から、いかつい顔をし、ガタイのいい身体をしているが、茶目っ気のある言動や行動をするという愛くるしい部分を持つ人物でもあった。
ケーキは三人で分けて食べた。
食べ終わってから二人は、林先輩に『先が見えない』と悩んでいることに対してのアドバイスをお願いした。

林　「俺が入部した時、主将の先輩が教えてくれてな。その先輩は、きつい練習も、みんながしんどくても、全く苦にもせず顔にも出さない方で、『脳みそまで筋肉でできてるんじゃないか』と思うくらいな人で、偉大な主将だった。」
「俺、主将じゃないけどこの先聞くか？」

二人　「えっ、まあ、、、。」

林　「まあ？」

二人　「いや、聞きます。」

林　「そうかあ、それじゃ話してやるかあ。」

「先輩に『おまえの高校時代に抱いていた目標は何？』って聞かれて、『甲子園行くことです』って答えたら、『で？』って言われたのよ。おれは、『へっ』って思ったんだ。」

「それから次は、『今の目標は何だ？』と聞かれて、『早くベンチに入って、スタメン取って試合に出たいです』って言ったら、また、『で？』って言うのよ。こっちもちょっとカッっとなって、『一部で優勝することです』って言ったら、また、『で？』って言うのょ。おれ、『やっぱこの人、脳みそ筋肉だわ』と確信したんょ。」

「でも、次の瞬間先輩がこう言ったのよ。『お前のそれ、手段、方法やろ！』って。その次に、『お前何になりたいの？それで何がしたいの？』って言うわけよ。そいで、『お前、目標、目的と、手段、方法をはき違えてるぞ！』って言うわけよ。」

林の次のセリフが出てくるのにかなり間が空いた。

何やら次の言葉を考えているようだった。

二人はてっきり『目から鱗かな』って思った瞬間だった。

林　「俺ホントそん時、迷路に突き落とされたようになった。」

二人はその時、『迷路に突き落とされた、、。どこから？この人こそ筋肉じゃないか』って思えてしょうがなかった。

どうやら林先輩の話を聞けば、余計にその時、訳が分からなくなったらしい。

林先輩は手を前で組み、目をつぶり、二、三度頷いた後「今思えばありがたいお言葉だったな、と思ってね」と言い、再び二、三度頷き「まあ、大学は時間たっぷりあるから、自分と向き合ってな！」とはじめて自分の言葉で二人にアドバイスし、「ほんじゃなっ」と立ち上がり、部屋を出て行った。

二人には、大先輩のアドバイスが、この時少し理解できた。

和は、栄一に叱られた時のことを思い出した。

『そうでなんになりたいや。なんがしたいや』

『和よ。お前みたいな、なんになっていーかもまだわからんもんは、社会に出てくーな。まだ、学生でおれ！』

和の心に、栄一の説教が再び染み渡った。

春季リーグ戦が始まった。

和は、小田とともに、野球部統一のシャツとスラックス姿で応援した。

スクールカラーを基調とする伝統ある大学旗がたなびく。

躍動感ある応援団にチアガール。

高校野球より更に増して感じる一体感。

日ごろきつい練習を共にする仲間。
寮でも四六時中共に生活をする仲間。
これが大学野球か、、、。と感慨深い。
一日の練習は長い。
しかし、振り返ると月日が経つのは早い。
春季リーグ戦が終わり、夏を越え、そして秋季リーグ戦が始まり、秋が深まるころリーグ戦が終了する。
そしてまた、長い冬季練習が始まる。
クリスマスが過ぎたころ、学校の授業も終わり、十日間の年末年始の連続オフとなり、部員は皆それぞれに帰省する。
和も、家に帰った。
結局、月に一度くらいしかオフの日もなく、まとまった休みは初めてだった。
家に帰って、練習の話、寮での生活、とても充実していたことを里美と七海に話した。

二月になると、初々しい新入生が野球部寮に入寮してきてた。
恥じらいがある新入生を見ると、少し幼く見えた。
自分たちも、そうだったのか、、、。と顧みた。
和は、練習にもついていけるようになり、寮の生活にも随分慣れた。

『この大学に入れたこと、とてもよかった』と振り返った。
飯塚監督の指導は、緊張感があるとともにメリハリがある。
そして、とにかく熱い想いを持って指導される。
この一年で、試合形式の練習の中でこっぴどく叱られ、今後とも忘れられないことがある。

ランナーが三塁にいて、捕手の前に転がった打球の処理方法の指導だった。
捕手が素手で捕って、ファーストに送球した時である。
派手なプレーを嫌う監督がすぐさま練習を止め、主将に全員を集めるよう促した。
監督　「今のプレー、ミットと両手で捕ってコンマ何秒違う。それで一塁セーフとなるのか。」
「じゃあ、例えば一塁が間にあいそうになく、ホームに帰って来る三塁ランナーとのタッグプレーがあったらどうする。片手でタッグにいけるのか。九回裏、ツーアウト満塁というサヨナラがあるシーンで素手で捕りに行けるのか。『あーであれば、こーする』というような選択肢はない。こういうところは単純なプレーを心掛けろ。」
監督の哲学とも思えた。

次、三振、凡打と続き、それら選手がうなだれ下を向いている時だった。

監督　「なぜ下を向く。切り替える精神力を持て。三割バッターは、二割五分バッターの二割増しだ。しかし、逆を考えてみろ。七割の打ち損じと七割五分の打ち損じだ。その差はなんだ。くよくよするな。次のこと考えろ。お前ら東京産業大学の選手は、どこの大学よりも練習やっとるだろ。自信を持て。前の打席は終わったことだ。つまらん顔して、他の選手に与える影響はでかいんだ。林を見てみろ。いっつも、ニコニコしやがって。」

監督は、林先輩のいつも、いつの時でも明るいキャラクターに好意を抱いているようだった。

その次は、ランナー一塁、右中間への大きな打球、三塁コーチャーがランナーを回すも、ランナーが打球確認のため、ほんの僅かちらっと後ろを振り向いた時だった。

監督　「何でそこで打球を見る。そう言う走塁がぎりぎりのプレーで得点にならないんだ。コーチャーを疑っているのか。何を迷っている。例えアウトになっても誰も責めない。ワンプレーの合間に振り向くな。前へ。」

監督が、ランニングを多くさせる理由も、前を向く練習ということらしい。

送りバンドの練習の時だった。

ある選手が、両足を前後にセーフティーバンドのようなしぐさをした時だった。

監督　「誰も、お前が一塁セーフになっても、嬉しくない。そんなこと期待していない。

バンドのサインでお前に期待するのは、ランナーを送ることだけだ。自分が生きようとするエゴ、邪念振り払え。本当に難しい球を抛(ほう)られた時、そんなんで対応できるか。」

これらは監督独自の根深い考え方だ。

他にもたくさんの指導を受けた。

監督は指導の最後に、「野球は得点を競う競技だ。残塁数や安打数を競う競技じゃない。何がチームのためだ。頭じゃなく、腹で考えてプレーしろ。」とよく話す。

こう言った指導の時は、監督はホームベース付近で話し、試合形式とは違う練習をしている選手も整列して聞く。一時間、いや二時間にもなることもある。

監督の指導は、途中ボールを捕る真似をしたり、バンドのしぐさをしたり、大声となったり、諭すような声のトーンとなったり。

そして監督の指導を受けた後、必ず全員一斉に約一時間ぐらいのグラウンドランニングをしてから、それぞれの練習に戻る。

苦しいという想いをとっくに通り越し、ランニングを終えたら皆笑っていた。

和も、飯塚監督の指導を腹で考え、胸に刻むことができるようになってきた。

二回生の春季リーグ戦も、和はベンチに入ることはなかった。
もちろん悔しい気持ちはあったが、今の実力では入れないことぐらい十分認識していた。
仲間らと行う応援も、まんざら嫌な想いをするわけではない。
むしろ、精いっぱい応援したくなる。
東京産業大学野球部の一員という誇りを持って。
和は、小田とともに、練習が終わってからやオフの日もウェイトに励んだり、体幹トレーニングをしたり、日々自らの日課に取り組んでいた。
夏となり、和もBチームではあったが、オープン戦に少しずつ投げさせてもらえるようになった。
八月の終わり、七海から電話がかかってきた。
七海　「おーい。生きとるかあ？あのな、和の小学校の同級生から、【卒業生成人の集い】の案内の葉書があなたにも来たよ。それでな、一月二日らしく、十六島久しく行ってないから、母さんと行こうかって決めてな。もう格安チケット取ったから、そのつもりで。じゃあね。」
和　「あっ、はい、、、。」
相変わらず有無を言わせない、一方的な電話だった。
出雲の成人式は、毎年成人の日前後の休日に行い、中学校を単位で祝宴を開く。
遠方で暮らしている人は、正月にも帰って、また、成人式に帰ることができない場合がある。
この小学校では、そうした人が集まり懐かしむ場として、正月にも祝宴を企画する。

そして、今回和にもお誘いの案内が届いた。
早速和は、舞に『俺、出てもいいかなあ？』とメールをした。
数分もたたないうちに、舞から『命令、必ず出席せよ！そして、私の地元保育園への就職を祝って！』と返信が戻ってきた。
『舞、保育士さんかぁ、、。』
和は、とても嬉しく喜んだ。
そして和は、成人の集いに参加できる喜びを糧に練習に励んだ。

ようやく、正月休みとなった。
そして、いよいよ大晦日。羽田発出雲行き二便の飛行機で十六島に向かった。
空港には、栄一が迎えに来てくれた。
車に乗ると和はすぐに、心に残っていた栄一との前回の話のことについてこう話した。
和　「おじさん、この前来た時、あんなこと言ってごめんなさい。」
栄一　「何のことだったかいのお？（何のことだっただろう？）」
栄一は、知らぬふりをしてくれた。
栄一　「和、やっちょーかや？」
和は、何のことか解らなかったが、とりあえず「頑張ってます。」と答えた。
啓介と正子は、栄一からの「もう五分くらいでつくから。」と言う連絡を受けると、車が到

着するのを外で待っていた。
車が止まるとすぐに、荷物を全て二人が持ち「早こと入らっしゃい、入らっしゃい。（早く、入りなさい。入りなさい。）」と自分たちの身体は冷え切っているのにもかかわらず、三人を思いやってくれた。いつものことだが新鮮に思えてしょうがない。
たくさん大学の話をした。
まだ、なかなかベンチに入れないが頑張っていることを話した。
「大学に入れてよかったです。色々勉強になります。」とつくづく語った。
年が明けた。
舞と約束のバスに乗り、一畑電車で出雲大社へ参拝した。
たくさんの人だった。
和はこの前と同様、出雲のショッピングモールへ連れて行かれ、プリクラでたくさんの写真を撮った。
帰りの道中、明日の【卒業生成人の集い】に和が出席することは、幹事と舞以外の人は知っていなく、和はスペシャルゲストであることを知らされた。
『坊主頭を笑われるかなあ』と和はいささか心配だったが、舞はそう言う昔のままの和を皆に会わせたかった。
卒業生成人の集いの当日
和と舞は、栄一に会場の居酒屋まで送ってもらい、和は合図があるまで少し外で隠れていた。
皆が、まちまちに集まってきた。

そして祝宴が始まった。

幹事　「上座は担任の先生どうぞ、次の席は空けておいてもらって、先生の隣に僕が座って、空いてる席の隣は学級委員だった舞ね。その他の席はくじを引いてね。」

「はい、みんな席に着きましたかあ？それじゃあ始めます。」

担任の先生を含めて十六人分の膳をロの字に並べた席に、皆が着いた。

幹事がひと通りのあいさつを終えたところで。

幹事　「それでは、サプライズです。本日のスペシャルゲストです。」

みなが、「誰？誰？」、「校長先生？」、「担任の先生よりシモチャだよ」とまちまち話している時、幹事が「どうぞご入場ー」と合図し、和が部屋に入った。

和が入ったとたん、女性陣から「キャーッ」という歓声がこだました。

和は、幹事から指示されるとおり席に着いた。

担任の先生の祝辞をいただいた後、幹事の発声で開宴した。

程よく皆の話が弾んだころ、幹事から『近況報告と将来の希望若しくは夢』を一人ずつ述べるよう話があった。

皆、まじめに近況を述べたり、面白おかしく将来の夢を語ったり、楽しかった。

和の前で、地元の消防署に勤務する男の子の順番となった。

男の子　「僕は今、消防士をしています。将来の夢は、だいたい女子が言うセリフかもしれませんが、早く結婚して、たくさん子供作って、少子化や消防団員が少ないといったこの地域の課題に取り組んで、行く行くは、、、。」

一同　「おっ、行く行くは！」
この男の子は、酒が入るといつも笑わせるらしく、皆が揃って合いの手を入れた。
男の子　「市長選に出ます。」
一同　「よっしゃー。」
皆こなれているようで、両手を突き上げた。
そして、いつも愉快に茶化すもう一人の男の子が。
男の子　「おまえのその燃える闘志、それほどは消すなよな。」
そう言った瞬間、再び皆は両手を突き上げ、茶化した男の子に「うまい！」、「うまい！」と指をさし、それぞれハイタッチをした。
いよいよ和の順番となった。
『坊主頭を心配するより、こっちの心配をすればよかった』とつくづく思っても、もう遅かった。
何を話そうかまとまらないまま、今の心の内を少しだけ、こうさらけ出した。
和　「僕はまだ野球を続けています。将来何になっていいのか、何がしたいのか、正直まだわかりません。今、とても野球がしんどくて、精神的にもつらいんですが、早く試合で投げれるようになり、チームのために貢献したいと思っています。」
一緒にスポーツ少年団で野球をしていた男の子が言った。

男の子　「頑張らっしゃいよ。（頑張れよ）おらやつんホープだけんなあ。（僕たちのホープだからな）」

皆が拍手してくれた。とりあえず助かった。

幹事　「それではラスト、締めは。学級委員の舞です。それではどうぞ。」

何を話すのか、和は興味津々だった。

舞　「地元で、保育園の先生になります。」

「将来の夢は、漠然としたことなんですが」と舞は前置きしたうえでこう続けた。

舞　「『あーしとけばよかった。こーしとけばよかった』と、後で後悔しないように、そして時を大切に、人生を送りたいと思います。」

一瞬、シーンという空気となった。

しかし次の瞬間、先生が手をたたきだすと、割れんばかりの大きな拍手が沸き起こった。

二次会にも参加し、とても楽しかった。ただ、和は、今の自分を少し焦った。

帰る日の朝、舞も空港まで見送りにきてくれた。

舞　「春はまだいけれん(行けない)けど、秋は見に行くけん。（行くから）頑張ってね。」

和　「あー。そっちも仕事始まるけど、頑張ってね。」

舞　「また、メールするね。」

和　「うん。」

東京に帰り、家で二泊してから寮に帰った。
そして、明日からの練習に備え、小田とともに自主トレを行った。
一月の終わりに、また、初々しい新入生が入って来ると、もうすぐ三回生になることを実感する。
二月の後半になって、和はキャンプ行きのメンバーに選ばれたが、小田は選ばれなかった。
いつも二人で頑張っていた小田が選ばれなかったことは、和にとっても残念でならなかった。
しかし、キャンプへ行く早朝、小田は「和、頑張って来いよ」と右手で小さなガッツポーズを作りながら励ましてくれた。
『必ず』。和は、心に誓いキャンプ中、誰よりもたくさん動いた。
十日間のキャンプを終え、部屋に帰ると小田の姿はなかった。
一時間後小田が部屋に帰って来ると、その場で座りこんだ。
そして、下を向き両手で顔を押え泣きだした。
和　「朗、どうした？何かあった？」
小田　「監督室に呼ばれて、、。『学生コーチになってくれ』と言われた。」
和は言葉を失った。
高校から一緒に頑張って、同室で生活を共にした親友が、、、。
『何かの間違いであってほしい』そう思った時。
小田　「現状から言って今はなかなか出番は難しいと思っていた。ただ、四回生の秋には入りたかった。それを目指していた。」

和は、そっと小田の右肩に手をやり、下を向いた。その時。
小田　「『しょうがない、サポート役に回る』と明日になれば切り替える。和、ごめんな、しょげた話を聞かせちゃって。」
和　「そんなことないよ。」
明日がオフであり、二人は飲みに出た。
少し心の整理がつきかけてきた小田は、「今年は教育実習もあるし、まともに練習できんからなあ。」と呟き、その後「将来高校野球の監督の勉強になるしな。」と話した。
和　「朗、お前なら絶対いい監督になるよ。」
和は小田をそう励ました。
その晩、小田の涙が枯れるまで飲んだ。

次の日、小田は荷物をまとめ始めた。
和は、小田が役員室へ引っ越し、自分は一人部屋になることに気付かなかった。
役員は、特定の選手とばかり接触しないよう、談話室だった部屋を改装した役員室へ引っ越す。そしてその部屋には、監督以外他の者は入ってはいけない。
小田は、荷物を持って行く度、和に今までアドバイスしてきたことを、いちいち話してから、部屋を出て行った。

アイシングを必ずする
足首と肩甲骨の柔軟をかかさない
痛みや違和感があったら必ず休む
その時は必ず言う

母のようだった。
小田が最後の荷物を持って部屋を出るとき、和の方を振り向くことなく、背中を向けたまま、「和、頑張ろうな！」と大きな声で言い、一度だけ大きく深呼吸をし部屋を出て行った。

和は、オープン戦にも出るようになり、少しずつ結果を残し、背番号　21　をもらった。
初めてのベンチ入り。
大差で負けている試合の終盤に初めて登板し、ノーヒットで一回を抑えると、二試合目、三試合目と投球回数が一イニングずつ増えるようになった。
結局、和が先発を任されることはなかったが、中継ぎで投球している回に東京産業大学の打線が繋ぎ大量得点した結果、和は二度も勝ち投手となった。
だが、部屋に帰っても、話を聞いてくれ、喜びや悲しみの感情を共有してくれた小田はいなく、少し部屋で一人ふさぎこむようになっていった。
日が経つにつれ、和は部屋に帰ると、とりあえず寝っ転がる日々を送るようになった。

プラスチック球を天井めがけて投げながら、、。
そして、高校時代からオーバーワークした時、すぐに痛みが出る肘のケアを怠るようになってしまった。

夏季休暇も中盤に差し掛かり、炎天下の中での一日練習も少しずつ終盤を迎えてきた。
オープン戦が始まり、和は先発も任されるようになった。
何とか結果を残し、少しでもチームに貢献したい。
そして、その先にある目標を探したい。
という気持ちと、高校の進路を迷っていたときから三年がたった今、正直、焦りも出てきた。
何になっていいのかもまだ定まっていない。
舞をはじめ小学校の友達は、なりたいものになっているのだが、自分はまだどうしていいか解らない。自分を正当化するわけでもないが、大学の周りの選手も自分と同じように、日々のこと、目先のことで精いっぱいで、将来のことをあまり考えていない。
いざ大学に入って、先輩たちの進路の様子をみても、社会人野球へ進めること、ましてやプロにいけることなんて、大学でほんの一握りであり雲の上の話だ。高校時代に容易く考えていた自分が少し情けなくも感じた。
今、遅くとも三年生の秋季リーグ戦に、注目される選手になっていなければ、そうした道はない。だから、和の将来の道として、チャンスがあるここを頑張るしかないと考えていた。

和は、がむしゃらになっていた。
そして、そのがむしゃらさが功を奏し、少しずつ結果が出てきた。
しかし、身体は十分なケアを怠り、肘は少しずつ悲鳴を上げるようになってきた。
親の前で、強がりを見せてきた和。
大学に入ってやっと少し感情をぶつけ合えるようになった小田との離れ。
三回生になって誰にも肘の状態を素直に打ち明けることができないまま、心を閉ざしていた。

秋季リーグ戦が始まった。
和は、背番号　17　をつけ、二番手投手のローテーションが組まれることとなった。
第一週目、二試合目に先発し和は好投した。被安打五、二失点で見事勝ち投手となった。
第二週目も二試合目に先発したが、この試合、球のキレ自体はあったが相手打線につかまり、五回に降板し初めての敗戦投手となった。
東京産業大学は、それでも三番手投手の活躍で勝利し、勝ち点二（※大学野球は、六つの大学の総当たり戦で、対戦する大学毎の三戦に勝ち越せば勝ち点一を得る。）で、優勝争いができる位置にいた。
そして、第三週目、飯塚監督は和の何らか疲労がある様子に気づき、一勝先勝した時点で二試合目に三番手投手を起用し、よしんば和をこの週に休ませたいと考えた。
ところが結果は、二試合目に逆転負けを喫し、勝負は三試合目に持ち越された。

二試合目が終わり、グラウンドに帰った時、飯塚監督は和に状態を確認した。
監督　「錦織、大丈夫か？」
和　「全く大丈夫です。明日、投げさせてください。」

三試合目当日
舞は、この週に年に一度のリフレッシュ休暇を取得し、友達と東京観光に来ていた。
親には、特に父親が心配するので、友達とは別行動で自分だけ大学野球を見に来ていることは内緒にしていた。
和とのメールのやり取りで、第二試合目の登板を見に昨日球場に足を運んでいたが、結果、本日の第三試合も見ることとなった。
監督　「錦織。大切な試合だ。お前に任せたぞ。」
和　「はい。」
舞は、事前に里美に教わったようにラジオとイヤホンを準備し、内野席の応援席からは少し離れたところで観戦した。
実況　「さあて、東京産業大学、先発の錦織君。本日も球に切れがあり、内外角に投げ分ける素晴らしい投球ですねえ。来シーズンはまさしくエース候補ですね。」
解説　「ここのところ素晴らしい成長ですね。」
実況　「投球練習を終えた錦織君。いつものようにマウンドへ帰るとき、グローブを胸

に何やら唱えてプレートに戻りました。さあ、最終回の始まりです。」
先頭打者が内野エラーで出塁し、ワンアウト後盗塁を決め、本日当たりのない打者が送りバンドをし、ランナー三塁。強打者との勝負のまさにその時であった。

和　「あっ！」

実況　「おっ、どうした、錦織。これは大暴投となって、三塁ランナーはゆっくりとホームイン。錦織君、マウンドでうずくまっています。どうしたのでしょうか。」

解説　「どうやらどこか痛めたみたいですねえ。」

実況　「東京産業大学のベンチから出てきた選手に抱えられ、錦織君無念の交代です。」

舞は、この和の深刻な状況に気付き、すぐさま和のもとへ行った。
そして、病院へついていき、舞は里美に電話した。
診察を終えた医者は、舞に病状をこう話をした。

医者　「あなたは錦織さんのご家族の方ですか。」

舞　「えっ、ええ。」

医者　「ここまで、痛みがないはずがない。今は、薬を投与して痛みはあまりありませんが、明日、オペをします。」

舞　「そんなに悪いのですか。」

医者は、少し間を置き、こう答えた。

医者　「ここまでたちの悪い遊離軟骨はあまり例がない。日常生活には、支障はないように何とかできると思いますが、、。野球となると。一年はかかると思います。」

舞　「えっ。最低一年、、、。大学時代もう無理なんですか？」
医者　「彼次第です。きついリハビリに彼がどう向き合うか。あとは彼次第です。」
舞は、そのことがあまりにも悲しくて、和に病状について話をすることが出来なかった。
手術が始まると、舞は、知らせを受けた里美、七海と待合室で待機した。
里美　「舞ちゃんごめんね。今日もつきあってもらって。せっかく東京に遊びに来たのにね。」
舞　「いや、おばさん。いいんです。でも、、、。おばさんに話していいか、、。」
里美　「どうしたの？」
舞　「ずいぶん前から、うち、和とメールして連絡とり合ってるんです。あんまり、感情的な内容の文面もないし、それから、十六島にきた時も、二人でショッピングモール行って遊んだりしても、心の底から笑ったりすることがないように思えて、、。」
里美は、少し下を向いてからこう話し始めた。
里美　「主人が亡くなって、和もずっと泣きじゃくっていた。当たり前よね、まだ小学生なんだから。私が和と七海の二人を精神的に助けてあげなきゃいけないのに、私ももうショックのあまり精根尽きてしまって、それで、『助けて』と二人に言ってしまったの。それから、和は私を悲しませないように、ずいぶん泣き虫だったはずなのに、泣かないようになって。それから怒ったり、悲しんだり、心

から笑ったりしなくなってしまったの。本当に、私が和をここまで追い詰めてしまったの。」

里美は、しくしくとハンカチで目を覆い泣き始めた。

その時七海が話し始めた。

七海　「確か和が高校二年生のバレンタインデーの日だったかな。舞ちゃんからチョコもらった時。舞ちゃんとメールでやり取りしてたでしょ。その時、食卓に和が携帯電話おいて、、。ちょっと舞ちゃんの画像見えちゃった。ごめんね。それで、和がもう一度部屋から戻ってきたとき、あの子レインボーミラーのスポーツサングラスをかけてたのよ。『これで写真撮ってくれって』。私、『何であんたはこんなんかけてるの』って言って、和のサングラスを外そうとしたら、あの子、目を真っ赤に染めて泣いてたわ。それでも、泣いてないふりを一生懸命してたけどね。そん時和は、相当嬉しかったと思うわ。急に十六島から引っ越ししなきゃいけなく、お別れしないといけなかったし。それから突然舞ちゃんからチョコもらって、、、。あの子まだ、舞ちゃんと交換したウェブ使ってるのよ。」

舞　「うちも、実は、毎日使うトートバッグにつけてます、、、。」

里美　「ホントう。」

七海　「それで和ね。父さんが亡くなってから、内面をさらけ出さなくなったし、感情的にならないようにしてるの。それとなんか、『自分も犠牲の部分を持たなきゃって』いつも考えているようで、、、。」

舞は涙を流し、しゃくりあげながらつぶやいた。

舞　「うち、和を戻したい。変えてあげたい。時間はかかると思うけど、、。うち、和をほっとけなくて、、、。」

手術は、無事終わった。

舞は手術から二日後、再び病院を見舞った。

和は、医者から自分の病状を聞き、野球が当分出来ないことを知っていたが、いつも通り表情を表に出すことなく、また、舞を心配させまいと。

和　「いろんなピッチャーも、肘を痛めては手術してまた投げるんだ。スピードが増すピッチャーもいるんだ。」

舞　「和。当分投げれないって。先生からも言われたでしょ。ってか、なんで痛いって言わなかったの。ずっと痛かったでしょう。それが美談なの。分からない。どうして、弱音を吐かないのよ。」

舞は、和のベッドに泣き崩れた。

和は、ぐっと歯を食いしばりながらも、無表情のまま、何も言わなかった。

そして和は眠りについた。

舞は一度だけ和の手を握り、十六島へ不安を抱えながら帰省した。

和が人の気配を感じ目を覚ますと、静岡の高校で教育実習をしているはずの小田がわざわざ見舞いに来てくれていた。

小田　「おまえ言っただろ。痛みがあったら休めって。必ず言えって。」

和　「、、、、。」

小田　「でもな、もう終わったことだ。これからだ、これから。前を向いていくしかない。来年の秋、必ずマウンドに立て！」

和　「すまん、朗。心配掛けた。」

小田　「治る。治す。必ずだ。」

小田は、教育実習の様子や、野球部の模様を面白おかしく話し帰って行った。

和は先が全く見えなくなった。

他の選手が、社会人野球やプロを目指すあまり、多少の無理を押してがむしゃらに挑む事を否定することはできない。

ただ、和のこのときの野球をがむしゃらにしようとする考えは、野球によって一度就職すれば、その優良企業に永久的にいることができるはず。野球の上達、イコール就職のための糸口、という構想でしかなく、何ら高校時代から成長していない【あさはかな妄想】だった。

そして、心を打ち明けることができず、何になりたいのか、何がしたいのか、と言ったことが見いだせない焦りが募るあまり、自分の心と体のメンテナンスが疎かとなり怪我に至ったこと、自業自得であろう。

構想も妄想も、はかなくも砕け散り、和は自暴自棄になっていった。

和は退院し、できる範囲のリハビリメニューから練習を開始した。
月日は経つが、リハビリや練習への気持ちが乗らないままの和。治療の進捗具合があがるはずもなかった。
年が明け、春となっても、和の心は晴れないままだった。
キャンプに行くこともなく、背番号など到底もらえるわけもない。
しかし和は、野球への意欲と相反(あいはん)し、大学の授業に興味を抱くとともに関心を寄せるようになってきた。
ゼミでは、生物資源学部、生物資源学科の農山漁村地域開発学を専攻した。
このゼミにおいて、地域資源利用論、循環型社会システム論や地方創生論、地域共創論について学ぶとともに、農山漁村地域の公共・公益的役割と、その地域の防災・減災対策などの制度について学習してきた。
そういう学習の中で、和は中山間地域、過疎地域や限界集落の実情を少しずつではあるが知ることができた。
また、【持続可能な社会の形成】と題した、他大学の教授による特別講義をも受講するようになり、知見や知識が広がって行くことに喜びを感じるとともに、『いつか自分がこの対策に関わるるようになりたい』という意思を次第に持つようになってきた。
ただ、この時はまだ、こうした意思と就職を、和は繋ぎ結び付け考えることはできなかった。
四回生になると、学科やゼミに拘わらず、学部内の希望者全てが受講できる筑紫教授の【水

産資源管理学】という講義を受けることにした。
第一回目の講義に出席すると、農学科に籍を置く小田がいた。
和　「おぅ、朗。おまえ、もう単位足りてるんじゃないの？」
小田　「農学科の、この前卒業された先輩が、『この講義絶対面白いし、水産業の勉強だけど農業や林業にも通じるところはたくさんあるから必ず受けた方がいいぞ』って教えてもらったんだ。」
和　「そうか。じゃあ、毎週会って話せるわけだ。」
小田　「そうだなあ。ところで和、お前手抜くんじゃないぞ。俺にはわかるんだ。いつか言ってやろうと思っていた。秋には必ず間に合わせろよ。」
和　「ああ。」
こうして小田と二人でゆっくりと話すことも、小田が学生コーチとなり、寮の部屋を出て行って以来であった。
和は、自分のことを気にかけ、毎週叱咤激励してくれる小田に感謝した。
そして、自分ともう一度向き合い、少しずつではあるがリハビリに、練習に励むようになってきた。
和も小田も【水産資源管理学】という講義に次第に惹かれて行った。
この講義では、水産業における資源管理として、持続的に海洋利用していくために、資源の保全・回復を促す取り組みが必要であり、資源管理の手法として、漁船の隻数など資源に対する漁獲の圧力を制限する【投入量規制】、産卵期を禁漁にしたり網目の大きさを規制するなど

の【技術的規制】、そして漁獲量を制限するといった【産出量規制】があることを知り、更に筑紫教授の教えでは、生物の多様性や生態系を尊び、適正な目標とする資源量を検証したうえで、【種苗生産・放流】という栽培漁業と、いかに両輪で取り組むかが重要である、との話であった。

そして筑紫教授は、そうした資源管理の取り組みと循環型社会の形成や森林保全などの取り組みとの連携の強化について力説した。

講義が進むにつれ、先進的な事例や優れた取り組みを筑紫教授が紹介してくれた。

筑紫　「よし、それでは今日から先進事例について紹介しよう。まずは、出雲地方。そう宍道湖でのヤマトシジミの取り組みだ。そこの漁業者と漁業協同組合は優れた、それこそ私が昔から尊敬してやまない研究機関の指導者のもと、とても素晴らしい資源管理を行っている。適正な目標とする資源量を定め、漁獲量の制限や種苗放流を組み合わせ行ってる。そして、葦の再生と管理に取り組むなどといった漁場の環境保全も行っているんだ。」

和は、自分が子供のころ過ごした出雲のことが、いきなり筑紫教授から紹介されとても喜んだ。

更に筑紫教授はこう続けた。

筑紫　「そればかりじゃない。沿岸漁業においても優れた資源管理に取り組んでいる。【かなぎ漁】という採貝漁業だ。伝馬船に一人乗り、足で巧みに舵を切る。箱メガネを口で押さえて海底を覗き、アワビやサザエを見つけては、約５メート

ル前後で、先が３つに分かれた銛を使い、殻を割ることなく獲るという伝統漁法だ。それはそれは、神業と言える。この地域では、かなぎ漁以外でアワビやサザエを獲ることを禁じているんだ。まさしく、この地域で古くから伝わる【技術的規制】の何物でもない。栽培漁業の種苗放流や外敵のタコやヒトデの駆除にも取り組んでいる。中でも、出雲市の十六島と言うところ。ここの半島の先端に位置する場所には、魚つき保安林と言う森林がある。ここでは、漁民がこぞって森林を保全するという【漁民の森づくり】が実践されている。彼らがしようとしていること。そう資源管理を通した持続可能な地域づくりなんだ。素晴らしい。」

和は、感動した。

そして思った。『じいちゃん、すごい』と。

そして母　里美から言われたことを思いだし、講義が終わってから和は小田を捕まえた。

和　「朗。そう言えば、今度のオフの日の前の晩、空いてるか？」

小田　「おお、空いてるで。」

和　「俺のじいちゃん、前にも話したんだが、さっき授業で紹介あったかなぎの漁師なんだ。それで、じいちゃん都合で当分漁に出れないから、貝などをいつもよりたくさん送ってやるって言ってくれたみたいで。母さんから『朗を誘ってあげたら』って言われたんだ。」

「じゃ、そん時、家で待ってるからな。」

和は、小田とそう約束した。
オフまでは、春季リーグ戦、残すところあと一つの大学との戦いだけだった。
和は講義の受講とともに、四月からリーグ戦の合間をぬっては就職活動に勤しんだ。
しかし、まだ将来何になろうか定まらない和は、面接官に自分を訴えるほどの力量はなく、受けた会社から届くメールの一文は、いつも不採用を示す【お祈りメール】ばかりであった。
そして、和が就職活動の相談をする大学の就職課の職員の紹介で、とある企業へ行った。
数日後、その企業で面接を行った人事課長から、大学へ連絡が入った。
「彼は、意欲が見られない。なんと言っていいのか、、、。そう、【華】がない。」　和は就職課の職員から、人事課長の評価について告げられた。
和は、現実として受け止めるしかなかった。
意欲がでないこと、そして何よりも、人に心の内をさらけ出せないこと。和が一番解っていることだから。
春季リーグ戦は終わった。
東京産業大学は結局五位で、入れ替え戦は免れた。

オフの前日、朗が家にやってきた。
啓介から贈られた海産物は、殻長十一センチくらいのアワビが四杯と十五センチくらいもあるものが二杯、そしてメバルだった。

里美は、四杯のアワビはそれぞれのお刺し身に、大きなアワビは酒蒸しとバター焼きにし、メバルは煮付けて出した。

小田　「遠慮なく来ちゃいました。」

里美　「どうぞかけてくださいな。」

小田　「げっ、すっごい。僕、天然のアワビ初めてなんですよ。和、しかしすごいな、お前のおじいさん。ホント教授が言ってた通り、銛でこんなアワビを傷をつけずに獲るなんて、神業だ。」

和は嬉しかった。

そして里美は、大きなアワビの肝を三杯酢につけて、小田と和に差し出した。

里美　「二人は、肝も食べてね。それじゃあ、どうぞ。」

小田　「へえっー、こんなに大きい肝なんですね。それではいただきまーす。」

小田は目を真丸くして「うーん」としか、はじめは声が出なかったが、その後こう言った。

小田　「苦いけど、すっごく磯の香りでおいしいです。感激しました。」

和も眼を閉じ、肝を口にした。

懐かしさからか、或いはおいしさからか。まるで暗闇のウォータースライダーを頭から滑り落ち、何やら何処かへ誘(いざな)われる感覚を覚えた。

『何だろうこの懐かしさは』、『何処だろうこの先は』、、、。

和は回想した。

そして、口の中の肝を『クチュッ』っと噛んだ瞬間。
思い出した。
正子に背中を押され、十六島の海へ飛び込んだあの時へ。
そう、それは高校三年生の夏の思い出だった。

久しぶりに泳ぐ十六島の海。
潜ってみるとそこはまるで草原のように海藻が生い茂り、ゆらゆらとたなびいている。
緑にもたくさんの色があった。
透きとおる海中は、何十メートルも先まで霞むこともない。
太陽の光が水面を突き刺し、啓介の体重で少しだけ動く船の淵をそって海中を照らす。
和はあまりの美しさに身震いがした。

和が『はぁ、はぁ』と少し荒い息遣いをしていると、「おい、和どうした？」と小田が声をかけ、和は気付いて目を開けた。
和はとても心地よかった。
お酒もみんなで飲み、和は小田に十六島の話を自慢げに熱く語った。

それから二週間後の金曜日に、翌日午後八時のミーティングまで和がオフであることを知った舞が、休みを取って二泊三日で遊びに来てくれた。
和は、八王子駅で舞を迎え、レンタカーを借り、舞の希望通り富士山の麓のレジャーランドへ向かった。

和　「わざわざ休みまで取らせちゃって、ごめんな。」
舞　「いんや（いいのよ）。あっ、そうだ。これ、お父さんが『いつか和に会うとき渡してくれ』って。和のお父さんの、十六島の開発の企画書らしいよ。地元説明会のとき配られたんだって。『これは、和が持っていた方がいいから』って。」
和　「えっ、お父さん知ってんの？僕と会うの。」
舞　「お父さんは知らない。お母さんには言って出た。」
和　「ありがとう。今日、寮に帰ったら読ませてもらう。」

二人は、この前会ってから今までの話をお互いした。
レジャーランドで、舞はすごくはしゃいだ。
嬉しかったのだろう。
そして舞はわざと沢山おどけて見せたりして、和に絡んだ。
夕食も終え、舞が泊まるホテルへ二人は向かった。
舞が泊まるホテルには駐車場がなく、車通りが非常に多い道路に面しているため、和は近くの駐車場に車を止め、歩いてホテルまで舞を送ろうとした。
和が駐車場にバック駐車をしようと、舞のシートのヘッドレストの後ろ側へ手を掛け、後ろ

を見ながら車を操作している時である。
舞　「やったぁー。」
舞は、和の伸ばした手の肩口に飛び込んできた。
和はびっくりし、咄嗟に車を止めた。
次の瞬間、舞が泣きだした。
和　「どうした？舞。」
舞　「和。そんなに頑張らなくていいのよ。もっと弱音を口にしてもいいんだよ。」
和は何も言い返せなかった。
そのまま、舞を抱擁した。
二人は、ホテルのフロントで二人部屋に換えてもらい、部屋に入るとすぐ抱きしめあった。

二人とも初めてだった。

そして和は、舞に腕枕をしてもらい、胸元で涙した。
舞に、小学校の時からの想いをたくさん、たくさん聞いてもらった。
二人は朝、食事などを買いに近くのコンビニに出掛け、そして二日目の観光をすることもなく、一日中部屋で抱きしめあった。
次第に、和の腕枕で舞は気持よさそうに寝入った。
夕方、和がホテルを出る時。

和　「俺もいくらか出すよ。」
舞　「学生の分際で強がるな。」
そう言った後、舞は付け加えた。
舞　「来年からね。」
二人は、食事に行ってから別れた。
和は車を降りる時、昨日車の後部座席に置いた、十六島の開発の企画書が入った紙袋を手に取り、レンタカーを返し、寮へ帰り着いた。
そしてミーティングを終え、一息ついてから、企画書を読みだした。
それは、父　拓海の企画書。

プロジェクト名
『滞在型マリンレジャーと地域社会との融合（持続可能な地域社会の共創）』

和は、息をつくことも忘れていたぐらい、心を奪われた。
そして、読み終え冊子を閉じたとたん、まるで過呼吸のように息を乱した。
眠れなかった。
翌朝六時過ぎ、和は里美に、涙を流し震えながら電話した。
和　「母さん。俺、父さんのこと。十六島のこと。もう少し詳しく知りたい。お願い。」
里美は少し間を置き、小さい声で「うん。」と返事をした。里美も電話の向こうで泣いている

様子だった。

数日後、里美から、拓殖建設へ日時を指定され来るように連絡があった。
六月下旬の訪問の日、和は受付で名を名乗ると、里美が迎えに来て役員室へ案内した。
和が椅子に座っていると、里美が常務を連れてきた。かつて部長だった渡部常務である。
渡部　「ようこそ、渡部です。以前お父さんとともに、仕事をさせてもらっていた。」
和　「ありがとうございます。突然ご無理を申しあげ、すみません。」
渡部　「いやいや。資料は部外秘でお渡しすることはできないが、ここでゆっくりと見てください。」
そう渡部常務が話し、部屋を出て行った。
次に里美が連れてきた職員が、プロジェクターを設置し、当時拓海がプレゼンした時の記録映像が映し出された。
久しぶりに目にする父だった。
そして、拓海が当時しようとしていたことは、今自分が大学で学んでいること、そのものであった。
その後、当時の会議録を見させてもらった。
栄一との口論や拓海の熱い想い、、、。
鳥肌が立った。

気づけば、出していただいたお弁当を食べることもなく、部屋には夕日が指してきた。
ひとしきり読み、感慨にふけっていたところ、斎藤という企画課長が里美とともに役員室に入ってきた。
斎藤　「こんにちは。斎藤です。」
和　「こんにちは。」
斎藤は、あいさつした後、次の言葉がなかなか出なかった。
約一分もたっただろうか。ようやく斎藤が沈黙を破った。
斎藤　「僕が、君のお父さんを助けてあげれなかった。あの日。」
そう言った斎藤の見開いた真っ赤な目から、ほおをふた筋の涙が伝い落ちた。
斎藤　「何年経っても、私は悔いてます。あの瞬間に、何にもしてあげれなくて。」
里美は、泣きながら言った。
里美　「斎藤さん。もう、本当にいいんです。自分を責めないでください。主人が決めた行動なんですから。」
斎藤は、声を絞り出した。
斎藤　「お父さんの意志は、今も深く根付いています。海の日に、どうか十六島にいらしてください。」
和は、里美とともに家路に着くと、七海はすでに帰宅していた。
三人は、テーブルに着いた。
和は、二人の前で涙が止まらなかった。

今日の様子を聞いた七海がこう諭した。
七海　「海の日。行ってらっしゃい。チケット取っといてあげるから。」
和は素直に、「ありがとう」と七海に言った。
そして、和の心は定まった。
就職希望先を方向転換し、日々インターネットで調べたり、大学の就職課へ足を運び助言を求め、『ここぞ』という先に絞りきった。
そして数日後、和は監督室を訪ね、十六島へ行くための三日間の特別休暇申請を提出した。
和の表情の変化を窺い知る飯塚監督は、肩を『ポンッ』と叩き快諾した。

和が出雲空港に到着すると、舞が迎えに来てくれた。
舞とあとで会う約束をし、啓介の家に到着すると、いつものように啓介は正子と外で待っていてくれた。
そこで和が目にしたものは、、、。三角巾で右腕を吊った啓介だった。
和　「じいちゃんどうしたの？」
啓介　「まあいーけん（まあいいから）、あがらっしゃい。（上がりなさい）」
居間に上がってテーブルにつき、正子がお茶を準備している時もう一度啓介に聞いた。
和　「で、どうしたの？」
啓介　「まあ、ずっと痛かったども（痛かったけど）、こないだから（この間から）もげーやに痛なってのお（手が外れるくらいに痛くなって）、医者はん（医者さん）が言っとったわ。（言っていた）筋肉がもみくちゃになっとーだいなんだい（もみくちゃになっているとか色々と言っていた）。」
お茶とお菓子を持って正子が話に加わってきた。
正子　「一か月前に手術してねえ、こないだ（この前）退院したとこ。あと一カ月だとね（あと一カ月で治るらしい）。」
啓介　「なんだい（聞いたところによると）和も手術したらしいのお。」
和は傷跡を見せた。すると内視鏡手術を知らない啓介は笑ってこう言った。
啓介　「さなんきゃい（そりゃあ大したことない）、ハチが刺いたやなもんだがや。（ハチが刺したくらいのわずかな傷口じゃないか）」

そしてこう続けた。

啓介　「まあ、もつかすこと（難しいことを）考えらすこに（考えずに）、怪我したらなおしゃえわな。（怪我したらただ治すだけ）おかけで、耳鳴りも楽んなったず。（楽になったよ）」

啓介は、耳もよく聞こえるようになり、そして何よりも饒舌だった。

そして、和は、『こんなポジティブなじいちゃんにもう少し早くケガのことについて話せればよかった』と思った。

昼ご飯に、刺し身とトコブシの貝飯とあら汁をいただき、食事が終わった後、啓介にお願いして山の中腹にある錦織家の墓へ上がった。

そこは、十六島湾を見下ろすことができる場所にある。

二人は、花を手向け（たむけ）、線香を灯し、手を合わせた。

そして、すぐ近くの場所へ胡坐（あぐら）をかき、和は啓介から拓海の話を聞いた。

啓介　「あそこんとこに（あそこに）、おっけなもんをたてー（大きな建物を建てる）計画だったがや。（計画だった）和もだいしゃしっとーだーがぁ。（少しは知っているだろう）」

和　「うん。この前、拓殖建設にもおじゃまして、色々と話を聞かせてもらった。」

啓介　「ほんなら（それなら）、その話は良しとして。その前段（そこに繋がる前の話）

があってのぉ。拓海が、十五歳の時だったわな。（だった）都会のほうから、ウェットスーツを着たダイバーが、アワビ、サザエなど魚介類を捕っとってのお。（捕っていた）太っさんとそいつやつ（そいつら）捕まえただがぁ。（捕まえたんだ）地元の人には、えかっこしーだったがのぉ（かっこが良かったが）、拓海はえらいショック受け取ったわ。そーで、おとなんなって（大人になって）プロジェクトの説明の前にわしに会いに来てごいたわ。（会いに来てくれた）『みんなに説明する前にわしに話さないけん』って。そーで『なんとかダイバーと一緒にいい具合にできんだらか（いい関係ができないだろうか）』って。」

啓介は続けた。

啓介　「せから（それから）言っとったわ。『あの企画したのも、ここの地域、伝統や漁業も含めて、守りたい。なんとかして、次に繋げたい』って。ほんに、おらやつより、なんぼかここを守りたいって想っちょったかもっしぇん。（自分たちよりまして、ここを守りたいと想っていたかもしれない）拓海がなーなってから（亡くなってから）、十年経つだーも（経つけれど）、まだわっせられんがぁ。（忘れられない）あぎゃんふに（あんな風に）やってごいたもな。（やってくれた息子のことを）」

和はしばらく会話もせず、きらきらと輝く十六島湾の水面を眺めた。

その時啓介は、下を向いて泣いていることを和に知らせないようにした。

二人は家に帰って、和は正子に水中眼鏡を借り海へ向かった。

石積み防波堤に着くとすぐ、Tシャツと草履を脱ぎ、突端めがけて小走りに駆けて行き、脇目も振らず一目散に海へと飛び込んだ。
そして、水中眼鏡をつけ潜った。
やはりきれいだった。
この前思い出した高校三年生の時の海のままだった。
ずっと、ずっと変わらないままだった。
石積み防波堤に上がる手前の穴んぼにボッカが今日もいた。
和は啓介の家へ帰ると舞から電話がかかり、待ち合わせの小学校のそばへ行くと、小学校の校庭で男の子と女の子がキャッチボールをしていた。
子供たちはキャッチボールをやめ、ボールを軽く投げながら少しずつ近づき、三メートルくらいになったところで手から手へ腕を軽く回転しながらトスして渡し、クールダウンした。
まるで自分たちの昔の姿を見ているようだった。
舞は知っている子供らしく、グローブとボールを貸してもらい、和と舞はキャッチボールをした。久しぶりのキャッチボールだった。和が投げるボールを見た子供たちは、「すっげぇ、兄ちゃんすっげぇ」と大喜びをした。
すると、舞は「和のモノマネするよ」と言い、和の投球練習から投球するまでのルーティンの真似をしだした。
舞　「さあて、錦織和君。プレートから6フット足を出し、少し土を掘りました。そこへ再び左足を置きなおし、目線の先にボールをやり、リリースポイントを確

認しました。そして三球、練習球を投げたあと、キャッチャーからボールを受け取り、いったん立ち止まってグローブを胸に、、、、。」

すこし、舞は立ち止った。

そして和に尋ねた。

舞　「何か言ってるよね。プレートに着く前のここで何か言ってるよね。」

和　「ああ、、、。」

舞　「何？小学校の時から、『願い事か何か言ってるな』って思ってたけど、、、。うちとウェブの交換したあとぐらいから、、、。高校の最後の地区大会の時も。それから去年も、、、。ねぇ何？」

和　「うん、、、。」

恥ずかしがっている和に、舞はせがんだ。

そして和は言った。

和　「ま・も・る」

舞はその場でしゃがみこみ、上を向いて大きな声で泣きだした。

舞が泣いているのを見た子供二人は、和を指差しながら、『ここの地域でこういう場面に昔から唄う歌』を合唱した。

子供　「いーけんわー、いーけんわー。せーんせいにー言ってやろー。」

歌い終わった子供たちは、学校へ走って行った。
和は、涙が少し治まった舞に近寄った。
舞は立ちあがり、和に抱きついた。
和も両手で舞を抱きしめた。
子供たちから、「知らないお兄ちゃんが舞ちゃんを泣かせた。」と訴えを聞いた、海洋生物の餌やりに出勤をしていた教頭は、グラウンドに出ると二人を見て微笑んだ。
そして。
教頭　「こらー。ここは、学校です。」
和と舞の担任の先生だった教頭は、わざと大きな声で注意した。
和と舞はその声に気付き、「すみませーん」と言って手を繋いで走って逃げた。
海辺を二人が歩いている時、舞の携帯電話が鳴った。
舞　「うん、わかった。すぐ帰る。」
和　「なんかあったの？」
舞　「お父さんから。『今から和を連れて来い』って。」
和　「えっ」
和は『やばい』と思った。
しかし、逃げようもなく、覚悟を決めて舞の家に行った。
家に着くと、舞のお母さんが二人を応接間へ通した。
その後すぐに落合が入ってきた。

あいさつを交わし、一口お茶を口にした後、落合が切り出した。
落合　「実はな、、。」
和は、『絶対叱られる』そう思った瞬間だった。
落合　「これは、俺が持っとくもんじゃないけん、やーわ（あげるょ）。」
落合はコンパクトディスクを出し、舞にセットするよう言い、「まあ聞いてまっしゃい（聞いて見れ）」と言った。
父の笑い声、そしてみんなと楽しそうに話していた。
この地域の資源と未来を、、。
涙がこぼれて止まらない。
舞のお父さんの前でも、はばからず声を出して泣いた。
落合　「こんなにわしらのこと想ってくれとった。（想ってくれていた）」
「こんなにわしらを助けようと考えてくれとった。」
「こんなにここを守ろうと、、。」
落合も、舞も泣きだした。
少し経ち皆の涙が治まってから、落合は電話をしだした。
落合　「おい栄一か。こーから飲みに出らこい。（これから飲みに出るぞ）家まで迎えに来てがっしゃい。（家まで迎えに来てくれ）」
数分後栄一が迎えに来て、二人に連れられた和は、酒処【万作】に着いた。
落合　「マスター、カワハギの刺し身とのどぐろの煮つけを三つずつ。」

これが拓海の好物だと教えてもらい、和は堪能した。
初めて味わう地酒の吟醸酒のうまさとともに。
少ししてから、マスターが、「これもだよ」と【穴子の白焼き】を出してくれた。
さっぱりしながらも、何とも言えない旨味だ。
拓海の企画の話に花が咲いた。
そして、その話も尽きたころ、栄一が尋ねた。
栄一　「そーでおまえどげすーや。(それで和、これからどうするんだい)」
和は、きっぱりと答えた。
和　「はい、今、協同組合関係になん社かエントリーしています。」
落合　「さ、どこのことかい。」
和　「漁業協同組合や森林組合などです。」
栄一　「何や？(なんだと？)ほな何でうちらんとこ受けらだったかい。(何でうちの漁業協同組合を受けなかったのか)」
和　「この前ようやく決心して、、、。遅かったんです。まぁ、僕がいけないんです。」
落合　「まっ、えわな。(まあ、しょうがない、良しとしよう)」
落合と栄一の漫才のような掛け合い話で店中が盛り上がった後、「そろそろ明日がはえけん(明日の朝が早いから)帰らこい。(帰ろう)」と落合が言い、タクシーを呼んで万作を後にした。

拓海の同僚だった斎藤が話していた海の日。
この日何があるのかも解らないまま当日を迎えた。
その日は朝早く目が覚めると、啓介はすでに起きていた。
そして、啓介に連れられ石積み防波堤へ向かった。
とても素晴らしい天気で、しかも波一つ立たない凪の日だった。
朝九時になったころだろうか。
啓介がぽつりと呟いた。
啓介　「拓海がしたかったことの、ほんの一部かもっしぇんがのぉ。(ほんの一部かもしれないが)」
「数年前から、こぎゃンふにしてまっとーだ。(こんな風にしてもらっている)」
その瞬間だった。
沖の防波堤の向こう側から、何隻もダイバーを乗せた漁船がやってきた。
そして丘からは(陸の方からは)、何人もの人が大きなビニール袋を持って海岸沿いを歩き始めた。
それは、海と海岸の一斉清掃だ。
斎藤がこっちに向かって手を振った。
ダイバーたちは各々海に飛び込み、岩に引っ掛かった漁具や釣り具、ゴミを回収している。
また、海岸のゴミは袋に入れられ海に放り投げ、それをダイバーが回収し、ロープに結ぶと、漁船にいる者が手繰って集める。

その後、漁船のゴミは、少し沖にいる建設業者の台船に集められていった。
和は感動のあまり、両手を握りしめ身動きもできないほど身体が硬直した。
和は少し様子を見ていた後、一念発起、迷うことなく海岸へ行き清掃活動に参加した。
作業を終えると、地元の人に連れられセンターへ行った。
そこでは、栄一に真、落合など漁協の職員に地元の人々が、べべ飯のおにぎりに、あら汁を作り、そして大敷網で獲れた新鮮な魚を焼き、参加者へ振る舞っていた。
斎藤がいた。
和　「その節はありがとうございました。斎藤さんまで、、、。」
斎藤　「数年前からこの活動を始めたんだ。真君やセンターの職員さんたちと相談して出来ることからやってみようと。地元のダイバーや拓海さんの知人にも声を掛けて、毎年少しずつ増えてきたんだ。今年は百人くらい集まってくれた。」
和　「なんと言っていいのか、、、。」
斎藤　「そうじゃない。僕たちも海が大好きなんだ。」
「もう少ししたら、今までの活動や話したことが形となる。みんなと一緒に再出発するんだ。これも小さな規模からなんだが。」
その話の続きを聞いたが、斎藤は「この先は企業秘密です。」と言って教えてくれなかった。
皆、あら汁をお代わりした。
ダイバーの人たちをはじめとするボランティアの方々を見送り終わると、地元のものだけで

集会所で直会（なおらい）が催され、参加をためらっていた和だったが、舞や同級生からの誘いもあり啓介と正子とともに参加した。

ご婦人　「あらやだ、和ちゃんじゃないの。あんた大きくなったねぇ。」

男がた　「しゃん事言っちゃーなや。（そんなこと言ってやるなよ）もう大学四年生だず。（四年生だよ）」

ご婦人　「えーあんさんになったねぇ。昔はこぎゃンもんだったにねぇ。」

ご婦人は、床から1m位のところへ手のひらをおき、みなを笑わせた。

男がた　「だあずばっかいわっしゃーな。（馬鹿、そんなことはない）」

役員　「もう、しゃん事どげだいいーけん（そんなことどうでもよい）、和、よー帰ってごいた。まぁ、やらっしゃい。（一緒に飲もう）」

皆が、和を懐かしみ、和のところへ酒を手にした人々が行列をなした。

その夜は大いに盛り上がった。

翌日、和は休みを取ってくれた舞と出雲大社へ参拝をし、その後、神門通りを散策し、出雲そばを食した。

それから舞の車で、近年整備された十六島風車公園に向かった。

この日は、ふわふわとわた雲が浮かぶ晴天であった。

道中、浮かれない顔をした和に、舞はこう尋ねた。
舞　「どうした？なんかあった？」
和　「いや、、、、。」
和は、首を横に振りながら、物思いにふけっている様子を見せたままだった。
二人は、十六島風車公園に到着した。
真っ青な空と、風車の鮮やかな白とのコントラスト。
ヒューン、ヒューン、と音を立てて力強く回る風車を間近に見ることができる。
圧巻である。
二人は眺望がきく小高い丘へと登ると、そこは遥か遠くまで美しい海岸線を見渡せ、十六島湾を一望することができた。
和は少し眺めた後、ベンチに座り込むと、目頭を両手で覆い泣きだした。
舞　「どうした？」
和　「うん。」
和は、正直な胸の内を話し始めた。
和　「僕は、父さんが亡くなった時、ここから出て行きたい気持で東京に行った。それから、父さんが亡くなった悲しいこと、こっちでの思い出、つらいことや苦しいことから、、、。そして怪我のことも。自分の心に真正面から向き合わず、突き詰めて考えようとしなく、いつも逃げていた。」
和は少し間をおいてからこう続けた。

和

「だけと、こっちに帰ったら、皆が温かくこんな僕を迎えてくれる。たったちょっとしかここにいなかった僕に『よー帰ってきたなー』って。おじさんも僕を思って本気で正面から叱ってくれる。僕は気付かなかった。僕はみんなに支えられて生きている。いつも斜に構えて生きてた僕に、真正面から接してくれる。苦難を乗り越えようと一歩前進しようと考えなかった僕を、おじさんも叱って、大学進学も背中を押してくれた。将来どうしたいか、と言うこともやっとここへきて考えれるようになった。」

舞

「こっちの人はね。悪い事したら本気で叱ってくれて、いいことがあったら一緒になって喜んでくれるの。みんな、この地域のことが好きで、ここに住む人のことが大好きなの。」

「あっ、そうだ。うちがちょっと凹んだ時、行くところがあるの。そこへ行ったら、すーっと心が晴れるの。さっ、ここ降りようか。」

舞は、和の手を引っ張り歩き出すと、階段では和の腕にしがみつきながらゆっくりと降りた。

平田の町で食事をする約束だった二人は、舞が提案する場所から平田の町へ、ちょうど頃合いの良い時刻に出るバスがあることから、舞の家に車を置き、バスに乗り換えその場所へと向かった。

バス車庫がある釜浦の広場から海辺におり、サンダルを脱いで砂利の上を岩まで歩み、やや平らな岩に二人腰かけた。

二人は足を海につけると「気持ちいいね。」と言ったっきり、そう会話をすることもなく、ゆ

っくりと流れる時を満喫した。
少しずつ、少しずつ太陽が西へと落ちて行く。
六時半ころになると、二人は海から上がり道沿いを東へと進み、少し離れた【小島】を眺めた。
舞が言うよう、わた雲の隙間から【小島】を照らす日射しは、とても神々しく、本当に心が洗われる光景だ。
舞が話しはじめた。
舞　「うちのおじいちゃんね、とても腕のいいかなぎ方だったらしいの。おじいちゃん、かなぎから帰って、みんなとご飯を食べて床に入る前、『今日もいい一日だった』って口癖だったの、、、。ここの場所はね、うちが小学二年のころにね、『一番夕日の奇麗なとこだよ』っておじいちゃんに教えてもらった場所なの。」
舞は続けた。
舞　「そのおじいちゃんがね、ここのゆっくりと落ちてゆく夕日を眺めながら、いつも私にこう話していた。『舞。えらいし（偉い方）は、なんぼ金持ちだらと貧乏だらと（いくら金持ちだろうが貧乏だろうが）時間だけは平等だっていわいが（言われるが）、わしゃ、ちがーと思うだがぁ。（違うと思うんだ）せわしなげにいけっちょーもんと（日々せわしく生きているものと）ここでいけっちょーもんと（ここで生きているものと）は、ちがーとおもーだがぁ。（違うと思うんだ）せからのぉ（それから）、過ごし方もあーわなぁ。（過ごし方もあると思う

んだ）舞。一日一日を一生懸命、大事にすごさっしゃいよぉ。（過ごすんだよ）』
って、、。ここに来ると、思い出すんよ、、。おじいちゃんの言葉、、。ようやく
意味が分かってきたの。」

和は、瞬きもせずに景色を見つめていた。
太陽は、わた雲を抜け出ると夕日へと姿を変え、波のない水面にその輝きを真っ直ぐに照らした。
二人は広場の西端に戻り、和は、舞が言うとおり左手を落ち行く夕日にかざすと、舞は右手の親指をそっと和の親指に当て、人差し指、中指、薬指で和のそれぞれの指を包み込むように、そして和の指の背中を滑らせ、そーっと押し込み、器用にハートを形作った。
舞　「動かないでね。」
舞はそう告げると、左手で持った携帯電話で何やら写そうとしている。
和　「何？」
舞　「カップルでこれ撮ったら、幸せになるって。」
なかなか上手くとれない舞。
そして、夕日が水面についてしまう時間、バスがやってくる時刻が迫ってくる。
その時、平田の町へ向かうバスが到着し、中から真が降りてきた。
舞　「真さん、いいとこに来た！お願い撮って！」
真　「おー、わやちゃ（お前たち）何しちょーや。（何をしているんだ）」
真はそう二人に問いただすと、バスに向かって、「運転手さん、ちょっと待っちょってがっし

やい！（ちょっと待っていて）」と大声で叫んだ。
運転手は、ニコニコした顔をし、左手を挙げ答えた。
真は、舞が言うとおりに舞の携帯電話で写真を撮ると、二人は真に頭を下げ、バスに乗り込んだ。
真っ赤な夕日の中に立つ真に見送られ、やがてバスは釜浦車庫を出発した。
舞は待ち受け画面にさっきの写真を設定すると、和に自慢げに見せた。
それは、二人のハート型の手の中に納まった、夕日と水面に映った【ｉ】の文字。
とても美しかった。
和も、舞から贈られた写真を待ち受け画面に設定した。
和の顔つきは、とても穏やかに変わった。

翌日
和の心は、もうなんの陰りもない。
東京行の飛行機に乗る前、和は舞に言った。「秋季リーグ戦に必ず間に合わせる。就活も決める。」と。

しかし数日後、和は再び啓介の家にいた。

東京に帰って間もないころ、栄一から電話があったからだ。
栄一　「和、お前うちの会社（漁協）受けらんかぁ。内定したもんが辞退して、再募集かけとーがぁ。ホームページ見てみらっしゃい（見てみろ）。」
電話中、ホームページを見た和は即答した。「受けます。」
一次試験も受かり、二次試験の面接会場へ入ると、そこには、山根支所長が常務という名札の席に座っていた。
山根常務は、和の顔を見ると、にこりと笑った。
他の面接官の質問に和は想いを淡々と話した。
【持続可能な地域社会への想い】、【資源管理への想い】そして【漁村地域における漁協職員の役割】。
和が話す姿は、一つの迷いもなく、何やら自信がみなぎっているようだった。
そして三日後、和のもとに【採用内定通知書】が届いた。
和は真っ先に舞に連絡した。舞は、まるでプロポーズされたかのように涙ながらに喜んだ。
その後、里美、七海、啓介に正子、栄一にとお礼を述べた。
みんな自分のことのように喜んでくれた。

和の学生最後の夏も終わろうとしているころ、ようやく投球練習で捕手を座らせて投げれるようになってきた。
秋季リーグ戦の予想では、東京産業大学はとても厳しい評価であり、対照的に二部の日本国際大学は『一部への昇格は間違いないだろう』との下馬評が飛び交っていた。

秋季リーグ戦が始まった。
和には背番号が渡されず、そして、同じく背番号を渡されなかった選手とともに、他の連盟の大学や社会人のチームとの練習試合に出ていた。
リーグ戦の終盤以降に出場機会がありそうな選手は、こういう別行動をとらせられる。
和は、次第に結果を残していった。
和は最終戦にようやく背番号をつけてベンチ入りしたものの、結局和の出番はなく、東京産業大学は勝ち点を挙げることなく秋季リーグ戦最下位で入替戦出場が決まった。
対戦相手は、下馬評通り日本国際大学である。
入替戦、和は背番号　１１　をつけてベンチに入った。
東京産業大学初戦敗退後、二試合目和は登板した。強い気持ちで頑張り、この日にようやく間に合ったのだ。
東京産業大学、決して負けられない試合。
結果は、五安打完封勝利。

気迫の投球だった。
そして最終戦。
一昨日から上京している舞は、里美、七海とともに並んで応援席に座った。
七海　「今日は出るかどうかわからないけど、泣いても笑っても、和の試合は今日で最後ね。」
里美　「そうね。ホントに舞ちゃんも、七海もありがとうね。」
舞　「いやいやそんな。」
里美　「結果はどうあれ、笑顔で見納めしたいわ。」
里美の「約束よ」と言う言葉に、舞と七海は頷いた。
そして、それぞれのカバンからラジオとイヤホンを取り出した。
里美と七海は、舞のトートバッグを見て微笑んだ。
実況　「いやあ、それにしても昨日の錦織君。完全復活のナイスピッチングでしたねえ。」
解説　「本当にナイスピッチングでした。」
実況　「球速は、百四十キロそこそこでしたが、気迫のある投球で、見事完封勝利。これで、今日いよいよ決戦です。本日の第三戦、東京産業大学は杉原君。修実高校です。」
息がつまる投手戦が繰り広げられ、八回終了し、０対０。
９回表、東京産業大学の攻撃、ツーアウト、ランナー一塁。
実況　「打ったぁー。３塁コーチャー回したっ。バックホーム。どうだ、どうだ。」

「セーフ、セーフです。三塁コーチャーの小田君、迷いなく一塁ランナーを回しました。得点です。東京産業大学に虎の子の１点が入りました。」
解説　「いやあ、よく回しましたが、ランナーも小田君に全幅の信頼ですね。後ろを振り向くことなく、まっしぐら。ナイスランですねぇ。」
東京産業大学は、９回表に貴重な１点を挙げ、いよいよ最終回の裏の守りである。
杉原は、先頭打者にセンターオーバーのツーベースを打たれた。
そして、次打者にカウント、スリーボール、ワンストライクから、杉原は、ワイルドピッチを投じてしまった。
実況　「おっと、ここでワイルドピッチです。ボールがバックネット付近を転々とする間に、二塁ランナーは三塁へ。そしてその間バッターランナーは二塁へ到達しました。さあて、日本国際大学、逆転のランナーが出ました。東京産業大学、ここからは今リーグ当たっていますクリーンアップを迎えます。」
「飯塚監督が出てまいりました。どうやらピッチャー交代ですねぇ。」
七回からずっとブルペンで、いつでも投げれるように準備をしていた和が、監督に呼ばれた。
実況　「どうやら、昨日に続き錦織君です。実は、昨日試合が終わってから、錦織君に『ナイスピッチング、ご苦労様でした』と話したんですが、錦織君『今日、一球でも投げる可能性がまだありますので、しっかりと準備しておきます』と言っていました。さあ、飯塚監督がボールを渡しました。」
いつものように練習投球に入る前、プレートから、６フット足を出し、少し土を掘ってから

そこへ左足を置きなおし、目線の先にボールを置き、リリースポイントをチェックした。
七球の練習球を投げ、そしてキャッチャーからの送球を捕球しバッターを背にしたとき、胸にグローブをおき『守る』と唱えた。

実況　「さあて、ノーアウト、ランナー二、三塁で、二部リーグの首位打者、平山君、関東西高校です。」

解説　「このバッター、ホント、色んなことやってきますからねぇ。」

実況　「マウンドに詰め寄ったキャッチャーが帰ってきて、さあ、プレーがかかりました。」

カウント、ワンボール、ワンストライクとなった。

実況　「さあ、三球目。錦織君、、、。ここでランナー走った。スクイズです、スクイズ。」

「ファールボールです、打球はバックネットです。どうやら、三塁ランナーが走るのを見て、ショートバウンドを投げたようですねぇ。」

解説　「セフティーバンドのような構えでしたねぇ。」

実況　「さあて、プレーがかかって四球目。インコース見逃し三振。平山君腰を引きましたが、ストライク。素晴らしいボールです。ワンアウト、二、三塁です。」

「続くバッター四番です。」

「初球、引っ張った、痛烈な当たり。しかしサード胸で落とし、ボールを拾って三塁ランナーをけん制し、一塁に投げアウトです。素晴らしいプレーです。」

「ここで、キャッチャー、球審にタイムを要求しました。」

内野陣が集まる前、サードの瀧は一目散に走ってマウンドにやって来た。
それを見て、和は右手を顔の前に立て、瀧に「スマン」と言った。
瀧　「『スマン』じゃなくて、『サンキュー』でしょ。これで高校の時の借りが返せた。」
瀧はそう言い、はしゃいだ。
内野陣が集合すると、ベンチからマウンドに小田が小走りでやってきた。
実況　「ここで、小田学生コーチが出てまいりました。次は今リーグ打点王の五番バッターです。敬遠ですかねぇ。」
解説　「まあ、ないでしょうね。飯塚さんは。」
小田　「よし、あと一人だ。守りきろうな。」
皆　「おっしゃ。」
小田　「よっしゃぁ、ここ集中、徹底していこう。」
皆　「集中、徹底していこう。おっしゃぁ。」
実況　「さあ、プレーがかかりました。どうやら勝負ですね。」
解説　「そうですよね。」
カウント、ツーストライクと追い込んだ。
そして、和は捕手からのボールを捕球した後、バッターを背に唱えた。
和は、プレートを越えて振り向くと、もう一度、グローブを胸に、今まで誰も見たこともない闘志あふれる形相で「絶対に、守る」と言い、プレートに入った。
実況　「錦織君、大きく振りかぶって三球目、投げた。」

「ストライク。インコース見逃し三振。東京産業大学、一部を死守しました。」
この瞬間、舞は、両手を突き上げ、その後まるで子供のように泣きじゃくった。
七海は、座ったまま両手で顔を覆っていた。
里美は、いつからだろうか、膝の上でハンドタオルを両手で持ち、そこに顔をうずめていた。
三人とも、約束を守ることができなかった。

年が明け、梅が咲き、桜の開花が近づいたころ、東京産業大学卒業式の日を迎えた。
卒業式は滞りなく終了し、和と小田は、寮へ最後の荷物のスーツケースを取りに寄った。
そして、寮を出る時、一度振り返った。

【艱難汝を玉にす】

【あとみよそわか】

二幅の大きな掛軸。入寮した時には意味は解らなかったが、今、十分知ることができる。
和は想った。

大学へ進学させてもらったこと。
色々な苦悩がありながらも、乗り越えることができたこと。
様々な出会いがあったこと。
学んだこと。
そして、高校の最後の夏の大会で逃げなかったことも。

全てがよき想い出と振り返り、感謝した。
和と小田は、深々と礼をし、頭をあげると、そこには飯塚監督の姿があった。
「また、いつでも寄ってくれ。」と笑顔で送ってくださった。
和はバス乗り場へ、小田は親が待つ駐車場へと向かう時、二人は荷物をその場に置き、男同士のハグをした。
「元気でな。」「またな。」そう二人は言葉を交わし、それぞれの方向へ向かった。
そして二人は、あえて振り返ることはしなかった。

和は、平田支所で真とともに勤務することとなった。
毎日、充実した日々を送った。
日増しにここでの生活にも溶け込み、地元の消防団にも入団し、スポーツ少年団の指導の手伝いもするようになってきた。

海の日の前日
和は真とともに、十六島チャレンジスクール開講式の準備に追われた。
十六島チャレンジスクールは、以前拓殖建設が建設した二つの棟の活用策として検討され、拓殖建設が地元へ無償提供し、多くの賛同する法人、団体、個人等の支援を受け、滞在型の産業体験の研修や臨海学校、ジオの学習活動拠点などとして地元が運営する施設である。
和と真は、『一歩踏み出す勇気を育む』と題したパンフレットをテーブルに置き、そして祝賀会の準備をした。明日行われる海と海岸の一斉清掃に参加するダイバーなどもこのスクールに賛同してくれ、資金提供のほかスクールで受講する青少年に対し、地元の漁師とともに、漁業や潮間帯の生物と言った自然環境学習の指導もしてくれるボランティアスタッフである。
十六島チャレンジスクール。和が真に、名称の由来を聞いたところ、腕組をした真はしみじみと語り始めた。
真　「おらが社会人になりたてで、松江に勤務しちょー時、松江のラグビーサークルに入っただ。そこのマネージャーがかわいてのお。(かわいくてね)その子に背

番号をやらこい（あげよう）っつーことになってのお。16　の背番号を渡しただ。そのこと思いだいてのぉ、そーで、『ラグビー』、『トライ』、『挑戦』、『チャレンジ』って考えついただ。」

和　「そのかわいい人が今の奥さんですか？」

真　「そらちょっこーちがーだだものお（それはちょっと違うけどね）。」

由来はともかくとして、『いい名称だ』と結構評判になった。

今宵は、明日の一斉清掃に参加するメンバーや、法人、団体、行政の関係者を招き、皆で開校を祝おうとする【酒みづき】である。

栄一　「それでは、『只今から十六島チャレンジスクール開校を祝う会』を始めます。まず主催者を代表しまして、落合初代校長があいさつします。」

落合　「皆さま方には、ご多用中にもかかわらず、ご臨席を賜り厚くお礼申しあげます。ここまで至りましたこと、拓殖建設さま、漁協さま、そして多くの方々のご支援の賜物と重ねてお礼申し上げます。私は、初代校長を務めさせてもらいます落合でございます。何とぞ皆さまのご支援によりスクールが円滑に運営できますようお願い申し上げます。また、本日は、拓殖建設さまからは、渡部常務に斎藤課長さま、遠路はるばるお越しいただきありがとうございました。本当に色々とありがとうございました。そして本日お集まりの皆さま方、今後この施設の運営を通して、青少年の健やかな成長と、そして漁村地域、漁業がまた活

気づくよう、ひとかたならぬご支援をいただきますよう、切に重ねてお願い申し上げます。」

来賓の方々などのあいさつが終わった。

栄一　「それではお持たせいたしました。拓殖建設の斎藤課長さまとともに、この施設の活用策を検討して、今日まで準備を進めたうちの真に、一言あいさつと乾杯の音頭をとらせますので、みなさん、我慢して聞いて、そして盛大に乾杯しましょう。おい真、しゃんとやれやー。」

真　「えー、それでは。ここん方は、神無月を神有月と言いまして、そーほど神さんが集まらい（集まられる）とこですわ。ここのもーちょっこー（ここのもうちょっと）東ん方で、神さんがたがなげこと（長いこと）酒宴をやっちょーなったと（酒宴をしていらっしゃったと）風土記にも書いてあーますが、まっ、そこはかつての日本の中心の、今で言う【六本木】ですわ。つーとなーと（そうすると）、ここの十六島湾は【東京湾】ですわ。そーすーと（そうすると）、そこんそばの（そこのところの）センターは、まっ、【築地】っちゅう事になーわけですわ。（なるわけです）今はちょんぼー（今は少し）、当時のにぎわいがへっちょーますだーもが。（減っておりますが）」

ふざけた口調で話していた真が、感極まって泣き始めた。

そして、少し間をおいて続けた。

真　「皆さん、本当にありがとうございます。」
また涙し、中々次の言葉が出なかったが、頑張ってしゃべり始めた。
真　「何とか、わしも、そこにおる和も、子供バンバン作って、何年かかろうとも当時のように復活させますが、それまで少しお手伝いをお願いします。本日来られた方々、お手伝いいただいたこと、日記に書きとめて必ずや代々受け継ぎ、そして、もし皆様方の地域が困られたら、てご（手伝い）に行かせます。」
「それでは、ともに地域を、そして国土を守りましょう。カンパーイ。」
再び感極まって一人盃を上に挙げたまま左手で目頭を押さえている真は、乾杯の後、拍手喝さいを浴びた。

二〇一八年四月二八日

啓介と太は、船揚げ場に座り込み、漁具の手入れや明日のかなぎの準備をしていた。

そこへ栄一がやってきた。

栄一　「今年の産業体験やらなんやらの（産業体験やあれこれの）やり方で、落合さんによばいちょったわ。（呼ばれていたわ）」

啓介　「おー、栄やん。お前も来てや。どげだや、だいしゃ獲れーやんなったかい。（どう？いくらか獲れるようになったの？）」

太　「なんてて（なんと）、栄やんとこの晩ごはんは、こぎゃンアワビが今日も一人に一杯わけあーとや。（一杯ずつあるみたい）」

太は、さも四〇センチもあるように手を広げて茶化した。

栄一　「だいたい太おっつぁんが、わらわかいて（笑わせて）、手に力がひゃーらんやんなーし（力が入らなくなるし）、箱メガネは噛めんやんなーし。（噛めなくなるし）太おっつぁんが、『あららっ』って言ったけんみーと（言ったから見てみると）、入れ歯がついた箱メガネが、ドンブラコ、ドンブラコって流さいていっちょーだもん。（流されていったから）」

啓介　「だあずやつがぁ。（お馬鹿さんらが）おらだも手がふにゃふにゃになったがやぁ。（俺も手に力が入らなくなっただろうが）」

三人とも少し作業をし、明日の準備が終わり手を休めた時、栄一が話しだした。

栄一　「だも（だけど）、さっきも落合さんおらに言っとーなったで。（言っておられたよ）『和があと二、三回だも（でも）お願いにくりゃ、舞との結婚も許（ゆる）いてやーかの（許してやろうか）』って。」

太　「わわ、ゆーだねって（お前は、啓介には言うだないよって）言わいちょっただーがぁ。（言われちょっただろう）」

太は栄一の頭を小突き、続けざまに話した。

太　「おまえ、啓やん落合んとこ行って、土下座してホエホエ（泣いて泣いて）『舞ごせ（舞ください）』って、よつかえんやんなーで。（手がつけられないようになるよ）」

啓介　「だあずばっか言わっしゃーな。（馬鹿ばっかし言うなよ）だも、栄やん、よー（よく）かなぎ方になってごいたのぉ。（なってくれたなぁ）開講式が終わったら、いきなりかなぎ方になー言ってござーだけん、おべたわや。（かなぎ方になるって言ったから、びっくりした）」

栄一　「和も将来、子供育て上げたら、かなぎ方になるって言っちょーけん。（言ってるから）おらが継いどかんと（継いでおかないと）、和がかなぎ方になーときゃ、お前たちゃ死んどーだけん、誰んも教えーもんがおらんやんなーけに。（お前さんたちは、死んでしまっていて誰も教える者がいなくなってしまうから）」

二人　「だあずか、わわ。（馬鹿か、お前は）」

三人は、笑った。そして啓介がこう続けた。

啓介　「こーで（これで）かなぎも守れーかのぉ。あとは、銛だのぉ。こーがいつまでもつかのぉ。」

明日に行われる拓海の納骨と十三回忌の法事に出るため、嫁いだ奥出雲から里帰りした明子が、銛を二丁手にし近づいてきた。

明子　「和が近くの腕のいい鍛冶屋さんに日参して、ようやく作ってございたに。（作ってくださった）」

太　「おそだーがぁ。（ホントに？）やーわー、こらまた何だら。（わー、すばらしい）」

その銛は、啓介と太が見たとたんに、今使っている銛が新しかった時の姿のもの、いやむしろ素晴らしいものだ、と解った。

二人は、嬉しく銛を手にとって、そして胸に当て、天を仰いだ。

太　「そーでなんぼきゃい。（それはそうと、いくらなの？）」

明子　「いつばんたけやつだと。（タダだと）『使ってみて』って言っちょらいた。（言っておられた）そーで、『意見もらって改良したらセンターで売る』って。」

栄一　「アキちゃん、おらのは？」

太　「おまえはいがぁ。（お前はまだいいから）ここだわなぁ。」

太は栄一の顔を見て、左手で右腕を三度たたいた。

そんな馬鹿話をしていると、里美と七海を乗せた十六島バス停へと向かうバスが横を通り過ぎると、「ほんならの」と啓介は原付バイクに跨り（またがり）、『テンテンテンテン』っと軽い音を響かせバス停へと向かった。

太　「おまえ迎えにいかだってや。（迎えに行かなかったの）」

栄一　「納骨を前に、帰りは電車とバスに乗って、拓海に景色を見せてやるんだと。」

太　「ほにや。（そうか）また、里美さんは法事が終わったら、東京に行くげなのぉ。（東京に行くらしいね）」

明子　「年末の七海の結婚を済ませたら、こっちに帰ってくーげなょ。（こっちに帰って来るらしい）」

太　「そげかや。（そうなの）ほんならまた正月から賑やかんなーのぉ。（賑やかになるね）わーも、栄次が帰ってくりゃのぉ。（お前も、栄次が帰ってくればいいがなあ」

栄一　「そげだとまっしゃい。（そうだよなあ）」

バスは、正子が迎えるバス停に着いた。
お骨を抱いた里美と七海がバスを降りる時、啓介も到着した。
真っ赤に輝く夕日が水面を照らしている。
よく見ると、石積み防波堤の突端に、寄り添う和と舞の姿があった。

そして四人は確信した。

二人は支え合い、地域貢献の一助となることを。

僕は生きる

脈々と受け継がれた有形無形の地域の中で。

僕は歩む

生きとし生ける全てのものと。

僕は担う

あまたの艱苦（かんく）に気概をもって対峙（たいじ）し　ここに共創（きょうそう）ス。

守る。